秘蜜の刃

紗代

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは和修の訳あり半人間が死んで鬼滅に徹する物語。

目次

白代萼の死 1
白代萼は稼働する 11
白代萼の鬼退治 16
白代萼は居場所を得る 22
白代萼と蝶屋敷 26
白代萼の小噺 33
白代萼の呼吸 41
白代萼の最終選抜 47
白代萼の帰還 54
白代萼と風柱 60
白代萼と凶敵 67
白代萼と蝶屋敷2 75
白代萼と柱たち 85
白代萼は拝命する 91
白代萼と炭治郎 96
白代萼と柱合会議 103
白代萼の見舞い 115
白代萼と炭治郎2 124
白代萼と無限列車 132
白代萼と炎柱 145
白代萼と花売る街 155
白代萼と上弦の兄妹 165
白代萼≒■■■■■ 177
白代萼と炭治郎3 187

白代萼と柱稽古 ―― 195
白代萼の終わり ―― 204
嗣ぎくなぐ
エピローグ　プロローグ ―― 212
白代萼と侵入者 ―― 220
白代萼と似た者同士 ―― 226
番外編
御呼びじゃありません。 ―― 235

白代萼の死

「いいこと、誘」

——はい、お母様。

「私達『白代(あきしろ)』は代々和修宗家の陰を担ってきた家系。いずれこの現当主の私がいなくなりあなたがその役割を引き継ぐの」

——はい。

「和修の異端といえど曲がりなりにも私たちとて末席の者。役割に徹し、いついかなる時もあの人の……和修のために尽力なさい。白代に生を受けた以上、あなたに拒否権はないわ——いいわね」

——はい……承知致しました。

「そう、ならよかったわ。聞き分けのいいあなたの事だからきっと話さずとも解ってくれると思っていたけれど……流石私とあの人の子ね。あなたが私の娘で本当にうれしいわ」

母は笑顔で遠いところに心溶かしたように甘く言う。

「愛してるわ、誘」

「――ありがとうございます」

私は自分の名前がますます嫌いになった。

――――――

「白代(しろしろ)さーん」
「あ、白代(あきしろ)、です!!」
「え?あ、ほんとだ」
訂正しながら事務局のカウンターのところへ行くとやっと気づいたようだった。
「あ、白代上等すみません。こいつ新人なもので……」
「苗字が白代で名前が萼って珍しいですね」
「こら、おまえ!」
「あー、いいですよ。普通はそう書いて『しろしろ』って読むらしいですし、結構間違う人多いですから」
「申し訳ありません」
「いえいえ、じゃあ新しいＩＤカードもらっていきますね」
「は、はい!!」
新品のカードを受け取ると私はその場を後にする。向かう先は――和修本邸。

「せっかくの新品のカード、無駄になっちゃうかなあ……」
自分の名前の入ったカードをかざしながらため息を吐いた。
＊＊＊＊
本邸での目的は思ったより早く終わった。そりゃあそうだ。私が口を挟むまでもなくほぼ決定した呈で一方的に話が進んでいったのだから。
「しーろしーろさーん」
「わざとでしょ――ニムラ」
わざわざ間延びした大声で私を呼ぶニムラと遭遇した。ＣＣＧ内での気弱な一等捜査官キャラとは真逆の、相変わらず胡散臭い笑顔である。
「あはは、いつも白代邸か庭にしか来ない妹がこんなところ（和修宗家）に来てるんだから気になるのがボクってやつでして」
「そっか。そうだね。たしかに私はここに殆ど来ないから」
「……本当になんかあった？」
私の煮え切らない態度を察してかニムラも声のトーンを落とした。
「やっぱりニムラには隠せないねえ、うん。結婚するんだって、私」
「……思ってたより早かったね」
「んーでもこれでも待ってもらってた方なんじゃない？本当は１６の時からこの話あっ

たし」
「相手は？」
「それはまだ知らされてないけど……多分伊丙とかの方かどこだったか忘れたけど大企業の御曹司あたりだと思う。これ以上世界征服してどうしたいのかね、宗家は。まあ分家のほうが私の才能の意味があるって上は言ってたから分家の確率の方が高いだろうね」
「……そっかあ、ウテナ、結婚しちゃうのか」
「うん」
　二人で空を仰ぐ。
　昔はよくこうやって話してたけど、今はめっきりだ。そういえばあの時はリゼがいた。
「残念」
「そんなに？」
「……このこと、ルトは？」
「まだ会ってない」
「そっか、それならまだいいかも」
「なんで？」

「なんでもない」
「……変なニムラ」
「ちなみにキッショーさんは？」
「華麗に逸らしたね……まあいいけど。有馬さんは多分知ってるんじゃない？オークションとか他にもいろいろあるから忙しくて会ってないけど」
「ふーん」
　残念がったわりに淡泊な反応である。ニムラらしいといえばらしいけど。
「……こんなことならリゼ諸共逃がしておけばよかったかなあ」
「さすがに無理だよ。私は白代だもの、すぐにばれてニムラが死んじゃう」
「なんでこんなにうまくいかないのかな、ほんと」
「ね」
　空を自由に飛ぶ鳥を見る。いいなあ――私もああやって家とか国境とか関係なく自由になれたら……
　らしくないことを考えた。忘れよう。
「ウテナはさ、本当に結婚したいの？」
　ニムラはやっぱり核心的なところを突いてきた。やだなあ、なんで決まっちゃった今そんなこと言うのかな。

「……したくない。今のささやかな自由を、まだ謳歌してたい」
無理だろう。上の決定は絶対だ。私もニムラも、それを承知の上でこんな話をしているのだ。
するとニムラは――――笑顔だった。
「そっか、よかった。ならもうちょっと待ってて」
「なあに？悪だくみ？」
「そんなとこ」
リゼのことを含めてニムラは隠し事や悪だくみをするのが天才的にうまいのだ。でももう一度奇跡なんて起こせるのだろうか？
「……ありがとう、ちょっと元気出た」
「それはよかった。じゃ、自分もやることあるから。バイバイ」
「うん……またね、ニムラ」
ニムラに会えたことは不幸中の幸いだった。明日は衣装合わせだ。まだ相手も知らされていないというのに気が早いというか……いや、案外急いでいるのかもしれない。ほんの2年前までは都市伝説と謳われていた喰種が一般人に浸透してしまうほど活性化しているのだ。特別製（半人間）の私たちはそんじょそこらの野良喰種にやられるほど柔ではないにしても万が一、ということだろうか。

思いふけっても何も解決しないというのに考えながら歩いていたせいか、それとも日頃の行いのせいだろうか。こんな日に限ってあまり会いたくない人物と出会ってしまった。

「久しいな白代上等」

「お久しぶりです、政様」

和修政。和修宗家の御子息であり、卓越した作戦指揮により現在準特等捜査官まで上り詰めている。その冷淡とも言えるあり方は実父・吉時より祖父・常吉に近いとされる。というのが客観的なデータであり、私と彼の関係はそんな客観視できるものでも、ましてや楽観視できるものでもない。

私と彼は異母兄弟。妾と本妻の子供同士である。

私たちがなぜこんなふうに認識してしまっているのかというと、それは私の生家である『白代』のせいである。元々和修の役割のせいもあって異端扱いされていることもあるが先代が深く関係しているのだが……ここでは割愛しておくことにする。

「普段見かけないお前が宗家になんの用だ」

「は、常吉様と吉時様よりお話を賜っておりました」

「何？二人が……」

「なんでも私への縁談を整えてくださっているらしく「縁談か……ふん、下らん」……」

ばっさりと断じられた。こうして人の遮るのは彼の悪い癖だとは思うけど、今はありがたい。

「結婚だなんだと浮かれるのは構わんが、それで任務に支障をきたすなよ――お前の母親のようにな」

「――は、存じております」

「そうか、ならいい」

そうしてお互いにその場を離れようと歩き出す。

「――結婚が幸せなものであるとは限らない。結婚は余計なジレンマを増やす墓場だ。――私のようにな」

「――ご忠告、痛み入ります」

すれ違いざまのわずかな時間。その間でのこの会話に彼の本音の一部がにじんでいるようだった。

＊＊＊＊

翌日、私は宗家に仕立て屋を呼んでの大規模な衣装合わせを行っていた。

白に限らず青や黄、赤、ピンクなど様々なドレスを試着するだけで疲れる。結局シンプルな白のウェディングドレスに決まったのは衣装合わせを初めて約４時間ほど経っ

た頃だった。
　私が疲れて椅子に座っていると、いきなり扉が勢いよく開いた。
「久しぶりウテナ！会いにきた……」
「ああ、ルト。久しぶり」
　やってきたのは幼馴染のルトだった。私たちみたいな半端者ではない和修の純正の喰種。それがルトである。思えば有馬さんとニムラがいないときは殆どルトと一緒にいたような気がする。ちなみにこういったいきなりやってくるのもパターンとしてはよくある方なので、最初は驚いても別にその驚きが持続する事はなく、ローに戻るのだ。
「どうしたの、その格好」
「昨日、上に呼ばれてね。私に縁談だって。相手の情報はまったく入ってきてないんだけど今日は衣装合わせだって……この頃外の喰種たちも活性化してるし人間の方でも妙な動きをする連中が出てきたから……さすがに焦ってるんじゃない？」
「……俺、聞いてない」
「ごめん伝えてなくて、私も昨日聞いたばっかりだったから」
「……そう」
「あ、そろそろ着物の方の時間かな。ごめんルト私もう行かないと「その必要はないよ」
　冷たい平坦な声に振り向く間もなく背中からきた強い衝撃。気管？いや、心臓？何か

がいや血が気持ち悪いくらいこみ上げてきて
「ゴホッ」
　咳とともに口から出た血液が床と私の口を汚していた。
「る、と……？」
「ばいばいウテナ。大丈夫。君を嫁がせなんてしないよ、君は俺とずっと一緒にいるんだ」
「なん……で」
「大好き、世界で一番愛してる。君を手に入れられないのならもうこれしかなかったんだ……優しいウテナ、俺を許してね」
「はは……なに、そ　れ」
　こうして私の生涯は愚かしい恋によってはじまり歪な愛で幕を閉じた。

白代　萼（あきしろ　うてな）――享年２０歳。

白代萼は稼働する

匂いがする。

木と土の匂いと――――これはそうだ、酷く嗅ぎ慣れた

「(血の匂いがする)」

ゆっくりと意識が回復して目が覚めていく。

起き上がって辺りを見回すと木に囲まれていた。ここは山か森か林か。そのうえ血の匂いがするということは熊にでも襲われたのだろうか？にしては獣の匂いはしないし、人の匂いと――――なんだこの匂い。嗅いだことのない、血とはまた違った濃い鉄錆びの匂いがする。

スーツのジャケットをまさぐってみたけどこれと言って武器はない。非常用に持ち歩いていた小型クインケもない。

「(仕方ない、身一つでいくか)」

ここがどこかわからない以上人間と接触するのは避けて通れないだろう。もし運良く話が通じたらここのこともあの鉄錆びの匂いのことも分かるかもしれない。

クインケなんてなくても其処ら辺に落ちている木の枝だって立派な武器になる。私

は曲がりなりにも半人間だし感覚とすばしっこさには定評があるので、多少何かあっても大丈夫だろう。

私は大きな枝一本と小さな枝を集めながら現場に近づいて行った。

＊＊＊＊

鬼滅隊員ｓｉｄｅ

「う、うわあああああ！」

こんなに強いなんて聞いてない。こんなに数が多いなんて聞いてない。

任務の概要はいつもと変わらず人を食った鬼一体の駆逐。大規模な山の捜索だから小隊が組まれた。隊長は甲で、みんな俺より階級がうえで、だから大丈夫だと、油断していた。

「残りはお前ひとりになっちまったなあ」

「っ」

そうだ。みんな俺を除いて目の前の鬼に食われてしまった。

どうしたってもう終わりだ。せっかく最終選抜を通ってこれで家族の仇を取れると思ったのに。

「まだ、まだ死にたくねえよお」

「はっは！命乞いか？情けね「どこが」ぎゃあぁあああああ!!」

「!?」
突然の鬼の悲鳴に顔をあげると鬼の頭には木の枝が刺さっていた。
「うるさいな」
感情の乗っていない声と同時に枝の雨が鬼たちに襲い掛かる。それぞれ醜い悲鳴を上げて蜂の巣にされていた。
突然のことに俺の理解が追い付いていかない。どういうことだ?
すると俺の目の前に一人の人影が現れた。
「大丈夫ですか?」
そういって手を差し伸べたのは美しい少女だった。
「は、はい」
「それはよかった」
笑顔の彼女に見惚れたのもつかの間。鬼たちは起き上がり始めている。
「そこは普通死んでおくものだと思うんだけど」
「この、コケにしやがってええええええ!!」
鬼の一撃から俺を抱えて回避し体制を整える。
「あの、あれはどうやったら倒せます?」
「お、鬼は日の光か日輪刀じゃないと」

「……お兄さんのその刀がそれ？」
「あ、ああ」
「じゃあそれ、この場限りでいいんで貸してください」
「え、でもこれは君みたいな子が使えるほど軽くは……」
「いいからいいから」
「ちょ」
　半ば強引に俺の日輪刀を手に取って彼女は手慣れた手つきで鞘から引き抜いた。
「へえ、きれいな刀ですね……これならいけそうだ」
　そこからは少女の独壇場だった。これは教えなかった俺も悪いと思ったけど彼女は頸を落としたうえで鬼たちを刻んでいた。夜が明けてすべてが終わる頃には辺り一帯は仲間の血と肉片より鬼の血と肉片の方が多かった。
「これ、ありがとうございました」
　これまた笑顔で俺に日輪刀を差しだす少女。思えばなぜこんなところに、しかも夜更けにいたのだろうか。
「こちらこそありがとう。あの、君は一体……」
「私は白代萼。えーと、旅をしてるうちに道に迷ってしまって。ここはどこですか？」
「ここは東京府の南多摩郡だけど」

「え――――あ、あの今の年号は」
「？大正だよ」
なんでそんな当たり前のこと聞くんだろう。旅してて世の情勢に疎いとか？
「ま、まさかの」
「どうしたの？」
「い、いえ何でも！ちょっと先を急ぐので私はこれで！」
「え？」
そしてそのまま彼女は行ってしまった。
とにかく、今回の失態も含めて報告しなければならないだろう。
「あの子、大丈夫かな」
ちゃんとしたもの着てる１５歳くらいの子なんていいカモにされそうで心配だけど、もう彼女の姿はどこにもなかった。

白代萼の鬼退治

あの学ランの人と別れて歩いているとたしかに見慣れたコンクリートジャングルではなかった。洋服の人より着物の人のほうが多いし、これは素直に大正時代だと認めざる負えない。

そのうえ

「(なぜか私自身縮んでるし)」

これも死んでタイムスリップした弊害なのかもしれない。

行く先々の人間みんなが私を見て憐れんだり、心配してきたり、果ては誘拐しようとしてきたりといろいろあってもしやと思っていたけど。本当に14歳くらいの時の格好になっているなんて誰が想像するだろうか。

こんな格好じゃ働くに働けないし……問題は山積みだけど一番最初にくるのは当面の生活だろう。食料は山に入って調達するとして問題は住居と風呂と着替えだ。

とりあえず私のスキルは戦闘と潜入術くらいしかない。体型的にはこの時代の同い年の子たちより背が高いので活用しない手はない。

と、いうわけで

宿屋の従業員になりました。

寝床と食事とお風呂を確保できる職業……と考えた末に思いついたのがこれだった。客商売は初めてだけど笑顔の貼り付けとかそういうのは生前からよくやっていたことだから思ったよりうまくいった。んだけど……

「鬼殺隊の者です。どうか今晩泊まらせていただけないでしょうか」

あの時遭った人と同じ学ラン姿の人が泊まりに来る確率が高い。

なんでもこの宿は一度鬼に襲われたところを鬼殺隊に助けられたのが縁でこうして「藤の家」として鬼殺隊のサポート役を買って出ているんだとか。

というかそんな鬼殺隊の人がここにいるってことは、この近くに鬼がいるっていうことなんじゃ？

え、それってまずくないか？今のところ犠牲者の話は聞かないけど、もしこの宿が狙われたら私はまた宿無しになってしまう。それはまずい。

こうなったら鬼殺隊の人と協力……はできないから単独で動くしかないか。あの時分かったことだけどあの変な鉄錆び臭さは鬼の匂いだったみたいだし。音も感覚も目も問題ないからできないことはない。うん、自己防衛って大事だよね。

「この度はお越しくださりありがとうございました。またのご利用をお待ちしておりま

す」

翌朝、ひと狩り終えた私は笑顔で釈然としない顔をした鬼殺隊の人を送り出したのだった。

ここで一つ疑問に思うことがある。鬼は一体どこからやってくるのだろう。倒しても倒してもまた別の鬼がやってくる。これじゃあきりがない。鬼殺隊の人たちも怪しみ始めてるし……どうしたら鬼が寄ってこなくなるんだろう。

「ぐぎゃあああああ!!」

「うるさい、わめくな」

とにかくどうしようもないので恒例化してしまった鬼退治を黙々とこなす。日が昇るまであと約２０分。分単位で殺していけば持つだろう。

頸を切断してから胴も手足も頭も細かく切る。だってこの鬼っていうのは殆ど喰種と似たような種族なんだろうから、頸をはねても安心はできない。頸とか胴とか切り落としても普通に生きてるやつとかいっぱいいるし。

「やめ、やめてくれぇ」

「うん、ごめんね。本当は日輪刀とかって言う刀があればいいんだけど、あいにく私は持ってなくてね。だからこうやって殺し続けることしかできないんだ」

「ちい、稀血イ、喰わせろ！喰わせろオ!!」
「？なんだかよくわからないけど、私みたいなの食べてもおいしくないと思うよ」
そういう間も私は切り続けている。えーっと、これでとりあえず１９回目だからこれでラストかな？ちょうどタイミングよく日が差し込む中、私は鬼に最後のとどめをさした。
「お前さえ、稀血さえ喰えていれば……」
「稀血、ね。――バイバイ、来世は幸せになるんだよ」
鬼が跡形もなく消えていくのを見届け、服に付いた汚れを払った。洋服の方が動きやすいけどこう何度も洗濯するってなると……
「おい」
後ろから聞こえる男の声。ほんの少し前にここに到着したのだろう。私と鬼のやりとりは聞かれていたのかもしれない。
振り返るとそこには端正な顔立ちの無表情な男が立っていた。
「はい？」
一応すっとぼけたように返事をしておく。――まあ、この人には通用しなさそうだけど。
「長い黒髪に黒い洋服……お前がアキシロウテナか」

「私とお兄さんは初対面ですよね、どうして私のことを知ってるんですか？」
「……南多摩で鬼殺隊士を助けただろう」
「そういえばそんなこともあったような」
「お館様がお前を探している。……ついてこい」
「私はまだここで働きたいんで、それはちょっと……」
　まだ働いてそんなに経ってないし、せっかく手に入れた自由なのだ。今度こそ自由に生きたって罰は当たらないだろう。ここは案外居心地がいいしもう少しいたい。そう思っていた。
「お前が」
　――――お前が原因でこの宿が狙われ続けているとしてもか。
　そう聞き捨てならない言葉を、聞くまでは。
「どういうことですか」
「さっきの鬼はお前を稀血だと言っていた。稀血とは鬼にとって常人より栄養価の高い人間のことだ。鬼にはそれが分かる」
　じゃあひっきりなしにここに鬼がやってきたのは私のせいだったのか。喰種にとっても半喰種や半人間はご馳走だっていうし……私にとって結構厳しい世界なのかここ。
「……わかりました。同行します」

「いくぞ」
歩き出そうとした男……あ、そういえばまだ名前聞いてない。
「お兄さんの名前、教えてください」
「……冨岡義勇」
凄く間が空いて返事が返ってきた。無表情だけど……人見知りなのか？
「鬼殺隊本部までよろしくお願いしますね。冨岡さん」
かくして私は鬼殺隊に赴くことになった。
バイバイ、私の自由生活。
……ブラックじゃないといいなあ、労基法ってもうあったっけ？

白代萼は居場所を得る

鬼殺隊本部に着いた……はずなんだけど。

「（立派な屋敷じゃないか!!）」

私の目の前に聳え立つ『産屋敷』の表札が付いた屋敷になぜか私は通されてしまっている。

ちなみにここまでの案内役だった冨岡さんは任務が入ったとかで喋る烏に急かされて置いていかれた。

有馬さんに似て（口数が少ないとか、誤解されやすそうとか、天然だとか）放っておけないって思ってた矢先にこれだよ。

それからこの屋敷の使用人っぽい人にバトンタッチされて客間らしいところに通されて今に至る。

「お館様のお目見えです」

使用人の人の声とともに客間に入ってきたのは長い黒髪を切り揃えた線の細い男だった。皮膚が変質し痛々しい元は端正な造りであろう顔立ちをした、人を落ち着かせる雰囲気を纏った人だ。

「こちらから呼んでおいて、待たせてしまってすまないね」
「いえ、元々私を探して下さっていたと伺っております。私の方こそ、このような格好での面会をお許しくださりありがとうございます」
　久々の改まった空気に宗家に戻ったような反応をしてしまった。反射だ。
「そんなに改まらなくていいんだよ、楽にしておくれ」
「しかし……」
「ね？」
「……かしこまりました」
　何だろう。この人の雰囲気、声、存在そのものが心に浸透していくような不思議な感覚だ。
　生まれながらにして人の上に立つことのできる人なのだろう。
「さて、あまり時間を取らせてしまうのも申し訳ないし、単刀直入に言おう。白代萼、君の実力を見込んで頼みたいことがある。君に鬼殺隊の隊士としてその力を貸してほしい」
「私が、鬼殺隊の隊員……」
「タダでとは言わない。衣食住はもちろん、鬼についてや君の特殊な体質……稀血に関しての情報も開示しよう。研究している隊士たちにも話を通しておく。……どうかな

？」

私としては願ったり叶ったりな条件だ。あの時冨岡さんが言ったように私は稀血である以上ここ以外に身の置きようがないわけだし。

けれどせっかくの自由の身がまた組織に戻ることに迷いがある。そしてなにより、属する以上避けて通れないのが私についての説明だった。一歩間違えば狂人扱い待ったなしな説明。

「分かりました。ですが今度は私の話を聞いてください。鬼殺隊の隊員になるうえで話さなければならない話でございます。私の処遇はそれから決めてくださって結構です」

「分かった、聞こう。話しておくれ、君の話を」

――――

「……ですから私は純正の人間ではありません」

全て話した。本当は平行世界（？）から来たことだけを話そうと思っていたけど、目の前の聴き手に徹する人があまりにも真剣に入り込んで聴くせいか、気づいたらすべて話していた。和修の目がないとはいえ……私の落ち度だな。

「そうか、話してくれてありがとう――――白代萼」

「はい」

「君さえよければ、私たちに力を貸してほしい」
「え？」
「君が鬼のような生き物・喰種と戦っていたこと、稀血であること、そして今日こうして相まみえたこと。私にはこれがただの偶然とは思えない。君はきっと、この世界でやるべきことがあるからこの世界にきたのだと私は思う」
「では、私を、受け入れるというのですか？」
男――お館様は微笑んで頷いた。
「尊、君はこの世界を生きるのが厳しいと言ったね。和修という家もないと。なら、今日からここを自分の家だと思うんだ。誰に縛られるでもなく自由に自分の意志で決めて生きるんだ。君の居場所はちゃんとこの世界にあるんだよ」
「お館様……」
「今日から君は――私の家族だ」
「――ありがとう、ございます。拝命、致します」

今日、この世界に本当の居場所ができた。
お館様――産屋敷輝哉様と鬼殺隊。
もし死んでからも運命があったとするなら、私は最高の幸せ者なのかもしれないね。

白代萼と蝶屋敷

お館様との話から数日後。私は医療施設だという蝶屋敷に来ていた。
「ごめんください」
「はーい、どなた？今開けますね」
扉を開けたのは蝶の髪飾りのよく似合う女性だった。
「産屋敷輝哉様の紹介で参りました。白代萼と申します」
「まあ、あなたが？私は花柱、胡蝶カナエです。お館様より事情は伺っています。さあ、中へどうぞ」
「ありがとうございます。お邪魔します」
花柱――――じゃあこの人がこの鬼殺隊の特記戦力の一人なのか。
ニコニコと上機嫌な胡蝶さんに案内され私は奥へと進んでいく。するとある部屋の前で足を止めた。
「しのぶー？いるー？」
「いるわよ姉さん」
「ならよかった。白代さん着きました。今開けますね」

胡蝶さんに通された部屋の中には一人の小柄な少女がいた。
「しのぶ、連れて来たわ。こちらはお館様のお話にあった白代萼さん。萼さん、この子は私の妹のしのぶ。鬼に効く毒の研究やここの治療全般を担当しているわ」
「白代萼です。今日はよろしくお願いします」
「姉のカナエより紹介にあずかりました。胡蝶しのぶです。こちらこそよろしくお願いしますね、白代さん」
美しく微笑んだ彼女はおもむろに注射器を取り出した。
「では早速ですが、採血するので利き腕と逆の腕を出していただいていいですか?」
「はい」
促されるままに袖を捲し上げて腕を差し出した。両利きだからどっちだって大丈夫なのだ。
「――はい、ありがとうございます。結果は後日お知らせしますね」
「ありがとうございます」
「じゃあせっかくだし、今のうちに鬼やあなたの特異体質である稀血について話しておきましょう」
「はい、よろしくお願いします」
「ではまず、鬼についてはどこまで把握されていますか?」

「日光に弱く、夜行性。膂力・再生力は人間のそれを軽く上回り、食性は偏食で人しか食べられない。日輪刀でしか殺害することができない、と」
　要は日に弱く再生力に富んだ喰種。それが私の最適解だった。
「大凡その認識で合っています。相違点のみで言えば鬼は元は人間であり、日輪刀をもってしても頸を落とさなければ即座に再生します。事実、私たち鬼殺隊の隊員たちは入隊と同時に日輪刀を支給されますが、それでも新入隊員の殆どが一年、いいえ半年も経たずして死んでいきます。――そして人が鬼になる条件は鬼の始祖の血を摂取すること」
「鬼の、始祖」
「ええ。名を鬼舞辻無惨。名前以外の一切の情報を漏らさずに私たちの目を掻い潜り、生き永らえ続ける諸悪の根源です」
「……なるほど」
「ふふ」
　鬼って頸を切るだけでよかったんだ……私が納得しているとどこからか……というか花柱の方の胡蝶さんから笑い声がした。
「姉さん?」
「いえ、しのぶがちゃんとお姉さんしてるなーって」

「今真面目な話をしているの！茶化さないで!!」
「はーい」
　それでもニコニコと笑顔を絶やさず見守る花柱の胡蝶さんに目の前の胡蝶さんは微妙な顔でため息を一つ吐いたのち説明を再開した。
「コホン。では気を取り直して……次に蕚さんにも密接に関わってくる稀血についてですが、稀血というのはその名の通り非常に珍しい存在です。鬼は稀血の人間一人を摂取することで常人五十～百人を食べるのと同じ力が手に入ります」
　だからそれを求めて鬼たちが群がってきた、と。
「対策のようなものは？」
「残念ながら今のところは何も、ただここは鬼狩りの本部ですから他の場所よりはいくらか安全です」
「そうですか……」
「ここまでで何か不明な点はありましたか？」
「いいえ、ありがとうございました」
　つまり根本的なところは変わらないということ。確かにそんな都合のいいことだらけではないのだ。
　自分の中で情報を整理していると不意に扉が勢いよく開いて三人の小さな女の子た

ちが転がるようにして入ってきた。
「カ、カナエさまー、しのぶさまー!!」
「急患です!!」
「あらあら」
「十人ほどで、でもみんな大怪我してて手が足りなくて……」
「まあ……白代さんすみません。わかりました直ぐに「あの」
　そこでその場にいる全員が私を見る。
「もしよければ私にも手伝わせていただけないでしょうか」
「で、でも「まあいいじゃない、しのぶ」姉さん」
「実際、隊員並みにここも人手が不足しているし、正直猫の手も借りたいような状況でしょう?」
「そうだけど彼女は客人で「あら、彼女はまだ隊員でないだけで仲間の一人よ?」!」
　その言葉に私も目の前の胡蝶さんもはっとする。
「そうでしょう、萼さん」
「え、でも本当にいいんですか」
「いいのいいの!それで救える命が多ければ尚更よ」
「そうですね、私としたことが失念していました。コホン、では白代さん仲間としてあな

たに頼みたいことがあります」
「は、はい」
「今この屋敷にいる者だけでは患者に対応しきれません。私たちを手伝ってください」
「……はい！」
　こうして今日は途切れることなく運ばれてくる患者に対する処置や入院患者のリハビリ（機能回復訓練、というらしい）を手伝ったりと久々に目まぐるしく動いた日だった。
「今日はありがとうございました」
「こちらこそ、無理を言って手伝わせてもらってしまって、ありがとうございました」
「いいえ、あなたがいてくれたおかげでいつもより仕事が捗ったわ。処置も適格で手際もよかったし、うちでまた働いてほしいくらい」
「「萼さんありがとうございました！」」
「もしよければまた来てくださいね、今度は治療とか検査とかそういうの関係なく。お茶とお菓子を用意してお待ちしています」
「ありがとうございます、胡蝶さん」
「それと、『胡蝶』だと姉と被りますから私の事は名前で呼んでください」
「いいんですか？」

「ええ、是非」
「……しのぶさん」
「はい」
　にっこりと、朝会った時よりもしっかりとした笑顔でしのぶさんは応えてくれた。
「えーしのぶばっかりずるい！私の事もカナエって呼んでね、萼さん！」
「はい、カナエさん」
「!!ありがとう」
「じゃあ姉さんそろそろ日も沈みますし……」
「ええ、気を付けてね」
「はい、ではまた今度」
「また来てくださいねー！」
「私たちも待ってますからー!!」
「お気を付けてー！」
　蝶屋敷のみんなに見送られて、私は帰路に着くのだった。

白代萼の小噺

あれから私はよく蝶屋敷の仕事を手伝うようになった。
なので今日も蝶屋敷に来ているわけなのだけれど……
「……」
今日の休憩時間にお茶を運んできてくれた子は初めて見る子だった。ここのみんなと同じ蝶の髪飾りを付けたサイドテールの艶やかな黒髪に、薄い唇は弧を描けばより魅力的になるだろう。でも、その子は無表情だった。
「ありがとう、カナヲ」
しのぶさんがお礼を言ってお茶を受け取ると、こくりと頷いてそのまま隣に座った。
「萼さんとはまだ初対面でしたよね。この子はカナヲ。栗花落カナヲです。カナヲ、この方は白代萼さん。この間から私たちの手伝いをしてもらっている人です」
「白代萼です。よろしくお願いしますね、カナヲさん」
「栗花落　カナヲ　よろしく」
声、ちゃんと出るんだ。失礼ながらそんなことを考えた。
「ごめんなさいね、萼さん。カナヲはちょっと事情があって言葉が不自由なの」

すかさずカナエさんがフォローを入れてくれる。そこらへんは私も割と失礼なことを考えていたので別に気にしていない。というかここまで表情が抜け落ちているのによく失語症に陥らなかったな、とは思う。――強い子、なのかもしれない。

「いえ、気にしてませんよ」

「ならよかった」

カナエさんは私の言葉でほっとしたようだった。まだ大正時代だ。私たち平成世代でやっとこさ精神病の重大さがメディアに取り上げられるようになったのだから、今の時代でこういう心身ともに傷ついた子はどういう目で見られるのか分からない。まるで子を守ろうとする母親のようにも見えた。

――母親。それを私が言うのか。何も知らない私が。

「――今日もお茶が美味しいですね」

お茶を飲んで空を見上げる。

雲の多い、青というより白みがかった空だった。

＊＊＊＊

昨日は思っていたより運ばれてくる患者が多く、泊まり込みになった。

ちなみにここの入院食と賄いは柱のカナエさんはもちろん、隊員であり鬼の研究の第一人者であるしのぶさんも忙しいのできよちゃん・なほちゃん・すみちゃんと泊まり込

んだ時のみ私で作っている。なので今日は私が当番である。
「(ん、あれは……)」
カナエさんの部屋の前でじっと立っている人影がいた。近づいてみるとそれは髪を結っていないカナヲさんだった。
「カナヲさん?」
「!」
私の声にカナヲさんは振り返る。反応はしても無表情のままの彼女の手には蝶の髪飾りと櫛が握られていた。
「髪結いですか?」
こくりとカナヲさんは頷く。ここにいるということはカナエさんかしのぶさんにやってもらっていたのかもしれない。
でも今日はカナエさんは遠方の任務で日が昇る前に行ってしまったし、しのぶさんも研究成果である最新の藤の花の毒の臨床も兼ねて任務に出払ってしまっている。
「もしよければ私が結ってもいいですか?」
「!」
するとカナヲさんは銅貨を一枚取り出して弾いた。コイントス?そして銅貨の表を確認すると、私に髪飾りと櫛を差し出した。

「お願いします」
「はい」

――――――

長い黒髪をサイドに結い上げて仕上げに蝶の髪飾りを付ける。
「できましたよ」
鏡に映して確認した。うん、見た感じは大丈夫。
カナヲさんは変わらず黙って無表情だった。
「引っ張られて痛いとかありますか？」
ふるふる
「そうですか、よかった」
「ありがとう」
「いえ、こちらこそありがとうございました」
「？どうして」
「私の提案を受け入れて下さったでしょう。髪の毛は精神的にも繊細な部分ですから、結構触れられるのが嫌な人もいるんですよ」
「私は、わからない、から」
「じゃあそうですね、カナヲさんは私に髪結いされてどう思いました？気持ち悪かった

ですか？」
「気持ち悪くなかった」
「それなら、尚の事嬉しいです」
「嬉しい」
「はい」
「この行動（髪結い）が、萼は嬉しい」
「はい」
　するとカナヲさんは少し考えているようだった。考えさせるような行動をしてしまっただろうか。
「また、やって」
「はい。喜んで」
　私たちの距離をほんの少しを縮めて朝の時間は流れていった。
＊＊＊＊
　昼過ぎごろ、蝶屋敷からお館様に呼ばれた私は産屋敷邸に来ていた。
「お館様、白代萼です」
「ああ、入ってくれて構わないよ」
「では失礼します」

促されて中に入るとそこには布団から上体を起こして奥方のあまね様に支えられているお館様の姿があった。
「よく来たね、萼」
「は。お館様、あまね様、白代萼ここに参上いたしました。本日はどのようなご用命でしょう」
「そのことなんだけどね、私事で申し訳ないんだけど一つ頼まれてくれないかな」
「？はい、お館様の命であれば」
「よかった実は――」

――――

「ねえ、萼」
「はい、如何なさいました若様」
『子どもたちをみてほしいんだ。いつも世話係のようなことをさせている使用人が所用で少し早めに藪入りしてしまってね。この通り私は動けないし、あまねにもいろいろ動いてもらわないといけない。だから頼めるのは君しかいないんだ。すまないけど頼めるかい？』
というお館様の要請により、私はこうして若様――跡継ぎである輝利哉様とその姉君

ひなき様とにちか様、妹君であるくいな様とかなた様の臨時の世話係となったのである。

　といっても全員いい子なので目を離しさえしなければ大丈夫だった。私のいる意味は？

「萼は別の世界から来たんだって、父様が言っていたんだけど、それは本当？」

「――はい。正確に言えば平行世界、というのかもしれませんが」

「気を悪くしたのならごめんね。父様に無理を言って教えてもらったんだ。最初に産屋敷にきた君を見た時、なんだか周りと空気が違うかったから気になって」

「――――」

　やっぱり子どもは鋭い。私たちとは違う次元で。特にこの産屋敷家は鬼狩りの頭領だ、そういったことには本能レベルで敏感なのかもしれない。

「――いいえ、構いません。私も自分自身驚いているのです。このような奇跡があるのかと」

「そう……ねえ、もしよければ萼のいた世界のことを教えてくれないかい？それが遠い未来の事だとしても興味があるんだ」

「そうですね、私で説明できることであれば」

「！じゃあ先ずは――」

余程聞くのを我慢していたのだろう、質問は夕暮れまで止むことはなかった。
日が傾いて時間に気づいた輝利哉様は話を切り上げてくれたものの、まだ話し足りない様子だった。
「今日はありがとう、また来てね」
「今日一日ありがとうございました」
そう言って頭を下げて私は帰ったものの、何故か輝利哉様を始めとする産屋敷家のご息女の皆様にも懐かれた私は度々ここへ呼ばれることになる。……のだけどそれはまた別の話。

白代萼の呼吸

鬼殺隊士になるには条件があるらしい。
一つは最終選抜を生き延びること
もう一つは呼吸法の習得
正確に言えば最終選抜を生き残りさえすればなれるらしい。けど一般的にはまず育手と言われる教育者の下で修業を付けてもらい、その育手から最終選抜の推薦や許可を得て選抜に挑むらしい。
育手は元熟練の鬼殺隊士であり呼吸法の使い手でもある。つまり最終選抜を受ける受験者はその育手の修業の中で呼吸法を既に習得しているということなのだ。
私は自力で何とでもできていたのであまり気にしていなかった（普通の人間が鬼に対抗するにはこの呼吸法による身体強化が必須らしい）。でも困ったことが起こってしまった。
それは私もそろそろ最終選抜を受験してはどうかというカナエさんからの言葉から始まった。
「私たちとしてはあなたがここにずっとい続けてくれた方が嬉しいのだけれど、お館様

との約束だとしたらそれは反故にはできないもの」
「そうですね……ええと持ち物は日輪刀だけでしたっけ？」
「そうそう。正確にいうとまだ最終選抜を抜けてないから借り物になるんだけどね、普通なら自分の師匠である育手から貸してもらうんだけど、萼の場合お館様が直接スカウトしたからそういうのはないし……」
「なら姉さん、色変わりしなかった刀を借りたらどうかしら？」
「ああ、それならいけるかも！」
　そう言ってカナエさんは部屋を飛び出していった。
「『色変わりしなかった刀』……？」
　刀は本来色変わりなんてするような代物ではなかったはずなんだけど？
「そういえば萼さんに日輪刀の性質について話すのを忘れていました。日輪刀は別名色変わりの刀。所持者の呼吸の適正によって刀身の色が変わるんです。炎なら赤、風なら緑、水なら青、雷なら黄、岩なら灰というように。でも極稀に黒であったり、呼吸の適正がまったくなくて色が変わらなかったりします。なので今回はその色変わりしなかった刀を使おうと思いまして」
「なるほど……あれ、でも黒ってなんなんですか？色が変わっているわけですから適正がないわけではないんですよね？」

「それは……その、黒の刀身の日輪刀の所持者は元々死傷者の多いこの鬼殺隊の中でも現段階で持っている人はいません。呼吸のことや刀身の事について解析する前に皆早逝しているんです」

「！」

「なので隊内では『早死の色』と呼ばれて不吉の象徴だと言われているんです」

「な、なるほど……」

私は頷くことしかできない。色が変わったからといっていいことばかりではないのか。

「色変わりしてない日輪刀、借りてきたよー」

と鞘に入った刀の束をカナエさんは目の前に広げた。

「どれでも好きなの持ってっていいからね」

「じゃあこれで」

適当に選んだ一本の刀を鞘から抜く。きっと黒かな。前は二十歳で人生終わったし。と目線を日輪刀に向け――向け？あれ？ちょっと待って、鍔から先がない？どういうこと!?

――と思っていたら光が七色に屈折して光った。あれ、これってまさか……刀身が透明、ってこと？

これには蝶屋敷のみんなも私も驚いて声も出なかった。そして正気に戻って頭を抱えた。

ぶっちゃけ色もなければ前例もないから呼吸の適正どころじゃないよね。

一先ず全集中の呼吸を習得し基礎をしっかり作っていくことになった。それでそれを日常生活でも常にやるように習慣づける。そうして「全集中の呼吸・常中」を習得・完成させた私は……やっぱり適正の問題に直面する事となってしまったのである。

隊員の人たちの稽古を見て見よう見まねで呼吸法をやってみたら出来た。といっても基礎基本の壱ノ型だけだけど。これ以上は誰かに師事しなければ習得することは難しいだろう。

私は広く浅くな適正だったのだろうか？器用貧乏って私らしいな。

「呼吸について、ですか……」

「そういえばお二人の花の呼吸と蟲の呼吸は何色になるんですか？」

「私の花の呼吸は水の呼吸の派生だから私は青に近いわね」

「私も元は花の呼吸の派生なので青に近いですね」

「派生の呼吸？」

「ええ、私たちが育手から教わったのは水の呼吸。けれどそれを実戦で自分に合わせていったらいつのまにか全く別物になっていたのよ」

「……姉さんは感覚的過ぎるのよ。萼さん、あまり気にしなくていいですからね」
「でもそうねえ、確かに萼は殆どすべての呼吸が使えているわけだし、自分の流派を起こすっていうのもありね」
自分の流派を起こす、かあ……
カナエさんは元々の呼吸を自分なりに最適化したことで今の花の呼吸を生み出したのだと言っていた。なら私も自分の扱いやすい呼吸をより自分になじませるように、もしくは呼吸が私になじむように作り変えることも出来るのかもしれない。
そう思い立った私が着目したのが二人の花の呼吸と蟲の呼吸だった。この二つの呼吸は間近で見ることも多いためか他の呼吸に比べてイメージしやすい。そしてこれは私の思い込みかもしれないけど、他の呼吸に比べて若干呼吸がしやすい。そしてこれを私に合わせて最適化する。
そしてできたのが――
「蜜の呼吸　壱ノ型・蠱惑」
簀巻きを切ると滑らかな断面を見せて崩れた。うん、今日も大丈夫そうだ。
私は花の呼吸と蟲の呼吸から新たな呼吸を起こした。名前はその二つの間を取って「蜜の呼吸」と名付けた。最初この型を見せて説明したらカナエさんとしのぶさんは怒るどころか、照れながら微笑んでいて、こっちまで赤くなってしまったのはいい思い出

である。
「鍛錬お疲れ様です、萼さん。調子は――良さそうですね」
「はい」
「最終選抜が明日なのでどうしてるかちょっと心配だったんですけど、杞憂だったようで安心しました」
「明日から七日間、必死に生き残ってきます！」
「ふふ、その意気ですよ」
　しのぶさんと笑い合う。いよいよ明日に迫った最終選抜。私は刀を収めながらその刃を通して青い空を見たのだった。

白代萼の最終選抜

最終選抜の内容は毎回変わらない。

産屋敷家所有の山――藤襲山。その山はその名の通り特殊な藤の花が一年中咲き誇る。まるで藤色の襲を着ているような美しい山だ。

しかし、それは麓から中腹にかけてであり、それ以降から山頂にかけては咲いていない。あそこは自然の牢獄。一般隊員が倒せるくらいの鬼を閉じ込めるための牢獄だ。

そこに日輪刀を持たせた鬼殺隊の入隊希望者を入れて七日間のサバイバルをさせて生き残った者が鬼殺隊の隊員として入隊許可が下りるのだ。

「行くの、萼」

「カナヲさん」

「怖くないの」

カナヲさんはいつも通りの無表情で私に問いかける。

「そうですね、変な話ですけどおそらく。私はずっとこうですから。でも油断したら死ぬでしょうね」

「死ぬって、怖いんじゃないの」

蝶屋敷で日常的に聞く隊士たちの断末魔や泣き声、それに比例するような痛々しい姿を見ている彼女らしい言葉だ。

カナヲさんは心の動かし方が分からなくなっているだけで、心そのものは無意識に何か感じ取っているのだろう。

「自分がいる保証が消えちゃいますから、たしかにそう思えばそうなのかもしれませんね。でも私、今回死ぬつもりは更々ないので必ず生き残って帰ってきます」

そう、せっかくの第二の人生なのだ。お館様が認めてくださり、蝶屋敷という居場所ができたこの世界を、私はそう易々と手放すつもりはない。

「御褒美」

「え？」

「お二人は、私が何かできると『御褒美』で何かくれる。だから萼も」

やっぱりカナヲさんは強くて優しい子だ。

「そうですね……なら私の我儘なんですけど、私が無事に帰って来れたら――カナヲさんの笑顔が見たいです」

「私の、笑顔」

「はい。無理ならそれで構いません。それでできれば「おかえり」って言ってほしいんです」

「笑顔で　おかえり」

無表情のカナヲさんの笑顔が見たい。――いや出過ぎた願いだったかもしれない。

「すみません、変な事を言ってしまって。さて、そろそろ行きますね」

「……」

そして私は蝶屋敷の玄関へと逃げるように去った。

玄関にはもう既にしのぶさんとカナエさんときよちゃんとなほちゃんとすみちゃんが集まっていた。

「では、いってきます」

「無事に帰ってきてくださいね」

「帰ってきたらお祝いしましょう！」

「絶対に、絶対に帰ってきてください!!」

「帰ってきたらまた新しいご飯の作り方教えてください！」

「ここでずっと待ってますから!!」

そう言って見送ってくれるみんなに手を振って、私は藤襲山に向かった。

＊＊＊＊

輝利哉様とかなた様の案内により始まった最終選抜。

「さて、さすがに数が多いな」
一応野営のことも考えておくべきだろうか。
朝のうちしか場所をさがせないし、休めないけど。
要は今日から七日間夜の間と日の差さない木の生い茂ったところに注意して過ごせばいい。勘違いしている受験生もいるかもしれないけど、無理して鬼を倒す必要はない。条件は『生き残る』であって、鬼を倒すノルマがあるわけではないのだから。
そうして襲い来る鬼を撃退しながら後残すところ二日になった頃、ちょうど近場で悲鳴が聞こえた。
複数の鬼に襲われそうになっているツインテールの女の子がいた。こういう時はあれだ。
「女の子一人に集るな鬼どもめ!!」
回転を加えてその子の一番近くにいた鬼の首を切り飛ばした。
「ひ」
女の子は蒼褪めて震えているが仕方ない。安全のためにもちょっとそのままでいてもらおう。
そして私は日輪刀で手のひらを切りつけ血を出した。
すると途端に鬼たちの目がドロリとしたものになりこちらに向く。

「血い、稀血だあ」
「あまい匂いがするぞお」
「食わせろおおぉぉおおぉ」
「(よし、かかった!)」
『萼さんの稀血は普通の稀血より特殊です』
『というと?』
『強い誘引作用のようなものを持っていると考えられます。きっとあなたが戦場で傷つけば鬼たちはたちまちあなたを狙ってくることでしょう。実際採血させていただいたサンプルのうち何滴かを使って実験したところ鬼たちは目の前の私たち鬼殺隊士には目もくれず、垂らしたたった一滴のあなたの血に夢中になっていました』
『つまり私の血は囮に使えるということですか?』
『そうなりますがその分あなたに危険が及びます。ですからどうか怪我だけはしないでくださいね』
しのぶさんから聞いていた私の稀血の効果。自分ではこれが初めてだけどなるほど、納得だ。凄い勢いでさっきの鬼たちがこちらにやってくる。
「(ともかく、あの子から引き離すことには成功したわけだから)」
あとは――斬るだけだ。

「蜜の呼吸　壱の型・蠱惑」
呼吸で全員頸も胴体も何もかもを切り刻み着地する。
あまり血を出してないし、近くに鬼の気配もないので大丈夫だと思うけど、念のためさっきの子のところに行ってみよう。
来た道を戻っていくと、まだツインテールの子はその場にいてくれた。
「よかった、まだいてくれて」
「あ、あの」
「大丈夫？怪我は？」
「わ、私は大丈夫――！あなた、怪我して」
「ああ気にしないで。鬼を誘き寄せるのに必要だっただけだから」
「私のせいで……すぐに手当てを」
「え」
「いいから！」
そう言って彼女は手際よく処置していった。おお、凄いなこの子。
「ありがとう、凄く手際いいね」
「修行でよく怪我してたから慣れてるの」
「そっか、私は白代萼。あなたの名前は？」

「神崎アオイ」
「アオイさんね。もしよければ後残りの二日間、一緒に行動しない？その方がお互いの生存確率が上がっていいと思うんだけどどうかな？」
「わかった。私もなるべく迷惑をかけないようにするから、あなたに付いていく」
　別に迷惑なんて思ってないんだけどなあ。
「あと、それから」
「ん？」
「さっきは、ありがとう。……助けてくれて」
「！……どういたしまして」
　こうして私とアオイさんは無事に最終選抜を通過することができた。でも日輪刀の玉鋼を選ぶ場には初日にいたほどの人数は戻ってくることはなく、合格者は受験者三十人に対し――僅か五人しかいなかった。

白代萼の帰還

藤襲山の選抜を終え、私は帰路に着いた。自分の借りている借家ではない。蝶屋敷への、である。

ちなみにお供が一匹できた。私の鎹鴉。名前を玖楼くんという。

「ウテナさんありがとう！ボクがんばる！」

素直な雄の美鴉に見分けが付きやすいようにと白いリボン（レース）を与えて結んだらこんな感じに懐かれた。

「うふふ、私の玖楼くんはかわいいねえ」

「チガウチガウ！ボクかっこいい！」

「そうだねえ」

一生懸命弁解しようとする姿も可愛いなあなんて思いながら歩いていると蝶屋敷が近づく。

「ごめんください」

「!!」

「白代萼です――ただいま戻りました」

「「カナエさまー、しのぶさまー！」」

私の姿を見た三人は屋敷に飛ぶような勢いで走っていった。見たところ洗濯物干してる途中だったんだよね？悪いことしちゃったかなあ……と思っているとカナエさんとしのぶさんが珍しく息を切らせてやってきた。

「う、萼／萼さん!!」

「お久し振りですカナエさん、しのぶさん」

「おかえりなさい、萼……無事に帰ってきてよかったあ！」

「本当に、本当に萼さんなんですよね!?足もちゃんとあるんですよね!?」

「はい、五体満足ですよ」

「〜〜っおかえりなさい萼さん」

みんなにぎゅうぎゅうに抱きしめられる。みんな、カナエさんとしのぶさんさえ涙声で。きっとこの七日間ずっと心配してくれていたんだろう。申し訳なさと嬉しさで私の心もいっぱいだった。

「萼」

「カナヲさん」

少し遅れてやってきたカナヲさんの声に反応して押しつぶされそうになりながら彼女の方を見た。

「お――おか　えり、萼」
「！」
『そうですね……なら私の我儘なんですけど、私が無事に帰って来れたら――カナヲさんの笑顔が見たいです』
『私の、笑顔』
『笑顔で、おかえり』
　覚えていて、くれたんだ。
　まだぎこちなさの残る、それでもちゃんとした――笑顔だった。
「――ただいま」
　こうして私は蝶屋敷に帰ってきた。その日の夜は御馳走で、みんな私の帰還を祝ってくれた。生き残るだけでこんなに喜んでもらうのなんて初めてで慣れない。
「萼にね、渡したいものがあるの」
「私に？」
「ええ」
　そういって差し出された四角い箱を受け取る。持ってみてもあまり重さは感じない。
　私は促されるがままに箱を開ける、と。
「これって……」

中に入っていたのは蝶屋敷のみんなが付けているような蝶のデザインの髪飾りだった。

「少し早いですが入隊祝いです」

「本当は蝶屋敷で働いてくれてるうちに渡したかったんだけど、呼吸の事とかいろいろあってなかなか渡す機会がなくて今日になっちゃった。……受け取ってくれる？」

「――ええ、ええ。もちろん」

何度も何度も頷いて、髪を纏めていた髪紐を解いてもらった髪飾りに付け替えた。

「わあ！」

「お似合いです萼さん！」

「これで萼さんともお揃いですね!!」

「ありがとう、ございます」

ほんのちょっと、泣いてしまった。

＊＊＊＊

それからは普通に蝶屋敷で仕事をして若様たちの話し相手になってのいつも通りの日常を過ごしていた。そんななかでひょっとこのお面を付けた人――専属の刀鍛冶の人（錫木さんというらしい）に日輪刀をもらい（前例のない私の色変わりに固まったあと、なんだかよくわからないハイなテンションになって帰っていった）。

そして今日、隊服が届いたんだけど……

「これはさすがにないよねえ……」

手に持った黒い隊服――隊服なのだろうか。

胸のボタン閉まらないデザインだし、背中丸出しだし、下は際どい所まで切り込まれたスリットが入ったスカートだし。大正どころか平成でだってコスプレかギャルかキャバクラのお姉さんくらいしか許されてない格好だよこれ。私なんかが着たらただの痴女になってしまう。

そういえばしのぶさんやカナエさんは普通の隊服を着ていた。何かの手違いなのかもしれないので聞いてみたほうがいいだろう。

「……と、いうわけなんです」

説明し終えるとしのぶさんは笑顔で青筋を立てていた。

「あらあら、今度は萼が彼に目をつけられちゃったのね」

「萼さん、大丈夫ですよ。後はこちらでなんとかしますから――その布は燃やしてくださって構いません」

うふふふ、と女神のような、でもどこか殺伐とした笑顔のしのぶさん。でも素材はいいから勿体ないんだよね。

私は結局燃やすことはしなかった。ではその後どうなったのかというと――

「ウテナさんウテナさん」
「なあに、玖楼くん」
「手紙手紙、隠カラ」
「ありがとう。じゃあいつものところで休憩していくといいよ」
「ワーイ！ありがとう」
そういって玖楼くんは私の部屋にある巣（休憩所）で丸くなる。
そして私は手紙を開くと、おどろおどろしい文字（赤黒くて血文字にも見えなくない）で一言『あきらめません』とだけ書かれていた。
手違いじゃなかったの？あれ……と遠い目になりながら黒い巣で丸くなる可愛い鎹鴉を撫でる私なのであった。
ちなみに隊服はちゃんと標準デザインのがきました！

白代萼と風柱

基本任務は少人数でこなすことが多いらしい。
私は単身だけどね。
「次、次の任務ー!!」
「次かあ、ありがとね玖楼くん」
「がんばる！ウテナさんダイジョーブ？疲れてる？」
「大丈夫だよ。さ、いこう」
「コッチ、コッチ！」
任務から任務へがザラなこの仕事のせいか旅することにも慣れた。蝶屋敷のみんなとご飯が恋しいけど、我慢して帰ってからみんなと食べるご飯は格別においしいので楽しみは後でに取っておく。
ちなみに私の今の階級は己。単独であっちこっち行って鬼をばっさばっさ切り続けていたらいつの間にか上がってた。まだ入隊して一か月も経ってないよ！なんでだ。
アオイちゃんはどうしているだろうか。新人隊員はすぐに死んでいくらしい。一年持つだけでも立派だと、そういわれている。本当に、喰種捜査官みたいだなあ鬼殺隊っ

て。

また生きて再会できたらいいけど。

「この先藤の家！藤の家！泊まって休もう！」

「うんそうだね、着いたら玖楼くんの羽もチェックしようね」

「カアー！」

毛並みのチェックもそうだけど、この子の場合は怪我とかしていないかというのも確認しないといけない。前に猫に襲われてボロボロになってやってきたのを私は忘れない。

「ようこそ、鬼狩りさま。ゆっくりなさっていってくださいね」

「今晩お世話になります」

挨拶して頭を下げる、ともう一足揃えて置いてあった。

「私の他にも隊員が？」

「はい。もうお一方。男性でいらっしゃられます」

「分かりました、ありがとうございます」

とりあえず私はそのまま部屋に通してもらうことにした。

「じゃあ羽の調子見ようか」

「ウウー」

唸りながらも玖楼くんは素直に寄ってきてくれる。外側、内側、風切り羽――と順に見ていく。うん、今日は何もない。大丈夫そうだ。
「よし、異常なし。玖楼くん偉いねえ」
「僕エライ？」
「うん。怪我しないのはいいことだよ」
「僕エライ！」
玖楼くんはご機嫌だ。私もつられて笑顔になる。これが任務じゃなくてただの旅行ならこのまま気を張らずにいられるんだけどなあ。
「そういうわけには、いかないんだよねえ……」
「？」
「うふふ、なんでもないよ。さ、今のうちに休もう」
「ヤスモウヤスモウ！」
藤の家から見える美しい海に背を向けて私は畳に腰を下ろした。
＊＊＊＊
「てめえがお館様が勧誘したって隊員か」
「！……不死川さん」
「お前、俺を知ってんのか」

「柱の方々の名前と特徴は把握しています」
　不死川実弥。現風柱。まさかこんな大物と仕事が重なるとは。というか玖楼くんいわく形式的に合同任務らしい。私どころか不死川さんも不意打ちだったみたいだけど。
「おい」
「はい」
「お館様の勧誘した隊員だろうが何だろうが、着いて来れねえようなら見捨てるからな」
「承知しました」
「……チッ、行くぞ」
　そして私たちが着いたのは海だった。昼には聞こえなかった美しい歌声が木霊する。
「あらあ?この匂いどこかで……」
「お前がここらの船を難破させて襲撃してる鬼か」
「ああそうそう!一週間前くらいにきた鬼狩りと同じ匂いだわ。でも、筋肉質で硬くてあんまり好みじゃなかったわあ。――あなたたちの方がとっても美味しそう」
　飛び掛かってくる鬼を避けて刀で応戦する。
「――血鬼術・織り唄」
　鬼が再び歌い始めると海から腐乱死体がゾンビのように這い上がってくる。
「!これは」

「うふふ。これぜぇんぶ私が殺したの、すごいでしょう？――その日輪刀ってやつに当たらなければあんたたちなんて怖くないもの」
　不敵に嗤う鬼が手を払うと同時に死体が襲いかかってくる。
「ウゼーんだよ！」
　不死川さんが剣圧で瞬く間に蹴散らすものの死体はカタカタと音を立てながら元に戻っていく。キリがない。
「（そういえば）」
　くん、と鼻で匂いを嗅ぐ。周囲から感じる鬼の濃い鉄錆びの匂い。最初はあの歌の鬼がこれだけの人間を食い殺したせいで酷く濃く広い範囲で香ってくるのかと思ったけどたぶんそれだけじゃない。
「（あの鬼と死体は血鬼術で繋がっている）」
　不死川さんが凪ぎ払った時に匂いは一瞬消えた。でも再生していく死体そのものからあの鬼の匂いと気配がしたのだ。ということは鬼までは遠くて時間がかかるかもしれないけど、この死体たちは私の血にあてることができるかもしれない。
「不死川さん！」
「アア？」
「考えが、あります」

近づいて小声で話す。不死川さんはその間何も言わずに聞いてくれた。
「成功する保証はあんのか」
「私の確証が正しければほぼ確実に」
「成功しなかったらお前ごとぶっ殺す」
「はい――ではいきます！」
そして私は手の甲に日輪刀を当てて軽く傷付ける。すると――やはり死体は私に一目散に襲いかかってくる。
「え、ちょっとなんでっ……戻りなさい！言うこと聞きなさい！」
鬼の制御よりも私の血の効力の方が強いのか、遠くにいる鬼は困惑する。
「蜜の呼吸　弐ノ型・蜜牢細（みつろうさざめ）」
高く真上に跳び上がり、無数の斬撃で下の集まってきた死体を一掃する。
「不死川さん！」
「わざわざ、呼ぶんじゃねえ!!」
「なに、この、香りィ、い？」
鬼がやっと私の血の匂いに気づき気が緩んだその瞬間。不死川さんの薄緑の日輪刀がその首を刎ね飛ばした。
すると死体も動きを止めて倒れ崩れた。

「おい」
「はい？」
「聞いてねえぞ、お前が稀血ってこともそんなやり方で引き付けることもなァ」
……そういえば『死体は私が引き付けますから、鬼本体をお願いします。』ってしか言ってなかったっけ？
「す、すみません。不死川さんなら単身で鬼倒せそうだったし、これはその……必要最小限の負傷のうちというか」
「んな御託はいいからさっさと止血しろ。また何か寄ってきても俺は助けねえぞ」
「はい！」
ん？心配してくれてる？いやそんなわけないか。初対面だし。
とち狂ったことを考えそうになる頭を否定して今回の任務も完了したのだった。

白代萼と凶敵

不死川さんとの任務後さらに任務と任務と任務を重ねて、晴れて階級が「乙」に昇進しました。

今回の任務は終わって途中で同じく任務帰りのカナエさんと会い、一緒に蝶屋敷へ帰る。はずだった。

目に「弐」の文字が刻まれている鬼に遭遇するまでは。

手足の感覚が、ない。肺が痛くて苦しいはずなのに頭がぼんやりしている。

そうだ、カナエさん。カナエさんはどこだろう。私を蝶屋敷に誘ってくれた人。私の姉みたいな人。大事な、ひと。

どこにいる。どこに。どこ?

働かない頭で、見えているのに淀む視界でカナエさんを探す。

いた。でもカナエさんは倒れて寒さからか震えていた。いつもの彼女のような血色

のいい笑顔はない。今にも死にそうなくらいの真っ青な肌色。笑顔の「弐」がこちらに近づいてくる。狙いは私かカナエさんかわからない。でもその代わりにわかるのは――このままでは私もカナエさんも死ぬということ。

私はいい。元々この世界に来る前に死んで運よくここに来ただけだから。でもカナエさんはだめだ。カナエさんには蝶屋敷という家族がいる。鬼殺隊を支える柱の一本でもある。そしてなにより私が死なせたくない。私の大事な人の一人。失いたくない。また蝶屋敷のみんなでパーティーをするのだ。だから、だから――

「おや？まだ立ち上がるのかい」

「……」

「もうやめておきなよ、たしかに君のその無駄な行動は立派だ。でももう君の呼吸とやらを――身体機能そのものを壊すには充分過ぎる。諦めて俺に食べられ――」

蜜の呼吸　参の型・乱れ垂漣（みだれすいれん）

斬撃を躱される。でもそんなことはわかっていた。今はとにかく、カナエさんに近寄らせないように私が気を引く！

――血中のＲｃ細胞の活性化、およびそれに伴うＲｃ値上昇を確認。

――Ｒｃ細胞値１０００を突破。

――擬似半喰種へ一時的に転化。

寒さで壊死しかけていた体を作り変えて震い立たせる。
切り詰めても相手の持つ鉄扇で防がれた。
でもそれでもいい。守りたいものが守れるのならなんでもいい！
「？んー？君もたしか俺の血鬼術受けてたはずだよね？それなのになんでそんな動けるのかな」
「素直に教えると思うか？」
「いいや？……にしても君面白いねえ！」
「っ！」
遊びながら相手してるなこいつ……。
夜明けまであともう少し時間がある。それまで持つか……
いや、持たせなければ。カナエさんを死なせるわけにはいかない。玖楼くんにも戦闘が始まる前に言伝してあるから援軍もくるかもしれないけど、この分だと私が持ち堪えるしかないだろう。
「普通は俺の『粉凍り』を吸ったら肺胞が壊死して使いものにならなくなるはずなんだけど。君はどう回避したのかなっと！」
「ぐ……っしまっ、!!」
鉄扇で切りつけられると同時に足元を凍らされ身動きが取れなくなる。

そしてそれと同時に正面から抱きしめられた。まずい。抱きしめるということは自分の背後に相手の手が回っているということであり、そのうえ相手は鬼だ。鯖折りにされる可能性もある。
「つかまえた♪」
「っ」
吐息の掛かる距離に内心ゾッとする。しかし縫い留められていて私は動けない。
「ああやっぱりこの匂いは君のだったんだねえ。甘くていい匂い。俺好きだなあ」
「……」
「俺の『粉凍り』をどうやって回避したのかも気になるけど、なんだか君自身に興味が湧いてきたよ――ねえ、君も鬼にならない？きっと今よりずっと楽しいよ」
「断る！」
私は言うが早いか、奴の頸を切りつけた。
「（浅いか……）」
ここで仕留め損なうということは実質死を意味する。ごめんなさい、お館様。カナエさん。しのぶさん。カナヲさん、なほちゃん、きよちゃん、すみちゃん。
しかし反撃はいくら待っても来ることはなかった。鬼はきょとんと呆気に取られたような表情でこちらをみて、それから微笑むと――私の頸に噛み付いた。

「うん――うん。覚えたよ。君の匂い、君の味、君の顔」
離された口の端から私の血が溢れている。そして奴はにっこりと胡散臭い笑顔で私を見た。
「俺は上弦の弐・童磨。じゃあね、鬼殺隊の蜜の君。いつかまた会いに行くから待っててね」
「ふざ、け」
「ばいばい」
そのまま奴は去っていった。私はもう限界で――――その場に崩れ落ち、意識を失った。

＊＊＊＊

次に目が覚めたのは見覚えのある天井だった。
「「ウテナさん!!」」
「なほ、ちゃん、きよちゃん、すみちゃん」
「目が覚めたんですね!!」
「あ、うごいちゃだめですよ!」
「今しのぶ様たちを呼んできますね」
そして三人がいなくなった後、程なくしてしのぶさんがやってきた。

「萼さん、目が覚めたんですね！」
「はい、すみませんご迷惑をおかけして。それで、あの……カナエさんは」
「迷惑だなんて思ってません!!姉さんは大丈夫です。あなたより先に目が覚めました。ただ、肺胞の一部が壊死してしまっているので日常生活はともかく、鬼との闘いはもう降りることになりますが」
「そうですか。すみません、ちゃんと無事に帰って来れたらよかったんですけど」
「いいえ、むしろ生きて帰ってきてくれただけでも……あなたたち二人が帰ってきてくれてよかった。萼さん、本当にありがとうございました」
「――こちらこそ」
　あなたたちのその言葉に、どれほど救われていることか。
「今姉さんがお館様に報告に行っています。意識が回復したばかりで申し訳ないんですが、今回の鬼について聞いてもいいですか？」
「ーーはい。私たちが遭遇したのは上弦の弐。名前を童磨。氷の血鬼術を使ってきます。最も気を付けなければならないのは奴の出す冷気を吸ってしまうこと。奴は『粉凍り』と言っていましたが、それを吸うことで肺胞が壊死し、呼吸が使えなくなるどころか生命維持にも異常をきたします」
「初見殺しもいいところですね……それではいくら姉さんでも……そういえば萼さんは

どうやって」
「前に、私の出生をお館様から聞いていますよね」
「はい……鬼に近い生物と人の混血、半人間であると」
「私の世界ではＲｃ細胞という特殊な細胞があります。これは人間にも喰種にも含まれ、この数値が約１００前後が常人。１０００以上を喰種と区分しています。私たち半人間は常人よりも高め……１０００を下回る程度です。Ｒｃ細胞値は基本的にそのままです。喰種であれば食べるたびに上昇するということがありますが……でも、稀に特異体質を持って生まれてくる場合もあります」
「……それが」
「私です。私は自分の血中のＲｃ細胞値を操ることができます。あの時はＲｃ　細胞値を１０００以上に上昇させることで擬似的に半喰種化することで体を作り替え、壊死させられる度に超再生を繰り返していただけです。根本的な解決には至っていません」
「ちょっと待ってください。半人間は間の子であるが故に短命であると聞きました。ではそんな体で超再生を行っていたあなたは……」
　やっぱり、しのぶさんは頭が良すぎるし、根本的に優しい人なのだ。現に今、気づいたように反応した後、酷く泣きそうな顔になっている。
「少し、無茶をしました。でも、生きてます」

「！」

「私は生きて帰ってきました。きっとあそこでやらなければ私はどのみち死んでいたでしょう。悲しませてごめんなさい。でも、私はここになんとしても帰ってきたかった。まだしのぶさんやみんなと一緒にいたかったんです」

だから私は先より今を選んだのだ。

「まだ、なんて言わないでください。いつか離れていくことを前提に語らないでください。――知ってますか、カナヲが私たちの部屋ではなく食堂の側をうろついている事、あれはあなたがここに泊まった朝限定の光景なんですよ？知ってますか、なほやきよやすみがあなたがここに来ることを待ち焦がれて来る予定の日の茶菓子に藤の花の蜜漬けを出してる事。知ってますか、姉さんがあなた宛ての髪飾りを真剣に選んで慣れない包装を一から自分一人でやっていた事。あなたがいることが当たり前になってまだかまだかと待ち続けたところに重体の報せが届いた私の事――あなたはもう、私たちの家族なんですよ？……そんな寂しい言い方、しないで」

「――うん」

しのぶさんの目から溢れ出た透明な雫は、日の光を受けて宝石のように光り輝いていた。

白代萼と蝶屋敷2

怪我が回復し、上弦と戦い生き残ったことや今までの戦績から「甲」に昇格した。カナエさんは柱を降り、蝶屋敷で働き続けている。そしてカナエさんと入れ替わりで柱に昇格したのがしのぶさんである。今日お館様から拝命されるらしい。

私も機能回復訓練を終えたところで今日は蝶屋敷の手伝いをしている。

「カナエさん、こっちの処置終わりました」

「じゃあ新品の包帯持ってきてくれる?こっちのもうなくなりそうなの」

「分かりました」

カナエさんに言われて包帯を取りにいく途中、廊下でうずくまる誰かがいた。

「どうかしました?」

「!」

ビクッと反応して恐る恐る顔を上げたのは

——あちこち怪我をしてボロボロの泣いているアオイちゃんだった。

「——萼、さん」

「アオイさん、怪我してるじゃないですか!病室抜け出してきたんですか!?」

「病室に居たくなくて……私には治療を受ける資格なんてないのに」
「……病室で何かありましたか？」
たしかアオイちゃんの病室は一人部屋だったはずだ。
「いいえ……」
「そうですか……お腹、減ってます？」
「わからないです」
「じゃあちょっと待っててくださいね。でもここはだめです。食堂で待っててもらえますか？」
「はい……」
そのまま彼女は食堂に歩いていく。普通に歩いているはずなのにその後ろ姿は細く小さく見えた。

＊＊＊＊

包帯を置きに行った時、私はそれとなくカナエさんにアオイちゃんのことを聞いてみた。
ここに運びこまれて来たのが約二日前。彼女は任務で負傷したけどなんとか生き残ったーーでも、あと残りの隊員たちは一人は成す術もなく目の前で殺され、もう一人は一緒に運ばれてきたものの既に手の施し様がない状態で結局亡くなってしまった。

そんななか自分一人が生き残ってしまったことや精神的なことから、まったく寝ていないうえにまったく食べていないらしい。
「はい、お待たせしました」
そこで私が彼女に出したのはお茶漬けだった。胃に何も入っていない状態で固形物はきついだろうし、かといってお粥やおじやはどろどろしているから口に残る。なので手早く出来ることもあってお茶漬けにしたのだ。ちなみに出汁茶漬け。具は蒸し鶏と海苔と種を取った小さめの梅干し。
「とりあえず食べてくださいね。今のアオイさん、話す前に倒れちゃいそうですから」
「でも、私には生きる資格なんて」
「ありますよ、資格じゃなくて義務が」
「……」
「というわけで食べてください」
そう言うとアオイちゃんは観念したのかゆっくりとお茶漬けを食べて時間をかけて完食してくれた。
「ご馳走さまでした」
「お粗末さまでした」
お腹が満たされたからかアオイちゃんは出会った当初より落ち着きを取り戻してい

る気がする。
「私、今回の任務で生き残ってしまったんです」
「……はい」
「生き残ったことに対しての罪悪感は……たしかにあります。でもそれよりも、もっと最低なことを思ってしまいました」
「……どんな？」
「鬼が怖い。死にたくない。ーー鬼と戦えない。私は家族を鬼に殺されてその復讐心から鬼殺隊に入隊したのに、結局死にたくなくて……今でも思い出します。目の前で殺されて食られていくのを、私の隣でか細く呼吸をしながら死んでいった同僚たちを……そしたら震えが止まらなかった。もう、一度思ってしまったらだめでした。思い込みと言われればその通りなのかもしれません。でもだめです、だめなんです。立ち向かう自分を想像できない……ごめんなさい、私なんかが生き残ってごめんなさい」
　全部言いたいことを言い切ったのか途中からまた流れていた涙は決壊したように止めどなく零れ落ちていく。
「私はアオイさんが生き残ってくれてよかったと思っています。私、最終選抜を終えてからずっとあなたが気になっていたんです。同期が運ばれてくるたびあなたなのか確認するくらい。あなたは出会った時から自分を卑下していますけど、実はあの時あなた

が私の手当てをしてくれなければ、一緒に行動してくれなければ死んでたかもしれないんですよ」
「ど、して……だってあなたは強くて、私なんかいなくてもどうにか出来たはず」
「実は私は稀血のなかでも特殊な稀血で、鬼の誘引作用があるみたいなんです。だからあの時は鬼を誘き寄せるために怪我をしました。でもその後ちょっとしか怪我をしていない私の手当てをしてくれたでしょう。あの時の山にはまだ数十体の鬼がいたそうです。私の軽率な行動で一歩間違えれば食べられていたところを、何気無いあなたの手当てが救ったんですよ」
「……大袈裟です。私は他に出来ることがないから」
「それでも普通はお礼を言って終わりが殆どですよ。アオイさんだからお礼も手当てもしてくれた。そんな人、私の今までの人生のなかであなただけです。ーー生き残ってくれてありがとうございます」
　他の人たちにだって帰りを待つ人はいただろう。でもそれと同じように、私だってアオイちゃんを待っていたのだ。
「聞いていいですか」
「はい」
「私はあなたの役に立っていましたか」

「はい、それはもう」
「私、……私は生きててもいいんですか」
「――はい。おかえりなさい、アオイさん」
「う、うぅ～～ひっ、うぐ、う」
　アオイちゃんが泣き止んで眠るまで一緒にいることにした。泣き止んで眠ったアオイちゃんを起こさないように気を付けながら運び診察室へ戻るとそこには既にカナエさんだけでなくしのぶさんも帰ってきていた。
「しのぶさん、おかえりなさい」
「はい、ただいま戻りました、萼さん」
「ちょうどよかった、今蝶屋敷のことで話していたところなの」
「ここのことで？」
「はい。ここで立ち話もなんですし、場所を変えましょう」
　そう言って通されたのはしのぶさんの部屋だった。
「まず私はお館様より柱の地位を賜りました。よって今日付けで蟲柱となります」
「おめでとうございます、しのぶさん」
「おめでとうしのぶ。本当は鬼狩りから離れてほしい……なんていうのは私の我が儘ね」

「姉さん……」
「私はこんな体だし、鬼狩りをしてこうなった以上とやかくいう資格はないわ――だから生き残りなさい、しのぶ。生きていればどうとでもなるのだから」
「――分かりました」
しのぶさんは力強く頷いた。それにカナエさんもこくりと頷いて微笑んだ。
「私は二人を追い込みあまつさえ少ない萼さんの時間を削り取った鬼を――上弦の弐を許しません。お館様や他の柱の方々にもそれを話し、上弦の弐の情報を逐一こちらに流してもらえることになりました。なんとしても奴は、必ず殺します」
殺気立ちながらも冷静に言い放つしのぶさん。その決意はどんな言葉をかけても揺るぎないものなのだろう。上弦の強さを知る私どころかカナエさんでさえ何も言えなかった。
「それで今後、研究のことや患者のこともあるのでなるべくここに居るようにはしますが、柱としての任務や情報収集などでいない時も出てくることでしょう」
「そうね、柱の忙しさは他の隊員の比ではないから」
「萼さんも今や階級は甲。加えて上弦との戦いで生き残ったことを含めていつ柱を拝命してもおかしくありません」
「そうなると萼がくる前より圧倒的な人手不足になっちゃうわね」

「みんな懸命に回してますけど、このままだと個人の休憩時間もままならなくなりますね」
「そう、問題は蝶屋敷の運営なんです。鬼殺隊は政府非公認の組織です。となると内部の医療機関である蝶屋敷をなくすわけにはいきません」
「せめて人がいればいいんだけど……」
「ですが皆さん鬼に恨みを持って入隊志願した方が殆どですからあまりこっちを省みないんですよねえ」
　はあ、とため息をつきそうなしのぶさんとカナエさん。うーん、どうしたものか……と、思っていた時に思い当たった。
「一人だけ、推したい人がいます」

「私が、蝶屋敷の医療現場に」
「はい。是非ともアオイさんに加わってもらえたらと思って」
　私が推したのはアオイちゃんだった。
「でも私が出来るのなんて精々応急措置で」

「世の中には唾を付けていれば治るとか言って応急措置すらしない出来ない人もいますよ」
「まず萼さんはともかく蟲柱様の許可は……」
「アオイさんのことを話したら笑顔で即決してくれましたよ」
「で、でも私、戦いが怖くなって逃げ出したんですよ!?……こんな腰抜け一体なんの役に立つっていうんです」
「それですよ」
「?」
「あなたは戦場の怖さを理解しているじゃないですか。隊員のなかにはそういったトラウマや心的外傷で誰かに寄り添ってほしい人もいるんです。そうして鬼を倒せる人たちを治してその人に倒してもらうことであなたも鬼狩りに貢献しているんです。治す人がいなければ戦う人は存在出来ないんですから」
「!」
　はっとしたアオイちゃんに向かって私は頭を下げた。
「お願いします。どうか私たちに力を貸してください」

そしてそれから約一ヶ月後。
「萼さん、明日は採血の日ですから忘れないでくださいね」
「はい、ありがとうございますアオイさん」
アオイちゃんはすっかり蝶屋敷に馴染み、今はカナエさんと一緒に現場を取り仕切っている。
「どうしました？」
「いえ――それじゃあ、行ってきます」
「――はい、いってらっしゃい」
――そう見送ってくれるアオイちゃんは、自分が微笑んでいることなんて知らないんだろうなあ。

白代萼と柱たち

鬼殺隊に入隊して約五ヶ月。私は単独任務の他に柱と行動することが多くなった。
「今日もね、しのぶちゃんがかっこよくてキュンキュンしてね」
「そうですねあの鬼を切った時の笑みなんか輪をかけてかっこいいです」
「ねー」
特に仲良くなったのは今一緒に桜餅を食べている恋柱・甘露寺蜜璃さん。蜜つながりとかしのぶさん経由とかでよくこうして話す。
こういってはなんだけど、私は蜜璃さんのことは好きだけど苦手である。私にはない快活さと人を惹き付ける魅力を持った女性。嫉妬を通り越して羨望が強いというのもある。でもそれ以上に彼女がよく持ち出す話題が一番苦手だった。
「萼ちゃんは好きな殿方できた?」
そう、恋愛についての話だからだ。
「――いえ、そういう恋慕みたいなものはまったく」
「柱の方々なんてどう?皆さんとっても個性的で魅力的な方が多いけれど」
「そうですね、不死川さんは厳しい人ですけど根本的に優しい良い人ですし、伊黒さんは

ねちねち言ってきますけど殆ど正論で筋が通っています。宇随さんはどっちかというと奥さんたちとの方が話しますけど、奥さんたちの幸せそうな顔を見る限り良い旦那さんなんだろうなって。悲鳴島さんは感情を荒げることなく接して下さるので助かりますし、冨岡さんは誤解や単独行動がなければ苦じゃないです。最近柱になった時透くんは忘れっぽいし事務的なところがありますけど柱としての責任を果たそうとする姿は好感が持てます」

「じゃあ煉獄さんは？」

「煉獄さんですか……」

いい人、だとは思う。味方だけでなく自分すら鼓舞して見せる精神の強さとか、高潔とも言える意志とか、人当たりの良さとか。実力にしたってあれほどの炎の呼吸の使い手はそうはいない。でも

——苦手、なんだよなあ。

それについては目の前の甘露寺さんにも言えることだけど、なんというか私はこういう快活というか、太陽のような人が苦手である。苦手であって嫌いじゃないところがミソなわけだけど。

シニカルな人とか情熱的を通り越して暑苦しい人とか様々な人を見てきたけど、ここまで曇りなく清々しい人たちがこうも近くにいるっていうのがね。

……私は家のこともあって基本的に影から出たことのないモグラ属性なので、当り障りなく流すような会話で切り抜けることはできても一対一での会話とか深入りとかがたまにしんどく……いや結構しんどい。
「いい人、ですかねえ」
「いい人」
「あの人が任務に同行してくれるだけで大丈夫だ、って思わせるような堅実さと安心感がある人だと思います」
「――ですって、煉獄さん」
その言葉と同時に甘味処の暖簾をくぐって入ってきたのは煉獄杏寿郎その人だった。
「よもや、よもやだ」
「ごめんね萼ちゃん、煉獄さんが避けられてるからどう思われてるのかを知りたいって言ってたものだから」
嵌められてた。
……まあいいか、当り障りなく話しただけだし嘘は言っていないから。
「すまない、白樺少女」
「いえいいですよ、聞かれて困るようなことでもないですし。それにまずその動機を作ってしまった私に過失があります」

　というかやっぱり気付かれてたのか避けてること。これでも円満に任務を回すために流す程度の会話や行動はしていたつもりだったんだけど。さすが柱だ。侮っていたつもりはなかったけど私が甘かった。
「嫌っているつもりはないんですけど、私の身内って冨岡さんみたいな分かりづらい天然か、皮肉屋しかいなかったので……ちょっと慣れなくて」
「なるほど、そういうことだったのか！てっきり俺が白樺少女に嫌われているものとばかり」
「そういうわけではないです。あと私は白代（あきしろ）です」
「すまん、白代少女」
「いいえ」
　このままだと煉獄さんのなかで白樺になってしまいそうなので訂正させてもらった。
「蜜璃さん、よければ私の桜餅いりますか？」
「え、いいの？でもそれは萼ちゃんので……」
「蜜璃さんがこうして間を取り持ってくれなければ今後に支障が出ていたかもしれませんから。これはちょっとしたお礼です」
　というか私もおかわりして今三皿目だったから味わってないわけじゃないし、持っていくがいい。……尤も、彼女の横に聳え立つ皿の山脈からして申し訳程度にもなりそう

にないけど。
蜜璃さんは最初は私に遠慮して桜餅と交互に見ていたけど、私が手ずから差し出せば輝くような笑顔でお礼を言ってそのまま頬張った。うん、幸せそう。可愛い。
「可愛いなあ……」
思わず心の声が出てしまった。
そう、なぜ私が恋ばなは苦手なのに蜜璃さんとよく一緒にいるのかというと安心感と母性と羨望の混ざった可愛い彼女を愛でたい気持ちがあるからである。
すると蜜璃さんは途端に真っ赤になった。
「そ、そんなー、ありがとう。萼ちゃんも魅力的よ」
「そうですか?……ありがとうございます」
お世辞だとしてももらっておこう。こういう事を表面的なものとしては前の世界の付き合いで受け取り慣れているし。ちなみに大抵の場合は保身とか社交辞令だった。むしろ私自身に言われたことはない。
「うむ、仲が良いのはいいことだ!」
「よろしければ煉獄さんも何か召し上がりませんか?今までのお詫びに私が支払いますし」
「いや、今回は遠慮しておこう。この後任務に赴かなくてはならないからな!」

「まあ！ごめんなさい私ったら……」
「気にするな甘露寺！むしろお前のおかげで白代少女の内心が分かったのだ、感謝する」
「そ、そんな！こちらこそありがとうございました」
「では、俺はこれで失礼する！」
「はい、ではまたの機会に」
「またな、甘露寺、白代少女！」
　そして去っていく煉獄さんを見送った後、私たちもお茶を再開する。
「やっぱりいい人ですねえ」
「でしょう？」
「はい」
　ニコニコと笑顔で桜餅を咀嚼する蜜璃さんをまた可愛いな……なんて思いながら私もお茶を飲み干す。見上げた空は雲のふわふわが可愛らしい青空だった。

白代萼は拝命する

「萼」
「は」
「君の活躍は聞いているよ。単身で鬼を討伐し、上弦との戦いでも善戦し生き残った。そして君の鬼の討伐数は今や五十体を遥かに上回った。君が生き残ってくれている奇跡と君に私は感謝している」
「ありがとうございます。恐縮至極でございます」
お館様はひなき様とにちか様に支えられながら布団から起き上がっている。最初に会った時より容態が悪化していると聞いてはいたけど、本当はこうして人に会うことさえつらいのではないのだろうか。
「すまないね、こんな格好で」
「いいえ！滅相もない！どうかご自愛ください!!」
「ふふ、ありがとう。君は優しい子だね」
やや咳き込みながらも微笑むお館様の顔色はあまりよくない。せっかく呼んでいただいたけど出直した方がいいだろうか。そう思ったがお館様は私の言いたいことを察

したのか首を緩く振った。
「萼、柱になる条件は知っているね」
「はい」
柱になる条件。それは階級が「甲」で、十二鬼月を討ち取る事、もしくは鬼を五十体倒すこと。
「君が鬼殺隊に入って約半年。本当はもっと期間を置いてからにしたかったんだけど――特例として無一郎が二ヶ月で柱になった。ごめんね萼。これは私の我儘に過ぎないしなんだったら聞かなかったことにしてくれてもいい。――私はね、萼に死んでほしくないんだ」
「！」
「出来ればもっとこの世界を知ってほしかったし、普通の幸せに浸らせてあげたいと思っている。だから萼自身に選んでほしい。鬼殺隊を離れてこの世界に馴染むか、鬼殺隊の柱となって戦うか」
「――」
「もちろんどっちを選んだって構わない。むしろ蝶屋敷の子らや私たち産屋敷の者たちは君に普通の幸せな人生を歩んでもらうことを望んでいるくらいだ。萼」
お館様は、珍しく顔を歪ませた。きっとこの究極の選択を一隊員である私にさせてし

まうことに思うことがあるのだろう。それでもこの選択肢をくださったのは同じ短命な私に対する一種の慈悲なのかもしれない。

「お館様、お心遣い感謝いたします。ですが、私はこの先もお館様に付いて行きます。この世界に居場所をくださった他でもない産屋敷輝哉様に私はついていきたいのです。——確かに私は当初自由を求めていました。ですがあの時お館様にいただいた言葉、居場所、産屋敷家の皆様、蝶屋敷の皆様、柱の方々——この半年、鬼殺隊で様々な出会いや出来事を体感しました。ゆえに私は、私の意志でこのかけがえのない鬼殺隊を、貴方様を守りたいと思うのです。どうか無礼とは存じますが、我儘を聞き入れてはもらえませんでしょうか」

「……いいのかい、本当に」

「はい。私は行く当てがないのではなく、私がここに居たいからここにいるのです。どうか鬼殺隊に置いてください。お願い致します」

「そうか、それが君の意志なんだね」

「はい」

「顔を上げておくれ」

「はい」

顔を上げる。お館様と目が合う。酷く儚く、酷く優しい、決意や覚悟を決めた目だっ

た。

「では萼、今日から君に蜜柱を任せる。鬼殺隊を支える一柱として、私の家族として、一日でも長く君が生き永らえるよう、心から願う」

「蜜柱・白代萼――拝命致します。ありがとうございます、お館様」

＊＊＊＊

その日蝶屋敷に戻ったら私が柱になったことを記念してのパーティーだった。アオイちゃんの作ったとてつもなくおいしい料理とそれぞれみんなにお祝いの言葉をもらってほっこりした気分で床に就いた。

その翌日、私はしのぶさんの部屋に来ていた。

「萼さん。これ、前にあなたに頼まれていた藤の毒の濃縮されたものです」

「ありがとうございます、しのぶさん」

「あくまで鬼用の毒ですから人間には無害なはずですけど、一応気を付けてください。藤には人間に効く少量の毒がありますから」

「はい」

私は誘引作用のある稀血であり、あの上弦の弐のように倒せなかった場合は最悪なことにもなり兼ねない。私は最もそういったやつらに出くわしやすい柱になったのだ。対策は打っておくべきだろう。そこで考え付いたのが藤の花の毒を服用することであ

る。そうして毒に浸してしまえば鬼は私を食ったと同時に死に絶える。
所謂「毒の娘」というやつだ。これならあの時のように動けずに食われそうになっても一矢報いることができる。
しのぶさんにこれを話した時は「食われる前提で話すのは気に食いませんが、それであなたの生存率が少しでも上がるのなら」と受託してくれた。でも毒は私だけじゃなく、なぜかしのぶさんも飲むことになった。
「毒を食らわば皿まで、ですよ」
と笑顔で一緒に藤の花の毒を煽った。飲みやすいようにとこれまた藤の花の蜂蜜も一緒に混ぜて。酷く甘くて、背徳的な気分だった。藤の「花」の「蜂」と「蜜」なんて私たちらしい。そう思ったのは私だけだろうか。

そして柱合会議。みんなの待つ広間の扉が開く。
「蜜柱の任を拝命いたしました。白代萼でございます。これからも日々精進してゆきますので、どうぞよろしくお願い致します。」
そして私は正式に蜜柱となったのだった。

白代萼と炭治郎

柱になってから約二年半。私は便宜上十七歳になってまだこの世界で生きている。

柱になって変わったことは特にない……わけではなく、任務の多さは確かに柱になったことで実感したし、今までの貸家を引き払ってお館様に頂いた大きな屋敷で寝起きするようになった（屋敷に特に名前は付けていないけど、皆私から取って蜜屋敷と呼んでいる）。平日の空いた時間は蝶屋敷か若様方の世話役紛いのことをしている。休日に何もすることがなくなっても同じだ。たまにぼーっとしていたくなった日だけ屋敷に籠る。そうないけど。

「カアー、ウテナさんウテナさん！任務要請ー!!」

「ありがとう玖楼くん、ちょっと待ってね」

「マツー、マツー！」

旅支度をして任務に向かう。

途中藤の家に寄って夜まで休ませてもらい夜は鬼を殺す。毎回やることは一緒だ。

「そういえば今年は何人合格したんだろう」

私がアオイちゃんと出会う契機にもなった最終選抜。今年もそれなりの人数が来たらしい。カナヲは私としのぶさんとカナエさんで修業を見たので言うまでもないけど（実際余裕そうに帰ってきたのでそのまま合格・帰還祝いのパーティーになった）案内役である輝利哉様とかなた様いわく今年は豊作だったようだけど……

「（かなた様……）」

帰ってきたかなた様には殴られた痕があって整えたはずの髪もぐしゃぐしゃになっていた。聞くところによると虫の居所の悪かった合格者にやられたらしい。そして別の合格者に助けられたとも言っていた。

――たしか、花札の耳飾りを付けた少年だったか。

お礼を言わなくては。

「（私の同期で生き残っているのはアオイちゃんだけ）」

他の三人は全員一年以内に死んだ。

「今年の子たちは何人生き残ってくれるのかなあ……？」

「カアー、カアー！」

「……そうだね、私は私で動くしかないよね」

指に止まった玖楼くんを撫でてから藤の家を出た。

＊＊＊＊

「鬼の匂いがする以上、避けては通れない、か」

鉄錆びの匂い、血の匂い、鬼の気配、人の気配。様々な者が渦巻いている屋敷の前に私は立っている。

「――とりあえず一番強い鉄錆びの匂いのところから当たってみるか……って原稿？」

床に落ちている原稿用紙――というかそのまま手書きの原稿らしきものを拾い上げていく。ホラーゲームだったらこういうのがキーになったりするんだけど、そんな都合のいい事ないだろうなあ、現実だし。と思いながらも拾い集めて読みながら進んでいく。

さらに奥に入って警戒しながらできる限り速度を上げて進み続け――行き当たった。

襖は……いいか、ここの住人っぽそうな気配はないし。

そしてそのまま切り捨てて中に突入する。

中にいたのは鬼殺隊の隊員の男の子、それから鼓が特徴的な鬼。

「こんにちは、取り込み中だった？まあ鬼なんだし当然捕食しようと思ってのことなんだろうけど……にしても面白い血鬼術だねえ。反転した世界も倒錯的で悪くない」

「あ、あなたは？」

困惑しながら私を見る少年ににっこりと笑顔を向ける。

「通りすがりの先輩だよ。とりあえず自己紹介はちょっと待ってね」
言葉を区切ってそのまま特攻する。血の匂いや鉄錆びの匂いは強いけど上弦クラスではないな。
「この匂い……貴様も稀血か！ちょうどいい、貴様から先に喰らってやろう」
「正解だけど、それは無理なお願いかなだって――」
あなたはここで死ぬのだから。
まず鬼の頸を刎ね、胴を、手を、足を、すべてを分割するように切り刻む。
……首を刎ねるだけで充分だというのに今でもつい解体してしまう悪癖（？）はそのままである。切り飛ばされた鬼の首がこちらを――正確に言うと私の持つ原稿を見ていた。
「――それは、小生の、原稿」
「ああ、これの作者はあなた？ならこれもらってもいい？」
「……そのようなものを持っていて、何になる」
「私が気に入ったからもらいたいだけ。綺麗な言葉と文章を読むのが好きなのよ」
「きれい……小生の話が……そうか、面白かったか？」
「ええ、とっても。少なくともどこかの軽そうに見えてえぐい内容を書いてくるくせ毛作家より読みやすい」

あの人の作品はいちいち私の触れてほしくない部分に焦点を当てて抉ってくるようなものばかりなのだ。あの人の作品の一ファンではあるけど新作が出るたび精神的に弱る。圧倒的矛盾である。

「……そうか」

そう言うと鬼は満足げに消滅していった。……ひょっとしたら誰かに認められたかったのかな。

「す、すごい……」

「ありがとう、これで少しは落ち着いて話せるかな。私は白代萼、君と同じ鬼殺隊の一員」

「俺は「竈門炭治郎、でしょう?」！なんで俺の名前」

「ちょっとお礼が言いたくてね。最終選抜の日輪刀の玉鋼選びの時にかなた様を――案内役の方を助けてくれてありがとう。おかげであの方は痕が残ることもなくすっかり良くなったの」

「そんな、俺は当然のことをしただけで」

「うふふ、謙遜しなくていいんだよ。と、そういえば気になってたんだけど――どうして君から鬼の匂いがするのかな?」

「!!」

炭治郎くんの顔色が一瞬にして変わった。心なしか呼吸や心音が早い。
「血の匂いがしない、無垢な鬼の匂いが人間である君の匂いと別に付いてる。ここまで染みついているということはずっと一緒にいる、ということなのかな？」
「あ、あの！禰豆子は鬼にされましたが人を一度も襲っていません！食ってもいません！」
「うん、きっとそうなんだろうね――私もお館様から何もない以上手を出す必要性を感じないし……なにより君から嘘の気配がしない。だから、信じるよ」
「！本当ですか！ありがとうございます!!」
礼儀正しく頭を下げる炭治郎くん。随分真っ直ぐな子だ。所謂私の苦手なタイプその三。あんまり深入りしたくないけどいい子だし……乗りかかった舟だからなあ。
「でも気を付けて。鬼にも人にも。私に連絡が来てない以上、お館様が――鬼殺隊の頭首が容認していても他の一般隊員には何も知らされていない可能性が高い。鬼殺隊は基本的に鬼に恨みのある志願兵の寄せ集めだから」
「はい……」
心当たりがあるのか炭治郎くんは下を向いた。やってしまった。いじめたいわけじゃないんだけど。
「でも、君がその子を制御できると、その子が決して人を食わないと証明出来たのなら、

きっと大丈夫」
「……はい！」
　――まあ、喰ってしまったその時は私が二人とも殺せばいいだろうし。
　なんて思ったことは口にせず黙しておこう。
「もう他の気配もしないし、私はもう行くから。じゃあね」
「はい！ありがとうございました！」
　炭治郎くんに見送られ私はそのまま屋敷から飛び出た。長居するつもりはなかったし、私の身体能力ならこのくらい元から難なくこなせる。
「さて、私たちも帰ろう玖楼くん」
「カエル、カエルー！」
　玖楼くんは飛ぶのをやめて私の肩に乗る。そして私も羽を一撫ですると歩きだした。
「本当は、助けなくてもよかったのかもね」
　きっとあれは彼一人でもなんとかなったのかもしれない。なんて今冷静に分析して思ったけど、もうそれも後の祭りだろう。
　そんなぼやきは私の中に溶けていった。

白代萼と柱合会議

炭治郎くんと出会ってから数日経ったある日、蝶屋敷で仕事をする私のもとに玖楼くんの通じてお館様より伝令があった。

「カアー！水柱と蟲柱が戻り次第柱合会議！柱合会議！」

「もうそんな時期なんだねえ、他には何か聞いてる？」

「二人が拘束した鬼を庇う隊員の裁判ダッテ！」

「――その隊員の名前は分かる？」

「マダワカラナイ！」

炭治郎くんは容認されていたわけだし、じゃあ別の誰かなのだろうか。いやでも柱の私に伝わってなかったっていうことは……ひょっとしたら他の柱にも連絡がいっていないっていうことなんじゃ……？

どっちにしても結局その場に行ってみないことには分からないのだ。この思考はここまでにしておこう。

「伝令たしかに賜りました、ってお願い出来る？」

「ウン！分かった！カアー！」

そのまま玖楼くんを見送ると仕事に戻る。しのぶさんとカナヲがいない分私もいつも以上に働かなくては。

「萼さーん！」

「今行くー！」

呼ばれた声に私は意識を仕事の方に切り替えた。

＊＊＊＊

柱が全員戻ってきたと報せを受けて私も産屋敷邸に運んでもらい、中に入る。不死川さん以外の全員がそこに揃っていた（一人は木の上だけど）。

「皆さんお久しぶりです。あと来ていないのは不死川さんだけですか？」

「萼ちゃんお久しぶりー！」

「お疲れ様です萼さん。私が居ない間蝶屋敷をありがとうございます」

「いえ、カナエさんやアオイさんたちもいてくれますから。おかえりなさい、しのぶさん」

「はい、ただいま戻りました」

和やかに私たちが話す中、隠の人が見覚えのある羽織を着た誰か――というか炭治郎くんを背負ってやってきた。そしてそのまま無造作に床に寝かせると容赦なく起こそうとする。いやこのちょっとピリピリしてる空気の中にいたくなくて早く起こそうと

してるのはわかるんだけどさ。見た感じ炭治郎くん傷だらけでボロボロなのに起きないからって何度も怒鳴るのはどうなんだろう。
「やいてめぇ」
「そう何度も怒鳴り起さなくても大丈夫ですよ、ここまで彼を連れてきてくださってありがとうございました。私が起こしますから少し下がってくださいな」
「み、蜜柱様!?しょ、承知しました!!」
そういうとズザザザッ!と音がしそうなくらい凄いスピードで下がられた。
なんか納得いかないけど、そろそろ起きてもらわないとお館様がお見えになってしまう。
私は構わず炭治郎くんを起こすことにした。
「起きて、炭治郎くん」
炭治郎くんは起きない。かと言って暴力的に起こすのはよくない。
「起きなさい。早くしないとお館様がお成りになるわ」
「っ……?!」
「やっと起きたね、おはよう炭治郎くん」
状況が把握出来ていないのか驚いたように周りを見回している。うん、そうだよね。
そりゃあ任務で死にかけたと思ったら目を覚ましてすぐに人に囲まれている状況なん

てそうないし、あったとしても絶対にいい連想はしないだろう。
「ここは、鬼殺隊の本部です。あなたは今から裁判を受けるのですよ。竈門炭治郎君」
「っ！ゴホッゴホッ」
「……口の中乾いちゃってるのかな。しのぶさん、水とかってありますか？」
「ありますよ。きっと体もかなり痛むでしょうから、鎮痛剤入りの方がいいですよね」
「ありがとうございます」
　しのぶさんから鎮痛剤入りの水をもらい、炭治郎くんに飲ませる。
「乾いたままで勢いよく呼吸しちゃだめだよ。身体への負担も肺への負担も大きいんだから、飲んで落ち着きなさい」
「――ぷは、ありがとうございます、萼さん」
「どういたしまして」
「あら、冨岡さんだけでなく萼さんも坊やと面識があるんですか？」
　意外そうに言うしのぶさんの言葉に全員の視線が私の方を向く。
「まあちょっと、帰り道に彼の任務地とかち合って出会った感じですね」
「では白代はこの隊員が鬼を連れていることを承知の上で放置していたと？」
　伊黒さんの指摘にやや室内の空気が張り詰める。
「私も禰豆子さんに直接会ったことはありませんが、結果としてはそうなります。炭治

郎くん本人の匂いとは別に血の匂いが一切しない鬼の匂いがしたことは確かですから。正直驚きました、こんなにも無垢な鬼の匂いがあるのかと」
「……お前の御託はどうでもいい。問題はなぜ鬼を容認していたのかだ」
「うむ！鬼を庇うなど明らかな隊律違反だからな！」
「白代に冨岡、柱が二人もか。こりゃあ派手に洒落になんねえぞ」
「それに関しては面目ないというか……反省しています」
「反省で許されるのならば隊律などいらない」
「かわいそうに、そこの少年も二人も鬼に騙されているのだ」
　ごもっともである。まず渦中の私にしたって純粋に炭治郎くんたちを信じてそのままにしたわけではない。いざとなったら確実に私が二人とも仕留められるかどうかを判断した上で泳がせていた、というのが正しい。
「あのお、でも疑問があるんですけど…お館様がこのことを把握していないとは思えないです。勝手に処分しちゃっていいんでしょうか？」
　蜜璃さんのその言葉にみんなは大人しくなった。でもやっぱり思うところがあるのか何とも言えない顔をしている。そんな中必死な叫びと足音が近づいてくる。
「困ります、不死川様!!」
「鬼を連れてきた馬鹿隊員はそいつかィ？」

それは隠に必死に止められながら鬼の匂いがする木箱を持った不死川さんだった。
「不死川さん？勝手なことしないでください」
しのぶさんが険しい顔つきで怒ってもどこ吹く風と言わんばかりの態度で不死川さんは続ける。
「白代ォ!!」
「何でしょうか、不死川さん」
「なぜこいつのことを黙ってた？」
「こんなことは前例がないのでお館様が認知されていないはずがない、と思ったことと炭治郎くんが嘘をついている気配がなかったこと。炭治郎くんに付いているその子の匂いに血の匂いがしなかったことですね。――それにいざとなったら私が二人を始末するかどうかも加味して、ではありますが」
「……いざとなったら、だぁ？」
「はい」
「襲われてからじゃ話にならねえ、証明できんのかよ、ああ？」
「必要だとおっしゃるのであれば」
「てめえ……」
「……」

私に痺れを切らしたのか舌打ちをすると日輪刀を構えて木箱に当てる。
「！不死川さん」
「やっぱりてめえは甘えんだよ！」
「や、やめ！」
顔を青くして炭治郎くんが制止しようと声を上げるも間に合わず、日輪刀は深々と箱に刺さり箱の穴からは血が滴る。
「……善良な鬼と悪い鬼の区別もつかないのか!?」
「鬼に良いも悪いもあるか！鬼なんてのは所詮人食いの化け物なんだよ!!」
「っ!!」
「炭治郎くん!?」
私が声を上げるが先か、炭治郎くんは両手を縛られた状態で跳躍し――不死川さんに渾身の頭突きをお見舞いしていた。
「っぐ」
「あだ！」
不死川さんは相当衝撃が強かったのか鼻を抑えてしゃがみこむし、炭治郎くんはそのままというか、落下して盛大に倒れ伏した。
「不死川さん！炭治郎くん！」

炭治郎くんは隠に回収されたので私は不死川さんの方へいく。
鼻血は出ているけど骨や眼球は大丈夫そうだ。とりあえず拭くのと応急処置として拭いてからハンカチを不死川さんの鼻に当てた。止血は呼吸でできるので大丈夫だけど、これからまもなくお館様が来るのだ。身だしなみはしっかりしなければ。
「てめえ、ふざけんなよクソガキ！」
「不死川さんむやみに動かないでください！血の付いた顔でお館様に謁見なさるつもりですか？」
「っ……寿命が数分延びたな」
さすがにまずいと思ったのか不死川さんは皮肉を口にしてから素直に鼻に当てられていた私のハンカチで血を拭った。
ちょうどその時、ここに近づく足音がした。
「お館様のお成りです」
「よく来たね、私の可愛い剣士たち」
「！」
私はその場に伏す。他の柱たちも同じように。炭次郎くんは状況が読めず、隠に強制的に伏せられていた。
「お館様におかれましても御壮健で何よりです。益々の御多幸を切にお祈り申し上げま

す」
「ありがとう実弥」
「畏れながら、柱合会議の前にこの竈門炭治郎なる鬼を連れた隊士について、ご説明いただきたく存じ上げますがよろしいでしょうか」
「そうだね、驚かせてしまってすまなかった。ーー炭治郎と禰豆子は私が容認していた。そして皆にも認めてほしいと思っている。萼のようにね」
しかしやはりというか、お館様の御言葉を以てしても反対の柱の数が多い。
そこでお館様は一通の手紙を取り出した。それは炭治郎くんの育手からの嘆願書だった。
「〝もしも禰豆子が人に襲いかかった場合は竈門炭治郎及び――――…鱗滝左近次、冨岡義勇が腹を切ってお詫び致します〟」
そうか――そっかあ……
「お館様」
「なんだい萼」
「その文面に私の名を足していただきたく」
「!」
周りの柱は皆何かしらの反応をしているし、炭治郎くんも泣いてるけど、ここまでさ

れている子なのであれば――私も懸けよう。私みたいな風前の灯がどの程度効くのかは分からないけど、ないよりはいくらかましだろう。

「確かに鬼は抹消すべきものだと思いますが、そう思いながらも私が二人を見逃したのは事実です。鬼殺隊の一員としてお館様より授かった蜜柱として、気休めにもならないかもしれませんが、どうか責任の一端を担わせてくださいませ」

「……切腹するから何だと言うのか。死にたいなら勝手に死に腐れよ。何の保証にもなりはしません」

「不死川の言う通りです！いくら白代が命を懸けると言っても、人を食い殺せば取り返しがつかない!!殺された人は戻らない！」

「確かにそうだね。人を襲わないという保証ができない。証明ができない。ただ――人を襲うということもまた証明できない」

「!!」

「――いえ、証明ならば私が」

私は隠の方に行って木箱を受け取り許可をもらって日光の当たらない屋内へ上がる。

「炭治郎くん、ちょっと禰豆子ちゃん出すね」

一応断りを入れて扉を開ける。その中にいた小さな可愛らしい女の子だった。

「ごめんね、すぐに終わるから」
「？」
そして私はその子の目の前で自分の腕を切り付けた。それなりに出血が多い。
「！」
それを見た彼女からは涎が垂れていたものの勢いよく顔を背けた。――よかった。
「――いかがでしょう、お館様。これで竈門禰豆子は人を襲わないという保証にはなり得ませんか？」
するとお館様は微笑んだ。
「ああ、ありがとう萼。これで禰豆子が人を襲わないという証明がされた。怪我をさせてしまってすまないね」
「お館様のためとあらば」
そして私は禰豆子ちゃんの箱を閉じて一緒に下がった。
「疑いも晴れたことです。その子たちを蝶屋敷へお願いします」
「いいんですか？しのぶさん。もしものために私の屋敷の方が……」
「いいんですよ。あなたがそこまでしたんですから、私も一先ずは信用します。というわけで、お願いしますね」
しのぶさんは微笑むと隠に指示を出して退出を促した。

「承知いたしましたぁ!!」
「ではこれより柱合会議に入るとしよう」
「え、あの!まだその傷の人に話が……」
粘ろうとする炭治郎くんに何かが――玉砂利が当たった。
「お館様の話を遮ったら駄目だよ」
犯人は時透くんか。まあ仕方ない。怪我人の二人には悪いが、この場において一番優先されるのはお館様なのだから。
そして炭治郎くんたちは引きずられるようにして退出して行った。
「さあ、気を取り直して柱合会議を執り行うとしよう」
『御意』
後で様子を見に行こう。というか冨岡さんも嘆願書出すくらい可愛がっているのならもうちょっとフォローに回ってもよかったのではないのだろうか。なんてモヤモヤしながら私は今日の柱合会議に参加することになった。

白代萼の見舞い

柱合会議明け、私は非番なのでお見舞いも兼ねて蝶屋敷に向かう。

「(にしてもあの後の不死川さん、滅茶苦茶機嫌悪かったな)」

まあこの世で一番嫌いなものを消す組織に入ったのに、いきなり容認する。なんて言われて挙句その原因みたいな子に不意打ちとはいえ頭突きで返り討ちだからなあ……そりゃそうなるか。

ただそのせいで那田蜘蛛山の仔細報告にきた人にも隠にも怯えられてたから、ちゃんとした報告を聞くためにもそういうのは後でにしてほしい。

「ごめんください、白代です」

返事が返ってこない。

いつもは必ずだれかが出てきてくれるはずなのに……ということは総出でやらなきゃならないほどなにかあった?

「萼!久しぶり」

わけではなかった。

「カナエさん、数日ぶりですよ」

「あら、そうだったっけ？」
「はい」
「今回の柱合会議は延びたものね。さ、上がって」
「お邪魔します。あとこれお土産のカステラです」
「まあ！ありがとう、じゃあ今日のおやつにしましょう！」
　機嫌よくカステラを受け取ってくれたカナエさんとともに屋敷に入る。どこかの誰かさんとは真逆だ。
「そういえばしのぶから聞いたわよー、また無茶したんですって？」
「ええと、柱合会議での事ですか？」
「そう。自分から鬼の子の潔白を証明するために切ったって。カナヲなんて『切った』ってしか聞いてなくて真っ青になってたんだから」
「すみません……」
「反省してるならそれでいいです、でもあんまり自分をないがしろにするようならこっちにだって考えがあるんだから！」
　しのぶさんならともかくカナエさんにここまで言われるとは……気を付けよう。切実に。
「そういえば炭治郎くんと禰豆子ちゃんは？」

「その子たちなら山で一緒だったお友達と同じ病室で寝てるわ。けど――」

「俺薬これで何個目？ねえ誰か数えてる!?数えててよ！ねえお願いだから!!」
「うるさいぞ善逸、ここは病室なんだから静かにってアオイさんに言われただろう！」
「だって俺この中じゃ一番重症だよ?!手足がちゃんと元に戻るまで怖くて寝られないよ～!!」

「こんな感じでなかなか収拾がつかないの。毎日」
「これが、毎日」
「そう、毎日」
特に騒がしくしている金髪の――我妻善逸という少年は同じ病室の猪の被り物の少年（こちらは嘴平伊之助というらしい）と一緒に蝶屋敷に搬送されてきたらしいが、この部屋に連れて来られてからずっとああして喚いているらしい。アオイちゃんが注意しても収まらず、カナエさんに諭されて大人しくなるものの、それから数分足らずで元に戻る。さすがのカナエさんも困り切っていた。
カナエさんを困らせるって、凄いなあの金髪の子。というかなんでこの時代で金髪？

外国人っぽい特徴はほぼ見当たらないから血筋ってわけじゃなさそうだし……蜜璃さんみたいに食べすぎとか？

　というか炭治郎くんがちゃんとこうして叱ってくれてるから他の病室から苦情が来てないんじゃ……

「こんにちは、みんな調子はどう？」

「カナエさん！はい、まだ痛みますけど来たばかりの時よりはいいです！」

「そうよかった。善逸くんは今日もちゃんとお薬飲めたのね。苦いのにえらいわ」

「そ、それほどでも～うぇへへへ」

「それから炭治郎君、あなたと禰豆子ちゃんにお客さんよ」

「俺と禰豆子に？」

　あ、そっか。カナエさんの後ろからちょっと離れたところにいるから分からないのか。

「こんにちは、炭治郎くん」

「萼さん!!」

「え、誰?!」

「ああ、伊之助くんと善逸くんとは初対面だったね。私は萼。白代萼、君たちの先輩にあたります。よろしくね」

　できるだけ笑顔で話し掛けたはずなんだけど、善逸くんは固まってしまった。
「すみません、ちょっと炭治郎借ります」
「え、ええ？うん？」
　なぜか善逸くんは炭治郎くんを引き摺って私から離れたところで何かを喋っている。遠くて小声なのでよく聞こえない。
「(た、炭治郎ー!!なんだよあの超絶美人!?あんなご立派な胸(モノ)、括れ、お尻!!極めつけにあのご尊顔!!お前いつ知り合ったんだよ!?)」
「(萼さんを邪な目で見るんじゃない！失礼だろう!!清君たちがいたあの屋敷で俺を助けてくれて、呼ばれた柱合会議でも禰豆子のことを庇ってくれたんだよ)」
「(はぁー?!俺が鬼に襲われて今にも死にそうになってる時にお前は！あんな綺麗な人と一緒にキャッキャウフフしてたってか!?)」
「(そんなことはしてない!!)」
「あの……」
　思いっきり蚊帳の外になってしまい手持ち無沙汰の状態に耐えきれなくなり話しかけると勢いよく善逸くんがこっちにやってくる。
「は～い、どうしました萼さん」
「と、とりあえず皆元気そうで良かったよ――禰豆子ちゃんは？」

「禰豆子ちゃんならあそこの箱の中ですよー」
　善逸くんが指さす方を見るとそこにはあの時の箱があった。
「そっか、炭治郎くん。日に当たらないように気を付けるから、また禰豆子ちゃん出してもいい？」
「はい、構いません。禰豆子、萼さんが来てくれたぞ」
　炭治郎くんがそう言えば箱からカリカリと引っ掻くような音がした。彼女なりの返事なのだろうか。
「大丈夫だそうです」
「じゃあ失礼して」
　ゆっくりと開けるとあの日と同じ可愛らしい小さな女の子がひょこっと出てきた。
「来るのが遅くなって申し訳ない。あの時はごめんなさい、試すようなことをしてしまって。不死川さんからの傷はもう大丈夫？」
　禰豆子ちゃんの体をまんべんなく見てみるけど、これと言って目立つような傷はなかった。
「よかった」
　ほっと胸を撫でおろすと頭の上に温かいものが置かれて行き来する。よく分からず上を見ると禰豆子ちゃんが私の頭を撫でていた。

「気にしてないですって」
「そっか……禰豆子ちゃんは優しいんだねえ」
頭を撫でられるなんていっぷりだろうか。ほんの少し泣きたくなってしまうのを耐えて私もお返しとばかりに小さな体を抱き上げた。
「ありがとう、禰豆子ちゃん」
こんな小さな体で、実年齢だってまだ十四歳。敵意に満ちたあの空間は心底怖かっただろうに。命を懸ける相手に逆に慰められてしまうなんて。私もまだまだだ。
＊＊＊
あの後お見舞いの品として病室にもカステラを置いて、私は中庭に来ていた。
「たしか今の時間帯ならいるはずなんだけど……」
と言っていると目的の人物を発見した。
「カナヲー！」
「！、萼」
私がカナヲの方に行くよりも早く驚いた顔のカナヲが私のもとにやってきた。
「だ、大丈夫なの？柱合会議で怪我して出血したって……」
「大丈夫、これと言って支障もないし、そこまでバッサリ切ったわけじゃないから」
「よかった……」

ほっとした様子のカナヲに申し訳なさでいっぱいになる。あの時の笑顔に始まり、今となっては自分の心で判断できるようにもなってきたカナヲの成長に喜びつつも、それ故にこういう時は罪悪感があるのだ。
「今度からは気を付けるよ」
「そうして」
「はい」
即返ってくる返事。うん、カナエさんとしのぶさんに似てきたよね。
「そういえば今病室に入院してるのってカナヲの同期なんだっけ」
「うん」
「機能回復訓練って、カナヲもアオイちゃんと一緒にやるの？」
「師範は忙しいしカナエ様は他の患者を診ないといけない。萼は今回の怪我も含めて強制休暇」
「え」
「いい加減に休めって師範が。カナエ様も私もアオイもみんな満場一致だった」
「ええ」
「だから萼、ちゃんと休んでまたここに戻ってきて」
カナヲから小指を差し出された――なるほど、約束か。私もそれに倣って小指を絡め

た。

「うん、全快して戻ってくるよ」

「「じゃあ約束／ね」」

さすがに針千本はきついので事実上の謹慎処分を受け入れるしかなかった。

ちなみにこの手を考えたのはカナエさんだということを知ってあの時の『考え』はこれだったのかと後々気づくことになるのだけど、今の私は知る由もない。

白代萼と炭治郎２

実質上の謹慎により暇を持て余している私は結局蝶屋敷と自分の屋敷を行き来する生活を送っている。といっても蝶屋敷の仕事回してもらえないし、カナヲの修業も見させてもらえないから、ただ遊びに行ってるだけなんだけど……

あと炭治郎くんたちの病室には行ってません。この間行った時、お見舞いに来てた一般隊員の人と被って物凄い勢いで逃げられたから。柱＝怖いっていう方程式でも浸透しているんだろうか？この間の隠の人といい失礼じゃない？

というわけでもうお見舞いには行かず素通りしているので三人がどうなっているのかは分からない。

「あの三人なら機能回復訓練に入りましたよ」

「へえ、相手は？」

「ほぐしはなほ・きよ・すみで、反射と全身は私とカナヲで……なんですけど」

なんだかアオイちゃんから怒りのオーラを感じる……

「炭治郎さん以外は二人とも逃げ出しました」

「それは……なんていうか」

「いいんですよ！やる気のない人に何を言ったって無駄ですから!!萼さんもしっかり療養してください！では！」

そのまま仕事に戻っていくアオイちゃんを見送った。なら炭次郎くんは今一人で頑張ってるのか。……差し入れとか、持っていこうかな。

「(あ、いた)」

炭治郎くんを探していると、彼は縁側にいた。持っているのは――なるほど、瓢箪か。

「頑張ってるね」

「萼さん！」

「うふふ、瓢箪を持っているっていうことは全集中の常中の修行かな？」

「はい、これがなかなか難しくて……」

「うーんそうだね、でも全集中が出来るようになればあっという間だから」

「あのお、よろしければ萼さんにお手本を」

「萼さんが使っているサイズの瓢箪もありますから」

なほちゃんとすみちゃんにすすめられて身の丈よりちょっと小さい瓢箪を手に口付け――吹いた。

まあ破裂した破片は各自でなんとかしてください。

「うん、感覚が鈍ってないみたいでよかった」

「す、すごい……」
　呆気に取られちゃってるけど君もいづれこうなるんだからね？
「とりあえず、こんなところかな。これ、差し入れの藤の花の蜜漬け。それなりに持ってきたから四人で食べてね。それじゃ」
「あ、ありがとうございました！」
　お礼を言ってくれる炭治郎くんに手を振って私はその場を去った。
＊＊＊＊
『愛してる』
『愛してるわ、だから待ってるの』
『なぜ来てくれないのかしらね、こんなに待っているのに』
『吉時さん』
『吉時さん、誘もいるのよ』
『吉時さん次はいつ会えるの？』
『白代の当主はもうだめだな』
『すぐに引き継がせるか』
『しかしあれはまだ子供だぞ、癇癪でも起こされて処分なんてなったら一体誰が白代の役割を……』

『簡単なことだ、その芽を摘み取ればいい。幸い許可もおりた』
『……いくら白代とはいえ……なんと憐れな』
『どうせそろそろ限界だったんだ。吉時様なりの慈悲だったんだろう』

『うふふ、嬉しい……愛してるわ……吉、時』

そこで目が覚めた。

なんでよりによって昔の夢なんか見るんだ。おかげで目がさえて眠れない。とりあえず、蝶屋敷の方は誰か起きているかもしれないので行ってみることにした。

屋敷に近づくと誰かが屋根の上にいる。あれは……しのぶさんと炭治郎くん？ちょっと不思議な組み合わせである。

するとしのぶさんが先に立ち上がってその場を去った。そして私のところにやってくる。

「こんな夜更けにどうしたんですか、萼さん」
「ちょっと夢見が悪くて眠れなくなったので睡眠薬をもらおうかと」
「うーん、いいですけど今持ち合わせがないので一回私の部屋に戻ります」
「じゃあ後で取りにいきます」
「はい、では後程」

しのぶさんと別れて気になる炭次郎くんの方に向かった。
「こんばんは、炭治郎くん」
「！こんばんは、萼さん」
「さっきしのぶさんと話してた？」
「はい」
「うふふ、しのぶさんはちょっと気が強いけど基本的に優しいから。たまに容赦ない時あるけど、炭治郎くんみたいな子にはちゃんと接してくれると思うよ」
「はい、おかげで大分良くなりました」
「それはよかった」
炭治郎くんの悪意とか裏のない言葉は素直に受け取れる分照れる。
「あの」
「ん？」
「柱合会議の時はありがとうございました」
「……いいんだよ、気にしないで。あれは私のエゴみたいなものだから」
「エゴ？」
「うふふ――わがままってこと。どうにも私は兄妹とかに弱いらしい。だからいいんだ。今は二人とも認められたことを喜ばなくちゃね」

命あってこそ、ってものだし。
でも炭次郎くんは浮かばない顔のままだった。
「あの、違っていたらすみません――怒ってますか？」
「――――」
怒る――ああなるほど、そういえばこの子私の匂いが判るんだっけ。
「――どうしてそう思うの？」
「匂いが怒っているというか、イラついているような気がするから……」
やっぱりか。まあこんな時間に蝶屋敷に来てるんだし、隠すようなことでもないけど。次からはちゃんと隠そう。
「んー、そうだね。夢見が悪くて眠れなくなったから、それでかも――君たちのせいじゃないから気にしなくていいよ」
「……はい」
「――炭治郎くんは禰豆子ちゃんのこと好き？」
「はい！大切な妹です」
「仲が良いのはいいことだよ。そのままずっと禰豆子ちゃんとの絆を大切にね。――私には出来なかったから」
肉親を取りこぼして、気遣ってくれる兄のような人たちに報いることが出来ず、気を

許していた幼馴染みに殺された私。
ああそうか、羨ましいんだ、私。
鬼になっても兄が付いていてくれる禰豆子ちゃんが、私が置いて来てしまった肉親との絆を持ち続けている炭治郎くんが。
――どんなに理不尽な目に遭っても優しくて真っ直ぐな彼らが羨ましいのか。
「――八つ当たりだな、これじゃあ」
「え？」
「うふふ、何でもないよ。じゃあ私はもう行くね。しのぶさんを待たせちゃ悪いし、修行頑張ってね」
「!!」
禰豆子ちゃんがやってくれたように私も炭治郎くんの頭を撫でた。髪質はしっかりしてるのに柔らかかった。……クセになりそうな触り心地だ。私がそうやって一人ほわほわしている間、炭治郎くんは固まっていた。
――あ、これだめなやつかも。
まだ江戸時代の文化が色濃く残る大正時代。男女で手を繋いでいるだけでもあーだこーだ言われる時代なんだった。
「調子に乗ってごめんね、今日は喋り過ぎたし今度こそ行くよ。じゃあね炭次郎くん―

―良い夜を」

「は、い……」

か細い返事をする彼を置いて、私はしのぶさんの部屋に急いだ。

白代萼と無限列車

――ある列車に乗った隊員がそのまま帰ってこない。そんな都市伝説のような本当の話から私はその列車に派遣されることになった。

今私は煉獄さんと一緒に現場の列車に乗って出発を待っている。

「うまい！うまい！」

私と向い合せで座る煉獄さんの周りには大量の駅弁の空。……さすがに食べすぎじゃないだろうか。

「八両編成ですしやっぱり私は別の車両にいたほうがいいでしょうか？」

「いや！その必要はない！鴉を連れ込めない以上単独行動は危険だ！」

「……なるほど、わかりました」

蜜璃さんのおかげで前よりはましになったものの、やっぱり苦手なのだ。

……今離れる口実なくなったけど。

「萼さん!?」

「炭治郎くん？」

そんなところに救世主が現れた。いや、この子のことも若干苦手だけど。

どうやら炭治郎くんは「ヒノカミ神楽」について煉獄さんに聞くためにこの任務に同行を申し出たらしい。

……といっても煉獄さんは「ヒノカミ神楽」のことを知らないそうなので可哀想なことに収穫はないようだけど。

「にしてもそれを聞くためだけにこの任務に同行を申し出るなんて凄いねえ」

「？どういうことですか？」

「だってこの列車で隊員が揃って行方不明になったから手に負えない案件として柱の私たちが来てるんだから、実戦経験の浅い隊員なんかは誰も同行しようなんて思わないよ」

「い、や、あああああああ！俺降りる！俺帰るうううう!!」

「知らなかったのか？」

「えーと、大丈夫大丈夫。出来る限り守るから、ね？」

「萼さああああああん！出来る限りじゃなくて必ず守って！お願いします！」

「大丈夫、私より柱歴の長い煉獄さんもいるんだから」

「ああ！任せておけ!!」

そんなこんなしているうちに列車が発車する。善逸くんはそれでまた発狂したけどもうどうしようもなくて諦めていた。

「切符を拝見させていただきます」
車掌に切符を切ってもらう。何か違和感がある。でも――
そこで私の視界は閉じた。

目を開けるとそこは酷く懐かしい場所だった。
「――白日庭（にわ）」
幼い子供の私がニムラとリゼと遊んでいる。二人が先に行くのを追い掛けようとして引き止められた。
「ウテナ」
「ルト！」
私を後ろから抱きしめるのは幼い頃のルト。
「今日も甘くて良い匂いがするねえ」
「ほめてる？」
「ほめてるよ、あー食べたいなあ」
「食べたいの？」
「うん……でもだめだね。それだとウテナと一緒にいられなくなる」

「そうだねえ」
　このやり取りは昔から何度もしている。――結局一緒を望んだルトの方から殺されてしまったわけだけど。
「有馬さんに聞いたら、一緒にいる方法がわかるかな」
「どうだろう、有馬さんはもう外の仕事しちゃってるからいつ会えるかわかんないし」
「そっかあ、残念――じゃあさ、神様にお願いしてみるのは？」
「神様？」
「そう、神様！」
「じゃあ神様にお願いしたらなんでも叶うのかなあ？」
「うーん、努力次第、かな？でもウテナはいい子だからきっと叶えてもらえるよ」
「そっかあ……」
「ウテナ」
「！有馬さん!!」
　横からの待ち望んでいた声にいち早く反応した。
「おかえりなさい、有馬さん！」
「ただいま」
「……じゃあね、ウテナ」

「うん、ルト、またね！」
　手を振って見送った後、有馬さんと一緒に歩き始めた。
　今はお互いに忙しくてなかなか一緒にいられないけど、昔はこうやってよく一緒に散歩していたのだ。
「有馬さんこの頃楽しそうだね」
「楽しそう？」
「うん、高校っていうところに行ってから楽しそう」
　私がそう言えば、有馬さんはほんの少し微笑んだ。
「そうか……そうかもしれないな、学校なんて初めて行ったから」
「友達とかってできるの？」
「どうだろう、一人協力者みたいな人間はいるけど」
「よく一緒にいるの？」
「そうだな、ほとんど一緒にいる」
「なら友達なんじゃないの？」
　他愛のない会話をしながら進んでいくと道端の蜘蛛の巣に蝶が掛かっていた。
「まだ生きてるね」
「そう大きな巣じゃないから蜘蛛の餌食になるのも時間の問題だな」

「そうなんだ……」
幼い私は蝶を傷つけないように慎重に巣から取り外し、逃がした。
「――どうして逃がした」
「だって、まだ生きてたし――一生懸命もがいてたから、生きたいんだろうな、って」
「――そうか」
その時の有馬さんはどことなく嬉しそうだった。
「(そしてそれが忘れられないからこうして夢にまで出てきている)」
私の夢はどうやら過去の記憶の再現らしい。
「(となると、あれもあるのかな)」
それに私の夢には他人の気配を感じる。
まだここはいいとしても、あそこにだけは行かせてはならない。
夢の中だからなのか定まらない気配をなんとなく追って走る。すると一人だけ私の記憶にない着物の女性がいた。
彼女は私を見るや否や走り去ろうとする。
「待ってください!」
「い、いや!私はこの綺麗な夢にずっといるの!なんで気付くのよ!!核を壊せば私は永遠にここにいられるんだから邪魔しないで!」

「ここを害さないなら永遠にいたって構わないから、それ以上先に進まないで！」
「核を壊さないとここにはいられないのよ！こんなに幸せな夢を見てるんだからいいでしょう!?」
「！」
　刃物を持って襲い掛かられる。相手は一般人。刃物をこういったことに使うのは初めてだろうに、その勢いと目には迷いがないどころか血走っている。なにが彼女をそこまで駆り立てているのだろう。
「こんなに幸せな夢を見てるんだもの、きっとさぞかし良いことずくめの人生なんでしょうね。着てる物も上等で化粧だって顔だってなんでも持ってる。でも私は違う！家計を助けるために子守りでも靴磨きでもなんでもやった！化粧だって着物だって我慢して生きるために頑張った！なのに旦那は文句ばかりで子供も泣いてばかり！離縁して実家に戻れば気を遣われてばかりで居心地が悪い……なんで私ばかり！もう現実なんて嫌！私はあんたの核を破壊してずっとここにいるのよ！私を邪魔するあんたなんて死ねば良い!!」
　振りかぶられた一撃を跳んで避けると女性はそのまま駆け出していく。
「待って！その先は――」
　彼女が入って行ったのは白代の屋敷の蔵だ。蔵といってもその蔵には何もない。あ

るのは――

＊＊＊＊

ある女性side

夢の主である少女からなんとか逃げ切り蔵の中に入るあれだけ必死に止めていたのだ、きっと核も含めて何かあるに違いない！

「え……」

そこには何もなく、ただ人が二人だけいた。片方は妙齢の女性だ。酷く美しいが同時に正気を保っていないことが一目で分かるほど目が濁り、どことなくやつれている。もう片方はその女性に似た――おそらくあの夢の主である少女の幼い頃の姿があった。そしてその手には短刀が握られている。

「うふふ、やっと来てくれたのね、吉時さん。待ってたのよ」

「お母様」

「誘――今は萼なんて名乗ってるのよあの子、せっかくあなたが付けたのに勿体無いことするの。悪い子ねえ」

「和修宗家――吉時様からのご命令です」

「そろそろ私、限界みたいなの。だから白代をあの子に継がせようと思うのだけれど」

「お母様を――」
「早いかしら？でも大丈夫よ、あなたの子だもの。出来がいいからすぐにこなせる」
「白代襲（あきしろかさね）を処分するようにと」
「その時はあなたに殺してほしいわ」
「お母様」
「お願い、吉時さん」
「お母様――愛していました」
　そして少女は短刀を振りかぶり――
「うふふ、嬉しい……愛してるわ……吉、時」
　それが女性の最後の言葉だった。
　それを見つめる少女が呟いた。
『――神様なんて、いなかったね』
　私は思わずその場にへたりこんだ。
「――だから、待ってって言ったのに」
「あ……あ、あ」
　声のした方に辛うじて首を向ける。彼女の目は、さっきの少女と同じ、絶望の深淵に立たされた目をしていた。

私はさっきこの子になんて言った？『さぞかし良いことずくめの人生』？そんなことを言った自分に後悔した。

どんなに幸せそうに見えても、この子にはこの子の地獄があった。自分の不幸と天秤にかけるわけではないけどこれではあまりにも――

「ごめんなさい、今目覚めるから目を瞑って耳を塞いでおいてください」

彼女はいつのまにか私から奪った刃物を首に突き付けていた。

「さようなら」

＊＊＊

意識が浮上する。帰って来られたのか。いつもと同じ夢の終わり方をしてしまったからちょっと不安だったけど大丈夫みたいだ。手首には先の焦げた縄が括り付けてある。なんだこれ……と思ったら私の夢にいた女性にも付いていた。なるほど繋いで夢に入る仕組みだったのか。

「萼さん、目が覚めたんですね！」

「うん、炭治郎くんたちも無事でよかった」

私に続いてみんな次々に起きていく。とりあえずみんな大丈夫そうだ。

しかしある少女が炭治郎くんに切りかかった。

「あの人に夢を見せてもらえないじゃない！」

　でも剥き出しの精神だけの状態で人の夢に入るということは、もしその夢の中で殺されてしまった場合彼女らの命がどうなるかわからないということだ。今回は運がよかったというだけで廃人になっていた可能性だってあるのではないのだろうか。
「それで廃人になっても？」
「な」
「あなたたちはそれくらい危険な状態に立たされていたということです。夢の主導権は主である私たちにある。大方侵入したら即私たちの夢の主導権を握って夢を終わらせないようにとか吹き込まれてたんじゃないんですか？それで相手に見つかって抵抗されないように隠れながら行動するようにとか」
「なんで……」
「当たってほしくなかったんですけどね……もし見つかってしまった場合のことを考えていましたか？幸せな夢の中に自分の知らない、どう動くのか分からない人間がいて——そのうえ刃物まで持っている」
「！——あ」
　切りかかった少女は思い当たったようで、今度は顔を青ざめさせてガタガタと震えだした。
「どう考えても幸せを壊す存在に見える。追い出されるどころか夢の中で殺されてしま

う可能性だってある。私たちは自分の夢だから終わらせたって問題ない。でも心だけでやってきた部外者のあなたたちは？」
「あ、あ――でもあの人はそんなこと一言も」
「言うわけないでしょう。誘いに乗らなきゃ困るんですから」
「……な、なによ憶測ばっかり！そうよ、あんたなんて！「やめて！」っあんた」
　呼び止めて私を庇ってくれたのは、あの女性だった。
「冷静に考えれば分かってたのよ、こんなのおかしいって。私は現実に耐えられなくて楽をしたかっただけ。自分の不幸に酔って……あなたを巻き込んだだけ」
　ほろりと女性の目から涙が流れる。
「ごめんなさいあなたの心を踏みにじって。あなたにだって地獄はあるのに……ごめんなさいごめんなさいごめんなさい」
　ずっと謝る姿にみんな何も言えない。炭次郎くんから私に標的を変えた少女も固まっていた。
「――いえ、こちらこそ。良い夢を見せてあげられなくてごめんなさい」
「っ！う、うぅっうわあああん」
　女性はあの夢の中の勢いが嘘だと思うくらい床に突っ伏して泣いていた。それに感化されたのか、全員が持っていた刃物を床に落として憑き物が落ちたように空気が澄ん

でいる。

——ここはもう大丈夫かな。

「——行こう、この人たちを危険に晒した鬼を倒すんだ」

「はい！」

そして私たちは鬼を倒すためにその場を離れる。

「ありがとうございました！」

あの女性が声を張り上げて深く頭を下げた。

「——ありがとうございます」

私もお礼を言って笑顔でその場から去った。

白代萼と炎柱

列車が脱線した。列車になっていた鬼は倒したので消化される危険性はないけど、これは普通に危ない。幸いみんな無事で、乗客も乗組員もみんな避難誘導し終わった。状況は玖楼くんに伝えたのでいろいろ手配してくれるはずだ。――しかし気を緩める時間はなかった。

「濃い血と鉄錆びの匂い」

この尋常じゃない濃さは、忘れもしないあの時の――上弦の弐の匂いと似ている。

――上弦か!!

私はその匂いの強い方へひたすらに走った。走って着いたその先にいたのは――目に参の文字が刻まれた鬼と戦う煉獄さんと、重傷で倒れている炭治郎くんだった。

「(炭治郎くんの止血はすでに終わっている。ということはしばらくそのまま安静にさせておいた方がいい。問題は――)」

そう、問題は上弦と煉獄さんである。鬼の攻撃を捌いているのは見事だとしか言いようがないけど、相手は鬼、それも上弦だ。紙一重の攻防がそんなに長く続けられるなんて奇跡はそうない。

――でもきっと、煉獄さんのことだから頑張っちゃうんだろうなあ。あの人は人を安心させる性質を持ってるけど、反面こうしてハラハラさせるところもあるから……。後ろに守る存在がいると覚悟決めて命燃やしちゃう典型的な熱血主人公タイプだ。本当にやめてほしいそういう私と真逆のタイプ。それできっと全力で殺し合って相打ちとかありそうで笑えない。

なんか――むかつく。

破壊殺・乱式

炎の呼吸　伍の型・炎虎

そこに私は覚悟を決めて飛び込んだ。同じくらいの威力に見えるがおそらく相殺できたとしても持ち前の回復力で鬼に軍配が上がってしまう。命を懸けた戦いだというのは分かるけど、煉獄さんはまだ二十歳。まだ十分に生きられる時間がある。

――だから

「生き急ごうとしてんじゃねえええええ!!」

叫んで気合を入れ、煉獄さんの前に入った。

蜜の呼吸　壱の型・蠱惑

取りこぼした鬼の血鬼術をすべて撃ち落とした。

「白代……」

呆気に取られる煉獄さん――むかつく。
よく見たら致命的なものはないけどところどころ怪我してるし。出血も酷いし。
私は煉獄さんを炭治郎くんの元へ蹴り飛ばした。
「だ?!」
「ええ?!」
「ふん」
うめき声とかが聞こえたけど、この際一切無視する。というか普段ならこのくらい受け身取れてるはずだ。その分だけ怪我をしていなくても消耗してるということだ。
「ああ、わかる。わかるぞ、お前も杏寿郎と同じ柱か！」
「ご名答――そういうお前は上弦の参か。全くなんでこんな任務が終わった時にくるんだか」
「――待てよ……長い黒髪に蝶の髪飾り、泣きボクロ。この匂い……お前があいつの言う『蜜の君』、か？」
――そういうやつの心当たりは一人しかいない。ああそうか、この鬼が上弦ということは同じ上弦として面識があるのか。
「上弦の弐のことか」
「ああ、前に会った時に偉く饒舌だった。頸を切られたのだと傷跡を撫でながら陶然と

語る様が酷く気色悪かった」
「もういい……」
　聞きたくなかった。
「あいついつか殺す」
「同感だ。しかし人間の体は脆すぎる――それを叶えたいのであれば鬼になれ！」
「断る。私は今の、鬼殺隊に必要とされている私を気に入っている」
「そうか――ならば死ね！」
「！」
　間一髪で避ける。しかし隊服の脇下が拳圧ですべて持っていかれた。まずいな、あの一撃一撃が致命傷になりえる威力を持っている。
「鬼になれ！」
「いやだ！」
　攻撃を捌きながら言い合う。夜明けまであともう少しだ。それまで持ち堪える。
「何故だ！鬼になれば強さと永遠の時間が手に入る！」
「確かに私の命は短いが、永遠などいらん。誰かに隷属するなんて二度とごめんだ！」
　蜜の呼吸　参ノ型・乱れ垂蓮
　抑える、抑え込む。多少の傷は何とかなる。

私のために泣いてくれたしのぶさん。
帰りを待ってくれているカナエさん、きよちゃん、すみちゃん、なほちゃん、アオイちゃん。
心配してくれるカナヲ。
居場所をくれたお館様。
なんとしても、絶対に、私は帰る。鬼殺隊に！
「蜜の呼吸　玖ノ型」
破壊殺　滅式
――蜜月
「うおおおおおおおおおああああ!!」
これ以上動くことは許さない。もうすぐ夜が明ける。この膠着状態を維持することに集中する!!
「くそ！」
「！待て」
上弦の参もそれを感づいたのか私から離れた。まだ頸を落としていない。まだ生きているというのに。
私が追おうとすると誰かに肩をつかまれた。

「もういい、白代」
掴んだのは煉獄さんだった。
「やつは逃げ帰った。乗客も俺たちも全員無事だ。もう深追いするな。お前は充分よくやったんだ。だからその満身創痍な体で無茶をするのはやめろ」
「！」
言われて我に返った。みんな集まってきて私の様子を窺っている。みんな生きている。
そして言われた通り私はボロボロだった。致命的な傷はないけど隊服は無惨な姿で拳圧でできた切り傷がところどころ血を流している。
「とりあえず着ていろ」
「ありがとう、ございます」
「なに！気にすることはない！！」
いつもの調子に戻った煉獄さんは私に羽織を被せてくれた。
「格好悪いなあ、私」
助けに入ったつもりが助けられた。煉獄さんもみんなも強い。それに比べて私は……

私は隠が迎えに来るまでそのままだった。

＊＊＊＊

蝶屋敷に戻ってまた上弦に遭遇したことを話したら阿鼻叫喚だった。でも相手が早めに撤退したことと煉獄さんに止めてもらったことで深手は負わなかったので、みんなちょっとほっとしているようだった。

炭治郎くんたちは今回のことで思うところがあったらしい。機能回復訓練の他に鍛練を追加して自分を追い込んでいた。

煉獄さんはたびたび私と一緒に食事するようになった。といっても煉獄さんが私の病室に食事を持ってやってくるだけなんだけど。

「白代、あの時はありがとう」

「あの時？」

「上弦の参との戦いの時だ」

「――ああ、あの時は私もすみませんでした。偉そうなことを言った挙げ句蹴り飛ばすなんて」

「あの蹴りは素晴らしかった！」

「もう二度としないんでやめてください……」

黒歴史かもしれない。

「なぜだ？俺は君の行動に命を救われたんだぞ」
「はい？」
「あのまま技を受けていたらきっと俺はただではすまなかっただろう。それこそ助からない傷を負ってやつを倒す覚悟を決めていたやもしれん」
　その通りだろうけど私を買い被り過ぎている。
「――ええ、きっとそうだと思っていました。あなたは守るものが多ければ多いほど力を出せる。でも守るために自分の命まで削ろうとしかねない。あなたにはまだまだ生きれる時間があるのにそれを今に極振りしようとする。正直、私はあなたのそういうところが一番苦手です」
「これはまたなんとも直球だな！」
「八つ当たりだと思って下さって構いません」
「いやしかし、君は俺をそう評したが、それは君も同じだぞ、白代」
「――」
　どこが？
　思わず絶句してしまった。
「君のことだ、きっと気づいていないんだろうが、君は俺以上に前に出て命を削るような、勝利したその先を考えないような戦い方をしている。生きて帰れさえすればそれで

いいとでもいうような戦い方だ」

「……」

何も言い返せない。現にしのぶさんや蝶屋敷のみんなを筆頭に心配されっぱなしだ。認めたくなくても認めざるおえない。

「君は確かに強い！その強さに俺は命を救われた！だが、先を見て自分を労わってほしい！君に命を助けられておいて偉そうなことは言えないが、自分の足元（今）ではなく道の先（未来）を見て歩け!!」

「つだから……なんでそんな……」

そんな響くような言葉を惜しげもなく私なんかに――いや、それが通常運転なんだろうけど……

「……分かりましたからっ……そういうのは今回私より頑張ったあの三人に」

「何を言う、今回一番活躍したのは君だぞ！もっと胸を張れ！」

「ですから」

「煉獄さん？今日の面会時間は終了ですよ？」

「よもや！そんなに経っていたとは！時間が経つのは早いな！」

「それから、うちの萼さんに迫るのは控えてください。萼さんもあなたもまだ治りきってない患者なんですから。まあ煉獄さんのことですから、嫌がる女性に無体を働くなん

てありえませんよね？だって煉獄さんですもの」
ふふ、とにこやかに時間を知らせに来たしのぶさんは強調するように煉獄さんを呼ぶ。笑顔なのに目が笑っていなかった……
それを見てさすがに長居するのはまずいと思ったのか、煉獄さんはしのぶさんに連れられて出て行った。
「そんなこと、あんなに誠実でおおらかな人がするはずないのに――心配症だなあ」
どっちかというと今回の任務で無体を強いたのは私だったわけなのだし。
病室の窓から空を見上げた。白っぽい、けれど雲一つない晴れの空だった。

白代萼と花売る街

怪我が全快して数日。今日の鍛練も終わって蝶屋敷に向かっていると声がした。
「アオイさんを返せ！」
「ぬるい、ぬるいねぇ。このようなザマで地味にぐだぐだしているから鬼殺隊は弱くなってゆくんだろうな」
「アオイさんの代わりに俺たちが行く」
私が蝶屋敷に着いて見たのは、炭治郎くんたちに囲まれた宇随さんだった。
「行くってどこに？」
『萼さん！／白代！』
蝶屋敷のメンバーは何人か泣いてるし、一触即発みたいな空気が残ってるし……混沌としてるなここ。
「ちょうど良い、白代、お前今暇か」
「任務は入っていませんが」
「なら病み上がりのとこ悪いが、付き合ってくれ。――連絡が途絶えた」
「！雛鶴さんたちが……」

「ああ。何かあったんだろう。こいつらが同行するが、念のためお前もいてくれた方が助かる」
「――――わかりました。では第一は救出、第二は討伐ですね」
「恩に着る」
　私に宇随さんは頭を下げた。本当ならこうしてる間にも駆け付けたい気持ちでいっぱいだろうに。
「そうと決まれば行くぞお前ら」
「どこ行くんだオッサン」
「日本一色と欲に塗れたド派手な場所」
「「？」」
「……」
　二人はわかっていないけど善逸くんは察したようだ。
「鬼の棲む〝遊郭〟だよ」

＊＊＊＊

　着いた藤の家での着替え。やっぱりみんな女装するのか。
　私は着付けもメイクも自分でできるので着慣れないみんなの方に手を回してもらう

ことにした。
「おお、似合ってんじゃねえか」
「ありがとうございます。でもあの……」
私より先に終わっていた三人を見る。
「……本当に、これで目立たず潜入できるんですか？」

「いやぁこりゃまた――不細工な子たちだね……」
ほらやっぱり……
どういう基準で化粧したの宇随さん……
「そこの一等別嬪な泣きボクロの子なら喜んで引き取るんだけどねえ」
「お前さん名前は？」
「菜々子といいます」
「いい名前だねえ、よしこの子をもらおう！」
「ま、待ってください。私とこの子たちは姉妹のように育ってきました。どうかせめてもう一人、わたしの目の届くところに置いていただけないでしょうか」

「けどねえ……」
「そこをなんとか頼むよ」
　宇随さんの助け船に女将が赤くなった。
「ま、まあそこまでいうなら……真ん中の子なんか素直そうだし。じゃあその子も一緒にもらうわ」
　こうして私、菜々子と炭治郎くん――炭子は「ときと屋」で働くことになった。
「へえ、こりゃまた別嬪がきたもんだねえ！」
「オマケに三味線も弾けて囲碁も強い」
「あんたなにもんだい？」
「亡くなった母が水揚げされた元遊女の方に可愛がられていた時に習ったと言っていましたので、私も母に習ったのです。といってもどこまで通用するのか分かりませんが……」
「そうだったのかい、こっちとしては大助かりだけどね」
「じゃあ少し早めに座敷に出てもらおうか」
「じゃあ名前決めないとねえ」
「泣きボクロに藤色の着物だったから涙藤（るいふじ）なんてのはどうだい？」
「いいわね！今日からあんたは涙藤だ。いいね？」

「はい。分かりました」
私が着々と進むなか、炭治郎くんは額の傷を女将さんに咎められ、禿として裏方の仕事をすることになった。
炭治郎くんたちが禿として裏方を探ってくれている間に私も座敷に出てそこで情報収集をする。
私を買う人間は豪商や貴族などの富裕層。買えないような人間には偶然を装って話し掛け、聞き出した。
私は「呼び出し」なので太夫や格子よりは安価なので客に呼ばれやすい。これを利用しない手はないだろう。
……ちなみに私は客とそういうことは一度もない。床に入るといっても添い寝だ。房中術は何も必ず身体を繋げなければならないわけではないのだ。
身体を繋げれば多少なりとも情が移ってしまう可能性があるのでそこら辺は気を付けている。
「涙藤の姐さん、時間です」
「ありがとうね。今支度するから手伝ってくれる?」
「もちろんです!」
この禿の子は私専属の子。私が癇癪を起こさないことや、お菓子をお裾分けすること

などから懐かれているようだ。
「そういえば私と一緒にきた炭子はどう？みんなに馴染めてる？」
「あ、はい！とっても気配り上手で力持ちなのでみんな頼っちゃいます」
「うふふ、ならよかった。ここに売られてくるときに額の傷でいろいろあったでしょう。女将さんを抑えるためにみんな出てきてくれたし、もしそれで腫物扱いされてたら……って心配だったのよ。教えてくれてありがとねえ。これ、金平糖。見つからないようにこっそり食べるんだよ」
「ありがとう姐さん！」
小さな砂糖の星を懐紙に包み、お礼として渡せば花が咲いたように笑い懐に入れて出て行った。
「転ばないように気を付けるんだよ」
「うん！」
見送って自分の座敷に向かう。あの列車じゃないけどやっぱり玖楼くんに頼れないのは痛い。
とにかく私は私のできることをやらなくては。
「本日はようこそおいでくださいました、涙藤にございます」
――

――――

「(疲れた……)」

いくらそういうことをしないと言っても疲れる。房中術というのは交わりを通しての気の交換だ。

気がごっそり奪われたような気分だった。

もう少しで夜が明ける。明けたら禿として炭治郎くんを呼んで情報を纏めよう。

「(髪を解いて、布団に寝転がりたい)」

遊女は基本的に座って包まるようにしなだれかかるようにして眠る。髪の毛だってセットしなおしやすいように解いて寝るなんてことはそうそうない。

いつもならできるのに。

楽な姿勢で眠れないのは結構ストレスである。

自分の部屋に戻って一息つく。

「(やっぱり宇随さんが言うように客で鬼や行方不明の遊女たちの詳細を知る人間はいない)」

ただ有力そうな情報としては――吉原の顔の良い遊女たちの足抜けが頻発しているらしい。そのなかでも特に多いのは「京極屋」。宇随さんに指定された置き屋の一つで、善逸くんと雛鶴さんのいるそこでの失踪者が比較的多いとのことだった。

「（比較的……というのが、ね）」
それがどうにも引っ掛かった。

夜が明けて他の花魁たちが起きる前、禿の子に頼んで少し早めに支度してもらう。その中にはちょうどよく炭治郎くん……じゃなかった、炭子がいた。禿の子が去った後、炭治郎くんと二人きりになる。
炭治郎くんにはこの店の内部や禿たちのなかでの噂や情報を頼んでいる。
私が客を取っている間にあったことを話してもらおう。
客や同僚たちの言っていたことを話せば炭治郎くんは頷いた。
「他の禿の子たちも言っていました。最近足抜けが多くてお付きの花魁の人たちも気味悪がっているって」
「やっぱり店の中でも問題になってたんだ」
それを女将さんたちが私に対して言わなかったのはそれで新入りの私が怖じ気付いて客を取れなくなる事への懸念からか。
「それに鯉夏さんいわく、ここで働いていた須摩さんは決して客に入れ込むような人ではなかったそうです。だから足抜けのことが書かれた日記のこともみんな不思議に思っているみたいで……」

「なるほど、日記は偽造で本当は拐われたか……考えたくないけど喰われたか……ありがとう、炭子。助かるよ」
「……」
　でも炭治郎くんの顔は険しいままだ。
「どうしたの？なにかあった？」
「いえ……」
　言い淀む炭治郎くん。でも決めたのか口を開いた。
「お……私、う……涙藤さんにこういう事してほしくないなって」
「うん？」
「じ、自分でもこんなことというのは間違ってるって分かってるんです。でも吉原がどういう所か分かって、お客さんをもてなすあなたを見て……なんでか分からないんですけど、苦しいんです。綺麗に着飾って他の男に笑顔を見せるあなたを見ていると胸焼けがする。ジクジク痛むんです」
　そう言って炭治郎くんが申し訳なさそうに笑った。
「ごめんなさい、こんなこと言って。仕事だって分かってるんです。すみません」
「そっか……」

私は少なくとも彼から懐かれている自覚がある。きっと、彼としてはそんな私がこういった場所で振舞うことに抵抗があるのだろう。尊敬する人や憧れの人のイメージが壊れる、というのは結構くるところがあるのかもしれない。

「――着飾っているあなたはとても美しくて、本当はお客なんて取ってほしくない……っ」

「ありがとうね、心配してくれて。でもね」

炭治郎くんを手招きして耳にささやく。

「――お客さんとはそういうこと一回もしてないよ。ただ添い寝してるだけ」

「え!?」

「一応それっぽいことしたように見せかけてるけどね。ばれたらまずいし」

「～っ」

炭治郎くんはだんだん赤くなって今や茹蛸である。……刺激が強かったのかな？

「房中術は心得てるけど、経験はゼロだしね」

「そ、そう、ですか……」

真っ赤な炭治郎くんの頭を撫でる。されるがままになってくれるあたり本当にいい子だなと思った。

――これが上弦との死闘の、十数時間前の話である。

白代萼と上弦の兄妹

動き出した炭治郎くんの気配と強い鬼の匂いを感じ取り、私も現場に駆け付ける。
そこにいたのはボロボロの炭次郎君と余裕そうな女の鬼だった。

「炭治郎くん！」
「っ……萼さん！」
「おやあ、誰かと思えば最近話題の涙藤じゃないか」
「京極屋の、蕨姫」
「あら知ってるのねえ、私もあんたには目を付けてたんだよ……その美貌と稀血の肉をいつ食ってやろうかってねえ!!」
帯が私に迫ってくる。これは避けても絡め取られる可能性があるな……
なら一本に纏めて――返す。
「な、あ〝!?」
剣先で帯をいなし集めてそれを鬼に向けて返した。能力をそのままに、かわすのではなく受け流すようにして返してやることで無効化を図ったのだ。

自分の帯がまさか倍以上の速さで返ってくると思わなかったのか、鬼は苦しげに呻いた。
「よくも……よくも私の身体に傷を……っやってくれるじゃないの!!楽になんて殺してやらないわ!徹底的にいたぶって泣いて懇願するまで拷問してやる!!」
「拷問、ねえ……」
それはＣＣＧのコクリアのものより凄いんだろうか。
「拷問したら一番辛いのはお前たちの方だろうに」
「はあ？意味分かんない。あんたたちごときに私が殺られると思ってんの？――笑えないにも程がある」
また飛んでくる帯。今度は逃がさないとばかりに死角も合わせたほぼ全方位から気配を感じる。
「――またこれか」
もう見飽きた。
全て受け流す。そのうえで切り落とす。切り刻まれた帯は力なく落ちて消えていく。
「帯を操って攻撃し、そのまま相手を閉じ込める――単純な能力ほど応用が利いて脅威になる。素晴らしいね、でももう見飽きたから次」
「え？」

「うん、ある程度の実力はあるってわかった。確かにそんじょそこらの鬼よりは断然強い。下弦の上位か下弦と上弦の中間ってところかな？……でももうこの技は見飽きた。だから次。上弦なんだし、まだ何か隠し種があるんでしょう？」
「な」
「だって私にこんなふうに受け流されて負傷してる。それは今まで相対した上弦二体ではありえなかったことだ。余裕ぶって力を温存しているとしか思えない」
事実を言っただけなのに鬼は顔を赤くしたり青くしたりと落ち着かない。さっきまでの勢いはどこにいったのだろう。
「こんのぉ!!」
「――だから見飽きたんだって」
襲い来る帯を切り裂く。単純な血鬼術というと比較対象は上弦の参だろうか。でも明らかに練度の差を感じる攻撃だ。もう既に見切っているというのに同じ攻撃を繰り返してくる。こうなった時の理由は二つ。
――単なる時間稼ぎか、もしくは本当にそれしか芸がないか。この二つだ。
「もしかして、それ以外ないの？」
「っ!!」
ふと疑問に思ったことがそのまま口から出た。すると鬼は反応し、そのまま私を見上

げるように睨み付ける。
「ふざけんなよ、この醜女！私をよりによって格下扱いするなんて……お前余程死にたいようだねえ!!」

その瞬間、炭治郎くんが鬼に切りかかった。
『鬼の隙が糸として見える？』
『はい、鱗滝さん……俺の育手の人から教わって、それで今までの鬼たちも倒してきました』
『なるほどね、確かに炭治郎くんは鼻が利くから感覚的に掴み易いのかもしれないね。ねえ、人が一番周りが見えてないときってどういうときだと思う？』
『えっと……何かに集中しているとき？』
『うふふ、そう、正解。だからもし鬼がいたとして戦うことになったら――』
――私が引き付けるから炭治郎くんはその〝隙〟を切って。
私はそう言ったのだ。
けど
「あんたに私の頸が斬れるわけないじゃないっ」
「！」

「(さすがに危機察知能力は侮れないか)」
頸が帯のようにしなって頸を落とせなかった。
「むっかつくわね!・そんなに頸にこだわるならお返しにあんたの頸を刎ねてあげる!」
「!」
「炭治郎くん!!」
鬼の爪が掛かる寸前――
「が!?」
後ろからの不意打ちの蹴りに鬼がうめき声をあげた。
鬼を蹴ったのは、禰豆子ちゃんだった。
「ヴ――、ヴ――」
でもいつもと様子が違う。
鬼と禰豆子ちゃんの一騎討ち。禰豆子ちゃんは激しく興奮しており、鬼にやられても何度も立ち上がる。
――禰豆子ちゃんの速さ、力、再生力……すべて戦いの最中に格段に増していっている気がする。
決定的なのは鬼の頭を燃やして何度も踏み潰し続けていた時。
その時の彼女の表情はいつもの凛々しいそれではなく――戦いを楽しむ笑顔だった。

そのうえ身体にも変化が現れる。額から出た角、身体に巻き付くように浮き出た痣。
これは――――まずいな。
蹴り飛ばした鬼を追っていく禰豆子ちゃんを追い掛け、私と意識を取り戻した炭治郎くんも建物に入る。
そこにはまだ怪我人が残っていた。
「ガアアアアア！」
「ぎゃあああああ!!」
血に反応して襲い掛かろうとする禰豆子ちゃんの前に立ち塞がり、蹴り飛ばす。
「ここから早く立ち去りなさい！」
「は、はいぃ!!」
残っていた人間たちは蜘蛛の子を散らすように一目散に去って行った。
「ヴヴー、ヴあ゛ぁぁあ!!」
「っ」
どうやら禰豆子ちゃんは標的を鬼やさっきの遊女から私に変えたらしい。爪で襲い掛かろうとするのを紙一重でかわし続け、彼女の腕を掴んで動きを止めた、けど。
「（力が、違いすぎる……っ）」
いくら半人間とはいえ上弦に匹敵するかもしれない禰豆子ちゃんの腕力には勝てな

い。今必死になって抑えているものの、徐々に押され始めている。
「禰豆子！その人は萼さんだ！正気に戻れ!!」
「ヴヴアアアアアア！」
「！」
「萼さん！」
炭治郎くんの呼び掛けにも応えることはなくそのまま勢いよく私を突き飛ばすと――私に噛み付いた。
「ぐ」
「なにやってるんだ禰豆子！」
炭治郎くんが私から引き剥がそうとするも、力の差がありすぎてびくともしない。きっと私の稀血のせいだ。
「ぐ、が!?」
私の血には藤の花の毒が入っている。禰豆子ちゃんは苦しげに呻いた。
「ごめん禰豆子ちゃん」
離さないとばかりに彼女を抱き締めた。落ち着かせるように背中を軽く叩く。
「頑張ってくれてありがとう、ここからは交代するから、もういいんだよ。お疲れ様」
「！」

「おやすみ」
　そう言って頭を撫でる。すると禰豆子ちゃんは泣き出して小さくなり眠ってしまった。
「萼、さん」
「炭治郎くん、禰豆子ちゃんをお願い」
　炭治郎くんは泣き出しそうな顔をしていた。煉獄さんのように鼓舞できればいいんだけど、生憎今の私にはそんな余裕はない。血を流してしまった以上止血して鬼のもとへ行かなくては。
　爆発音と衝撃がした方に行くと、そこには宇随さんがいた。いや、宇随さんだけじゃない――鬼が、二体？
「来たか、白代」
「宇随さん、これは」
「見ての通り、上弦の陸は二体。実質あの男が本体だ」
　泣いている鬼――蕨姫とは別の男の方の鬼が私に目を向ける。
「なんだあ、もう一人柱が居やがったのかあ？妹には負けるが別嬪だなあ、肌艶もよくていい着物着てよお、さぞいいところで育ったんだろうなあ。羨ましいなあ、妬ましいなあ」

「(確かに目に上弦と陸の文字……蕨姫は餌のようなものだったということか)」
蕨姫を隠れ蓑にして潜伏し続けていた。なるほど、違和感なく蕨姫が吉原に溶け込んでさえいれば食うにも困らない。蕨姫の色香に当てられた客、足抜けしようとした者、蕨姫に不信感を持つ者……大きな騒ぎにならなかったのはそういうことか。
「お兄ちゃんそいつよ!そいつが私の帯を滅茶苦茶にして馬鹿にしたの!!」
「お前も妹をいじめたのかあ。なら取り立てねえとなあ!」
男の鬼が手にする鎌を振るうと赤黒い血のような斬撃が飛んでくる。手数が多い。捌き切れるだろうか。
避けつつ日輪刀でいなしていくが、途中でいきなり軌道が変わった。
致命傷ではないし大丈夫——
「っ!!」
「これでお前もその男の仲間入りだなあ」
鼓動が加速している。身体が熱い。眩暈がする。平衡感覚が保てない——毒か。
「(くそ、油断した)」
それもかなり強力な劇薬だと思った方がいいだろう。蝶屋敷まで持てばいいけど……その前にこの場をなんとかしなければ。
「なんだあ?お前も死なねえのかよお」

「……そんな簡単に死んでたまるか」
　といっても私が白代で受けた対毒訓練はあくまで赫子と対人間のみであり、赫子に関してにしたっていくらかまし、程度でしかない。正直、立っているのもやっとだ。
「そんな見え透いた強がり、分かりきってんのよ！」
　帯がこちら目掛けて迫ってくる。日輪刀で受け流すが勢いは増してまた新しい帯が私に向かってくる。
「っ」
「あはは！今まで小馬鹿にしてた私の能力で今にも死にそうじゃない、あんた！」
　蕨姫が挑発しながら追撃したその瞬間――蕨姫の頸が飛んだ。
「！」
「ううう！また頸斬られたぁ!!糞野郎!!糞野郎!!絶対許さない!!」
　頸を落としたことで私を救ってくれたのは、宇随さんだった。
「悔しい悔しい、なんでアタシばっかり斬られるの!!」
　しかし蕨姫はまだ生きている。斬られた自覚はあるようで喚き散らしているものの、彼女の死の条件は分からないままだ。
「あああああ、わあああ」
「お前もしかして気づいてるなぁ？」

騒ぎ続ける妹とはうって変わって兄の鬼は冷静に宇随さんを見ている。
「何に？」
「……気づいた所で意味ねぇけどなぁ。お前とそこの女は段々と死んでいくだろうしなぁあ――こうしている今も俺たちはジワジワ勝ってるんだよなああ」
そうだ。私たちは毒が効きにくいのであって分解出来るわけではない。呼吸でなんとか毒の回りを遅めることで動いているだけだ。こうしている間にも命は削がれていっている。
陸だからって油断してたわけじゃないんだけどなあ……
前の私であれば、このくらいならなんとか出来たのかもしれない。いや、過信せず言えば、先手でこの鬼二人の頸を同時に最速で切り刻んでやることも可能だっただろう。
でも今のこの身体に二十歳の時までの筋肉量はないし、体格も数ミリ数センチは違う。戦闘経験が役に立たない。
鬼殺隊のために死ぬのはまあいいんだけど、それに見合った成果を持ち帰らなければただの犬死にである。それだけはさけなければ――
「それはどうかな!?」
「！」
「俺を忘れちゃいけねぇぜ。この伊之助様とその手下がいるんだぜ!!」

「何だ？コイツら……」
そう思っていたところに――伊之助くんと善逸くんと――
「――炭治郎くん」
炭治郎くんが宇随さんと私を守るように立っていた。

白代萼≒■■■■■

炭治郎くんたちが加勢してくれたものの、既に私は毒で朦朧として戦力としては役立たずもいいところだ。

このままではまずい。お館様に申し訳が立たない。カナヲにまた心配されてしまう。死体が増えるだけみんなの士気も削がれるし、何より使い捨ての私なんて粗大ゴミにも等しい。

『今日から君は――――私の家族だ』

『――私はね、萼に死んでほしくないんだ』

『――あなたはもう、私たちの家族なんですよ?……そんな寂しい言い方、しないで』

『おか　えり、萼』

あ

だめだ。

いなくなっちゃだめだ。

止めてくれる人がいる。待ってくれてる人がいる。

『こんなとこで寝てたら死ぬよ?ウテナ』

ニムラ、でも体　うごかない
『今までの根性論みたいな起死回生はどこにいったの』
根性論　じょうろ、
『あちゃー、まだ壊れちゃだめだって。これだからウテナは……仕方ないなー』
くるくる　くるくる　回ってまわして　もえて消してもやして
『はいはい。燃えるのも回るのもこれからだから。立ってウテナ。こんなとこで終わるほど軟じゃないでしょ?――さあ、和修の――いや違うな、白代の家訓は?』
ニヤリと、ニムラが笑う。私もたぶん釣られて笑ってるかもしれない。
そんなの身に染み付いてるよ。それよりニムラ、いいことあったの?私もうれしいなあ。

「和修(鬼殺隊)に仇名す者は抹消(塵殺)する」

＊＊＊＊

炭治郎ｓｉｄｅ

なんとか相手の攻撃を避けるだけで精いっぱいで、宇随さんと萼さんを助けるどころか助けてもらってしまっている。

二人とも鬼の血鬼術の毒のせいで弱っているというのに。萼さんなんて表情に出さないようにしながらもよく見てみると脂汗が出ていて顔色も悪い。

早くしないと二人が危ない。もう片方を追って行った伊之助と善逸の方も気になる。

俺はどうすれば――

「（え？）」

そう思っていた時、一つの匂いが――萼さんの匂いが全く違うものに変わった。普段の透き通るような、澄んでいるのにどこか甘い香りじゃない。毒々しいまでに甘くなった、熟れた果物のような匂いだ。

「（なんで――）」

チラリと目線を萼さんに向ける。――彼女は無表情だった。

「鬼。種別：十二鬼月・上弦の陸。喰種に準ずるモノ。戦闘力推定レートＳＳ。勝率――――１００％」

そして彼女が視界から一瞬で消えた。

「なんだあ？」

萼さんがいたのは――上弦の兄の目の前だった。
「和修白代誘、稼働。これより対象の撃滅・抹消へ移行します」
無機質な声と言動とともに――彼女の刃は鬼の懐を一閃していた。
「あ〝？」
周りにいる俺たちどころか、斬られた本人でさえよく分かっていなさそうだ。
「最適解に到達。解体のち頸部切断――開始します」
いつもの萼さんじゃ、ない。
そこから繰り広げられたのは――惨いとも言えるほどの徹底的な……圧倒的な力による蹂躙だった。
鬼の再生速度を上回る速さで全身を切り刻んでいく。いつの間にかそこには僅かな肉片が浮かぶ血溜まりと化していた。
鬼も必死で抵抗し、あの血の血鬼術を使うものの殆んど当たらない。
声を上げれば喉を突いて、目で何かを言おうとすれば目を潰した。
そして最後に鬼の頸をはねて、飛んだ頸を片手に抱えた。
「上弦の陸・兄を無力化。生存を確認。よって戦闘を続行。上弦の陸・妹の処分に移行します」
「おい、白代！」

宇随さんが声を上げても萼さんはそのまま壁の穴から出て行ってしまった。急いで俺たちも追い掛ける。

萼さんの匂いを追い掛けてたどり着いたのは、あの女の鬼のところだった。

「兄さんの目が消え……っあんたたち何かし「蕨姫――上弦の陸・妹。戦闘力推定Ｓレート。勝率――――１００％」

「あ、あんた、あんたが持ってるそれ……」

「最適解に到達。四肢の切断からの頸部切断――開始します」

動揺する鬼に萼さんは接近し――いつの間にか……一瞬で相手の四肢を切り離していた。

「え？――――っぎゃあああああああ!!」

立てなくなり地面にあおむけに落ちる鬼をそのまま片足で足蹴にして縫い留める。

「あんた、よくもお兄ちゃんを「これより頸部の切断へ移行」！切れるわけないに決まってるでしょ!!馬鹿じゃないの!!」

萼さんの日輪刀が頸に当たり頸が帯になった。――しかし

「え……っな、にこの力……っ、いやあ！ちぎれる!!痛いよお！助けておにいちゃん!!」

「四肢の再生を確認」

「ぎゃあああああああ！い〝だい〝、いいいいい!!」

四肢を再び切り落とし鬼が泣き叫ぶのも構わず刀で切り刻んでいく。
鬼も帯で攻撃するものの、すべて切り落とされた。
「攻撃による妨害。よって眼球を破壊します」
「あ〟あ〟あああああ!!」
最早拷問に近いそれで鬼の抵抗は段々となくなっていった。
「ごめんなさっ、ごめんなさい……いたいよお、いたいよお、おにいちゃんたすけてえっ」
「上弦の陸、頸部損傷率７０％――――完全裁断開始」
だめだ。
このまま萼さんにとどめをさせちゃだめだ。
このままなら鬼を確実に仕留められるだろう。でも。
よくわからないけど嫌な予感がする。――きっと、萼さんが萼さんじゃなくなる気がする。
そんなの、だめだ！
そう思った時には俺は動き出していた。
＊＊＊＊
「だめです萼さん！」
何かが勢いよく私に触れた。強い力だ。でも今の私の方が地力は上だろう。

なのになぜか振り払えない。どうしてだろう。
赤っぽい髪に花札のような飾りが視界の端に入った。
――竈門　炭治郎。
「離れなさい」
「嫌です!!」
「早くしないと相手が再生します。――――死にたいのですか?」
「でも今その鬼にとどめをさしてしまったら、きっとあなたは萼さんじゃなくなる!」
「……何を言って」
「俺もよく分からないけど、それでもだめだ!!」
「む゛ー!!」
「禰豆子……!」
今度は鬼の妹の方も抱き付いてきた。
「お願いです、元の萼さんに戻ってください!」
元の私。私は元からこうだ。母親をこの手で屠ったその日からずっと。白代の当主としての役割を果たしてきた。
白代の任務に失敗は許されない。ならばどうするか。
「任務の遂行に妨害発生。続行不能と判断」

「萼さん！何して……っ」
「組織の機密保護のため、自決致します」
　日輪刀を自分の頸に当てる。後は引くだけ――
「だめですよぉ、萼さん！」
「まったく！あんたはもうちょっと頭冷やしな！」
「死んじゃ、だめ……よ！」
　今度は須磨・まきを・雛鶴――宇随天元の奥方たちに止められる。
　なぜ？任務を遂行出来ない私にまだ何か利用価値があると？
「――俺の嫁や後輩にまで止められてんだ。正気に戻れよ、いい加減」
「宇随天元」
　なぜ使い捨ての、それも白代の私に……
「萼さん！」
　炭治郎――禰豆子と合わせて私の希望。いつもの笑顔はそこにない。ただ泣きそうな顔で私を止めようと抱き付いている。
『もういいの？』
　声が響いた。懐かしいニムラの声だ。
　分からない。まだ鬼を倒しきれてないから。

『萼』
有馬さん
『お前は和修白代誘ではなく白代萼だ』
はい。あなたからもらったこの名前のおかげで、私は生きて来れた。
――ありがとう、二人とも。

和修白代誘を停止。

その瞬間、背後から炭治郎くんを狙う帯を見た。
全員を突き飛ばしたことで、帯は私だけを貫通した。
「萼さん!?」
「よくも、よくもおおおお!!」
「さすがに全部治ったか……っ」
それに対して私はもうおそらく避けるので精いっぱい……いや、ひょっとしたら動けないかもしれない。
「む、――!」

「そんなのもう二度と喰らってたまるか！」
禰豆子ちゃんの爆血を後ろに引くことで躱す鬼。
「お前だけは、おにいちゃんを殺して私をコケにしたお前だけはっ！」
なりふり構わず、もう帯を使うことさえなく私に身一つで襲い掛かってくる。
「――そう、でもごめんね。私はまだ死んでやるわけにはいかないんだ」
雷の呼吸　壱ノ型・霹靂一閃・神速
獣の呼吸　参ノ牙・喰い裂き
「――間に合った」
「これで終わりだ！糞女ァ!!」
善逸くんと伊之助くんが頸を斬った。そしてその頸は私が途中で放り投げた兄の頸と向かい合うように転がった。
何か言い争う声が聞こえる。
でももう、私の身体は限界だったようで、そこから先の記憶はない――――。

白代萼と炭治郎３

目を覚ますと見慣れた天井と角と窓枠。
ああ、ここ蝶屋敷だ。起き上がる。お腹が痛い。
そういえば蕨姫に刺されたんだっけ。
あの後私は意識を失ったためどうなったのか分からない。みんなは無事なのだろうか？
呑気にそう思っていると部屋の入口の方から何かの割れる音がした。
「――う、萼」
「カナヲ――おはよう」
そこにはカナヲがいた。その下には花瓶らしきものが見るも無惨な姿になって散らばっている。
「お、おはよう。大丈夫？朦朧としてたりとかしない？」
「そういうのは何もないよ、大丈夫」
「よかったぁ」
泣きそうになりながら私が起きたことを喜んでくれるカナヲにあの後のことを聞い

てみた。
「炭治郎たちは大丈夫。みんなそれなりに怪我していたけれど意識はあったし、みんな一週間以内に動けるようになった。音柱も毒で朦朧としてたけど奥方たちに支えられてなんとか持ちこたえたからついこの間退院した。でも、萼が一番重傷で……禰豆子の火のおかげで毒の症状は緩和されたんだけど出血も酷くて――二ヶ月間、今日までずっと目を覚まさなかったの」
「そうだったんだ……ごめんねカナヲ、心配かけて」
「でもこうして目を覚ましてくれて本当によかった」
「うん、みんなのおかげで生きてる」
　それから暫くするとしのぶさんが見回りにやってきて私が起きたことは知れ渡ることになった。
　柱も含め、様々な人が見舞いに来てくれた。――見舞い品が山を築いているのを人生で初めて見た。
「萼さん！」
「炭治郎くん!!」
　昼過ぎ頃にやってきた炭治郎くんは後遺症もなく元気そうだった。
　炭治郎くんは機能回復訓練を終えた後、上弦との戦いで刃こぼれしてしまった日輪刀

を新調しようと思ったものの、当の専属刀鍛冶（鋼塚さんというらしい）が癇癪持ちの気難しい人で呪いの手紙を炭治郎くんに送ってストライキを起こしたうえ、里に着いたら行方を眩ましていたらしい。ちなみに、私の日輪刀を担当してくれている錫木さんは人見知りらしく、無言と単語の筆談あとジェスチャーで会話を成り立たせている。

「錫木さんが人見知りですか？俺と会ったときは普通に話してましたけど……」

「ええ?!……じゃあ異性が苦手なのかな？」

「そういえば鱒の押し寿司が好物だって言ってましたよ！」

「今回私の日輪刀も蕨姫斬るとき無理させたからなあ……御詫びに送っとくよ。教えてくれてありがとう、炭治郎くん」

「いえ！仲良くなれるといいですね！」

「そうだねえ」

　そのためにはまず目を合わせてもらえるようにしないといけないけど。

「あの」

「ん？」

「遊郭のときはありがとうございました」

「うん、みんな生き残ってくれて何より」

「それから、あの時止めてしまってすみませんでした」

なんで？

「どうして？」

「刀鍛冶の里で……時透君に言われたんです」

『そういえば君はこの間の任務で白代さんのことを止めたんだってね。僕たち鬼殺隊員は鬼を倒すのが役目なのにそれを止めるなんて、他の隊員を殺すつもり？その間にその鬼が回復するために人を食ってしまう可能性だってあった。はっきり言って――君、剣士に向いてないよ』

ああ、これまたきっついこと言ったんだねえ、時透くん……

「時透くんの事は置いておいて。炭治郎くんとしてはどうなの？あの場で私を止めたことを後悔してるの？」

「それは……」

炭治郎くんは言い淀んだ。それが答えだ。

「私はね、あの時止めてもらえなかったらきっと私じゃなくなってた」

「！」

「あの時君が直感的にそう感じ取ってくれたように、おそらくね」

和修白代誘は――私であり私の一部だから。生まれた時からの『名前（役割）』なので名前の力（強制力）が白代萼とは一線を画す。

今と前世を混線させた私が悪いんだけど。母親がそうであったように、おそらく和修の中でも萼を名乗る事をよく思わなかった存在がちらほらいただろうから。何かあった時は萼(私)を塗りつぶすようにされていたのかもしれないし。

「だから、あそこで私が戻れたのは奇跡。そしてその奇跡のきっかけを作ったのは君なんだよ。だから謝らないで」

「……はい」

「ありがとう、炭治郎くん。私を戻してくれて――とそういえば、その時透くんから炭治郎くんに言伝だよ」

「時透君から?」

「うん、『この間と柱合会議の時はごめん。それからありがとう』だって」

「時透君……」

「本当は手紙にして炭治郎くんに渡したかったらしいんだけど……時透くんの鴉が嫌がって持って行ってくれないんだって。だから私の見舞いも兼ねて私に頼んできたみたい」

「ああ、なるほど……」

炭治郎くんはげんなりとした顔になった。会ったことあるんだね、あの鴉に……

ちなみに私の場合は私の玖楼くんと時透くんの鴉がすこぶる険悪な仲なので鉢合わ

せた瞬間ガーガーギャアギャア五月蠅くなるため一緒の任務では極力玖楼くんたちを鉢合わせないようにしている。

「炭治郎くん」

「え、あの寝てなくていいんですか？」

「うん。一番酷かったのはお腹のところだけだったし、毒は禰豆子ちゃんが消してくれたって言ってたから。あとは機能回復訓練するだけ。今も全然大丈夫」

そう言って炭治郎くんの目の前にやってくる。そして彼の頭を撫でた。

「よく頑張ったね、炭治郎くん」

「っ」

「今回の里でも犠牲者が出た。上弦の鬼が二体もいた。それでも――君は戦った。……強くなったねえ」

最初の頃より強くなった。

精神的にしても私より強いだろう。でも、強いからといって傷付かないわけじゃない。

彼は強い代わりに酷く優しいから、犠牲者にも鬼にも同情や慈悲の心を与えてしまうから。

「――私は君が壊れてしまわないか心配だよ」

「萼さん……」
「ごめんね、こんな縁起でもないこと言って。でもそういう人を、知っているから。どうしても気になって……ね」
　ハイセ。佐々木琲世。中身のない明るさで唯一一緒にいても苦じゃなかった白い明るさの人。彼の姿が思い浮かぶ。私はもう彼のパートナーから外れてしまったものの、交流があった。いざというとき自分を顧みないところも、甘いところも……気になって仕方なかった。彼は記憶のことで不安定になっていたので特に。
　もう確認する術もないけど……どんな形であれ幸せになってほしい。少なくとも苦しんだ分は報われてほしい。
「どうか炭治郎くんと禰豆子ちゃんが幸せになりますように」
「――ありがとう、ございます……あの、我儘言ってもいいですか？」
「どうぞ。頑張った御褒美に何でも聞くよ？」
「なら、もう少しだけこのまま撫でてもらってもいいですか……俺、あなたにこうして撫でられるの好きなんです」
「――そういうことなら、いくらでも」
　ふわふわの彼の髪をそのまま撫で続ける。なんだか事あるごとに撫でさせてもらっている気がする。炭治郎くんはこれを御褒美に望んでくれたわけだけど、実は私にとっ

ても癒しであることは今のところ秘密にしておこう。
この翌日の柱合会議から私たち柱――鬼殺隊全体が慌ただしくなるのを、この時の私はまだ知らない。

白代萼と柱稽古

里での戦いで痣の発現した人たち。
太陽を克服した禰豆子ちゃん。
そしてそれ以来ピタリと止んだ鬼の出現。
「――まさに鬼の居ぬ間になんとやら」
フラグっぽいからやめておこう。
次の戦いに備え、私達柱は隊員たちに稽古をつけることになった。
柱稽古。
継子ではなく一般隊員たちに稽古をつけるうえでの呼称だ。
といっても、基本的に全員参加というだけで柱の中には稽古に参加しない人もちらほらいたりする。
ちなみに私は参加します。カナヲの稽古もつけるけど柱稽古もこなします。
「(でも私の前の稽古担当してるの伊黒さんだからなあ)」
あの人、教えるのも追い込むのもうまいけど他の柱と同じくスパルタなところあるからなあ――一体何人生き残ってくることやら。

……まあ結局私の後も不死川さんだから何とも言えないけど。

「カナヲはカナヲで今日はしのぶさんのところだし……」

カナヲはしのぶさんの継子なので基本的にはそっちに行く。私がカナヲに稽古をつけるのは自主練の時と剣術だけだ。カナヲに合わせて最適化するように調整したり効率化したりするだけ。カナヲは筋がいいので本人のやる気も相まって着実に飲み込んでいくので純粋にすごいと思う。

思えば私の身内って才能マン的な人が多い気がする。蝶屋敷で働いてるアオイさんは精神的に戦いに向かないだけで言ってみれば文武両道もいいところだし、なほちゃん・すみちゃん・きよちゃんにしたってあんな小さいのに看護婦としてしっかりサポートしている。今思うと凄い。私ってひょっとしてちょっと場違いなんじゃないんだろうか。

「（――にしても暇だなあ）」

暇っていうことは稽古してないんじゃないかって？

ちゃんとしてます。たぶん今までもこの後もこれ以上ないってくらい簡単かつ安全な稽古なんだけど。

みんな満身創痍っぽいので休憩時間にした。

というわけで暇なのである。

「(私の稽古ってそんな難しいかな?)」
それともなめられているのだろうか?とりあえず隊員に貸し与えていた木刀を足で蹴り上げて拾い上げた。そしてそのまま振るう。あーあ、こんなんじゃ私の自主練時間が増えるだけで隊員の力の底上げなんて夢のまた夢だ。
私がため息を吐くとどこかで「ひっ」とか聞こえた気がする。怖いなら殺すつもりで掛かってくればいいのに。
なんて思っても口にはしないけど……
「ごめんください!」
「炭治郎くん!」
元気よく飛び込んできた声に荒んでいた心が一瞬にして潤う。うんうん、前より身体ががっちりしてる。ちゃんと真面目に稽古を受けてる証拠だねえ。
「うふふ、待ってたよ。ようこそ、私の蜜屋敷へ。歓迎するよ炭治郎くん」
「はい!今日からよろしくお願いします!」
「じゃあはい、木刀(これ)」
持っていた木刀を炭治郎くんに渡す。
「これって萼さんの木刀じゃ?」

「私は打ち合いとかはしないよ」
　ますます意味が分からず混乱する炭治郎くん。今説明します。
「じゃあ私の柱稽古について説明するね。私の稽古は単純に鬼ごっこ。機能回復訓練でやってるのと同じ」
「鬼、ごっこ？」
「うん。炭治郎くんが私を捕まえるのが勝利条件。――ちょっと違うのは私を捕まえるうえで炭治郎くんたちはどんな手を使ってもいいっていうところ。私からは何も仕掛けないし、この通り身一つの状態で私は逃げ回る。君たちはその木刀や地の理や作戦様々なものを駆使して私を捕まえる。その時は私の身体ならどこに触れてもいいよ。腕でも髪でも足でもそれこそ腰でも胸でも頸でも、ね」
「ど、どこでも、ですか……」
　炭治郎くんが息を飲む。
　そう、簡単に出来てたらこんなに居残りの隊員がいるわけがないんだよ。
「ただし、私の髪飾りと頸を狙ってきた場合、例外的に反撃することがあるのでそこだけ注意してね♡」
「っ」
「それでは――始め！」

何度も炭治郎くんは諦めることなく向かってきてくれたけどやっぱり今日一日では決着がつかなかった。

ちなみに今日のおやつは藤の花の砂糖漬けだった。

＊＊＊＊

炭治郎くんが屋敷にきて一週間が経った。

動きとか勘とか……そろそろかなあ。

「いきます！」

炭治郎くんが私に飛び掛かる。私も彼の連撃をかわしていく。その都度できる動きの隙を見極めて炭治郎くんの手が私の方に伸びる。

「（前より格段に隙の作り方が上手くなってる）」

足払いも私は察知して避けた。しかしそこにまた掻い潜るようにして腕が迫る。狙いは——頸。

咄嗟に反撃——と思ったけどだめだ。炭治郎くんは捨て身の覚悟で飛び込んできた。つまり私がこのままクッションにならなければ彼はただではすまないだろう。その私の一瞬の隙を突いて彼の伸ばされた腕が私に触れる。

「あ」

これは——

そのまま私は炭治郎くんの下でクッションになって背中から落ちた。
「……うう」
「――おめでとう、炭治郎くん」
「え」
「まだ顔上げないで――……って遅かったね」
私の言葉に炭治郎くんは顔を上げた。上げてしまった。
「柱稽古・蜜柱――合格。だけどちょっと待ってほしかったかな」
今の私たちの格好。
炭治郎くんが私を押し倒しているように見える。
炭治郎くんのおそらく私の肩か頸を狙ったのであろう手が、私が避けたことによりデコルテから胸にかけてのところにある。
掴み損ねたその手の爪で私の頸に傷が付いている。
……今日は湿度が高いからって隊服の前開けとくんじゃなかったなあ。
「あの、痛いところとかない？」
「……」
「炭治郎くん？」
「ブフッ」

「炭治郎くん――!?」

鼻血を出した炭治郎くん。どこにそんな要素が――って、ひょっとしたら私が衝撃を殺し切れていなかったのかもしれない。隊服のボタンとか硬いし、私の肋骨に鼻をぶつけてたとかありそうだ。

「だ、大丈夫です」

「そう言ってもまだ鼻血止まってないよ！呼吸で止血して！あー、もう。いくら早く強くなりたいって言っても無茶して突破しようとしないの!!そんな火事場の馬鹿力持続できるわけないんだから!!」

「す、すみません……」

「とにかく集中！皆は休憩！炭治郎くんは離れで安静にすること！」

そう言って離れに連れていき、呼吸での止血を促せば割とすぐに炭治郎くんの鼻血は止まったので、私は濡れたハンカチで乾いてしまった血を拭き取った。

「今回はちゃんと条件達成したし、今までの稽古の応用も出来てたから合格だけどあんまり無茶しないように！」

「はい――あの、頸」

「ああこれ？「責任取ります！」え」

いや、キリ！って言ってくれるのはかっこいいと思うけどさ、私に付いた傷なんて半

人間の回復力をもってすれば痕も残らないと思うのだけど。
「責任を、取らせてください!!」
「いやいいよ。この分なら傷跡も残らないだろうし」
「責任を! 取らせてください!!」
「ぐ、具体的には?」
そう言えば炭治郎くんは更に赤くなった。
「……萼さんを、お嫁さんにもらいたい、です」
「……誰かと添い遂げる未来っていう人生設計はないから別にいいよ……そういうのは『責任を取るため』に言うんじゃなくて本当に好きな人に言うものだよ」
それに
「『責任』は大事だよ。でもそれで人生を決めてしまうのは酷く寂しいことなんだ」
知ったように私は語る。
「それだったら、好きなものや好きな人を自分の人生に巻き込んでしまった方が――その方が幾分か素敵だよ」
たとえそれで酷い目にあっても、きっとそのために頑張ることができるから。
「私に対しての『責任』なんていつか消えるもののために自分の人生を浪費しないで――

自分の幸せを見つけて幸せになって」
私のエゴに、巻き込んでごめんね。
炭治郎くんはそれ以上この話を出すことなく、私の屋敷を出て行った。
思春期。気の迷い。年上に対する憧れの取違い。やっぱり長男といっても年相応な男の子なのだ。
「(だからきっと、君のその感情(初恋)は恋じゃない)」
いや、もしかしたらそれこそが初恋なのかもしれないけど。
「強く、幸せに」
そうなれたなら――その可能性のある彼ならきっと大丈夫。

私と違って。

白代萼の終わり

お館様が亡くなられた。
あまね様、ひなき様、にちか様も運命を共にされた。
怒りに任せた刃は鬼舞辻無惨に届くことなく私は引きづりこまれていった。
落ちたのは座敷。周りからは下弦並みの鬼たちの気配を感じる。
「お館様……」
私の、居場所をくださった方。
私を、認めてくださった方。
私を、家族だと、自分の子どもだと言ってくださった方。
「う、うぅ……っ」
生きていてほしかった。
いなくならないでほしかった。
お館様
お館様
お館様

呼んで嬉しそうに微笑むあなたはもういない。
気遣ってくださった、時折表情を和らげていたあまね様も。
私の話を興味深々に聞いて笑顔を見せていたひなき様とにちか様も。
きっと、あの方たちは分かっていたのだ。こうなることが。だからきっと護衛を付けなかった。私も出入りはしても四六時中一緒にはいられなかった。わかっていたうえでの、選択だったのだ。
――すべては鬼殺隊と産屋敷存続のためだった。鬼舞辻に対する策の一部になろうとも。
「お館様は、鬼殺隊（私たち）を選んでくださった」
ならば、私はそれに応えなくては。
「鬼殺隊――蜜柱・白代萼。参る」
――貴様（鬼）らを一匹残らず鏖殺する。
＊＊＊＊
何匹いたのか分からない。
ただただ切り刻み進んでいく。私の周りは原型を留めていない挽き肉になった鬼たちの肉片が散らばり、プカプカと乾かない血の中に浮かんでいた。

八つ当たりの相手を見繕ってくれた事にだけは感謝すべきなのだろうか――いや、必要ないな。どうせ殺すモノなのだから。
その時、一瞬冷えた空気を感じた。
これ、は――
ガリガリという咀嚼
バキバキという折る音
ゴクゴクという嚥下
間違いない
「ん？ああ、やっと来てくれたんだね。蜜の君」
上弦の弐、童磨。
「――――」
「鳴女ちゃんにお願いして俺の近くに飛ばしてもらったんだけど、待ってるうちにお腹すいてきちゃってさ。こんな格好でごめんね？今片付けるから」
その瞬間、周りの死体が全て凍り付き――一瞬にして消え失せた。
「（いや、跡形も無くなるほど粉砕されたのか）」
「待ってたよー、あの約束通り俺の方から行こうとも思ったんだけど、行く前に鳴女ちゃんが見つけてくれたんだ！」

「なるほど――随分厄介な血鬼術の持ち主がいたものだ」
「おかげで思っていたより早く君に会えた！」
そしておもむろに私に頸を晒す。
――そこにはあの時の傷痕があった。
「次はいつ会えるのかな、ってこの傷痕見て思い出しながら待ってたんだ」
「趣味が悪い」
「ええー、つれないなあ」
「とりあえず――死ね」
居合いと高速移動で打ち込み下がった。
それは鉄扇で防がれる。
「やはりそう簡単にはやられないか」
「そうそう。せっかく会えたんだ、もっと楽しもうぜ」
「断る！」
相手の冷気を吸わないようにｈｉｔ＆ａｍｐ；ａｗａｙを繰り返して攻撃し続ける。
蜜の呼吸　肆ノ型・陶酔の宵
無音で気配を消して迫り――切る！
手応えはあった。あった、けど――

「ごほっ」
　痛み分け……こちらも一撃入れられてしまった。
「血を流す君も好きだけど……それじゃあ長く遊べなくなっちゃうよねえ……ああそうだ！じゃあ俺が止血してあげるよ！」
「な……うぁっ」
　斬られた傷に来る鋭い痛み、そしてそこはすぐに感覚がなくなった。
「（まさか――っ）」
　私の傷は、相手の血鬼術で凍らされていた。
「氷で彩られた君も綺麗だねえ。そうだ、いっそのことこのまま氷漬けにして飾っておこうか！」
「ｖｅｒｒ▪ｃｋｔ（狂ってやがる）」
　掌中の日輪刀を握り直し、皮肉を呟く。
　本当は一刻も早く鬼舞辻無惨（本命）のところに行きたいところだけど……
「まずはお前を倒す――」
　私は再び、今度こそこいつを殺すために対峙する。

――

――――――

「お揃いだねえ」
「はっ、はぁ、っ」
　自分の髪を弄びながら私に嬉しそうに話しかける。一方私はもう既に、奴と同じ髪色になってしまうほど疲弊していた。
「（上限を超えて半喰種化しすぎた、既に限界に近付いている）」
　白髪になったのが目に見えてわかるサインだ。一気に何度も超再生を行いすぎた。
　でも
「（それがどうした）」
　きっとあの遊郭の時のように和修白代誘が戦えばまだ勝機はあっただろう。けれど私は、鬼殺隊の白代萼は私だから、和修の道具ではなく鬼殺隊の隊士としての私だから。どうしても私として戦いたかった。
「（私はまだ死んでいない。まだ、生きている）」
　こんな私でも、みんなに必要とされている。みんなに願われている。だから
「っ!!」
「え」
　私の血を纏わせた日輪刀を相手の頸に突き立てた。ああ、くそ。なんでこれ以上進ま

ないんだ。貫通できても横にずらして切断しなければ意味がないのに。
あーあ
「生きたかった、なあ」
和修にいた時は思わなかった気持ちが不意に口からこぼれ出た。大事なものがたくさんできたこの世界で。
「可哀想に。俺が食べてあげるよ。そうすれば君も極楽に行ける」
あの時と同じように、奴は私を抱きしめて耳元で囁いた。
極楽？
「生憎、そんな空虚は信じてない。行くにしたってきっと地獄だ。私にはそのくらいの方がお似合いだ。」
そのくらいの事を、私はしてきたのだから。
「……そうかい」
「ご、ぁ」
……さよなら、蜜の君。そう言われた瞬間に反転する視界。軽快な折れる音。
最後に、思うくらいはいいよね。
私、カナヲと姉妹みたいに出掛けてみたかった。
お館様のこともっと守っていたかった。

なんのしがらみもなく生きてみたかった。
を、してみたかった。
今の間際にこんなこと思うなんて。なんて救いようのない奴なのだろうか。
「うて、な」
カナヲの声がする。ごめん。こんな情けない奴で。――後は頼むね。

霞む視界に映るのは天井で、いつもの青はそこになかった。

「よくも、よくも私の〝姉〟を殺したな!!」

嗣ぎくなぐ
エピローグ　プロローグ

意識が浮上する。目を開けると見慣れたマンションの天井だった。なんだか長いこと夢を見ていた気がする。携帯で日付と時間を確認し、ため息を吐いた。

「明日、仕事かあ」

休みだったらこのまま楽にゴロゴロしてられたのに。気分は急降下していく。

「（まあ、宗家（吉時）の面子（と政）と一緒じゃないのが不幸中の幸いか）」

ただトルソーとオロチの後始末がこっちに回ってきそうだけど。

「なんでＱｓの後始末が私の方に紐付いてくるのか……」

いや、ハイセとコンビ組んでた時にＱｓ　が立ち上がったからなんだろうけどね。でもそれは真戸さんも……そういえば真戸さん明日休みか。

「とりあえず、お風呂入ろう」

もう午後１１：００を過ぎている。考えるのはやめよう。いざとなったらハイセを巻き込めばいいし。

そのまま私は沸かしておいた風呂場に向かった。

＊＊＊＊
???ｓｉｄｅ
鬼舞辻無惨を倒した。
みんな使命を終え、それぞれの道を歩んでいる。
鬼殺隊関連の建物や土地は産屋敷家管轄であるものの、柱の屋敷などは柱の人たちのものとしてそのままだ。
でも自分は――
「(俺は、あの時から止まったままだ)」
無惨を倒してすべてが終わったあの日。禰豆子が人間に戻って、新しく生きていこうと決意を固めようとしていた俺にもたらされたのは、想い人の訃報だった。
受け入れた。つもりだった。
禰豆子は善逸の下に嫁いで行って。俺は一人山に残った。そういえばあの時禰豆子も善逸も心配そうにしながら、何度も俺に呼びかけながら歩いて行ったっけ。
俺はそんなにひどい顔をしていたのだろうか。
今日は萼さんの月命日だから、形だけの彼女の墓の墓参りに来ていた。
墓には既に藤の花が供えてあった。
「蝶屋敷の人たちかな」

あの人たちもこうして月命日に墓参りをしている。特にカナヲは欠かすことなく無理にでも時間を作って必ず来ている。

あの戦いの後、カナヲは泣きながら萼さんの髪飾りと日輪刀を持ってやってきたのだ。

『姉萼さんは、あの鬼に取り込まれて遺体が残っていないから、だから』

萼さんの数少ない遺品を大事そうに、守るように抱えながら蝶屋敷へ帰っていったのを今でも覚えている。

俺は何も入っていない空っぽの墓に呼びかける。

「ねえ、萼さん。あの戦いが終わって半年が過ぎました。禰豆子は嫁ぎましたし、俺も元の炭焼きに戻って生活しています。この普通の生活が尊いものなのだと思います。でも――」

俺、ちっとも幸せじゃないんです。

「……あなたは俺に幸せになってほしいと言っていたけれど、だめでした。まだ半年しか経っていませんけど、あなたの言う幸せについて考えて……こうして普通の生活をしながら、素敵なお嫁さんをもらって家族を作って看取られていく。それがあなたの思う幸せだったんでしょう」

でも俺、やっぱりあなたのことが忘れられないんです。あなたはきっと否定するだろ

うけど、俺はあなたに本気で恋してたんですよ?あの時だって責任は本当のことだったけれど、本当にお嫁さんにしたいと思ったんです。

「やっぱり、あの時ちゃんと言い返しておけばよかった」

責任だけじゃなくて俺の男としての下心も入ってるって、そう言えばもう少し後悔は軽くなったのだろうか。

今となっては分からない。

俺は墓参りを終えると萼さんの屋敷へ向かう。彼女の使っていた蜜屋敷はそのまま誰も住むことなく残っている。人の出入りも最小限で、屋敷を管理する蝶屋敷の人たちと俺、時々甘露寺さんが来るくらいだ。俺は月命日の墓参りの度にここに泊まっている。初めてお邪魔した柱稽古の時でさえ道場と離れくらいしか案内されていないというのに、この屋敷は酷く落ち着くのだ。おそらくまだ余韻程度に萼さんの匂いや生活感を感じ取れるからなのだろうけど。

誰もいない部屋の畳に寝転がる。どっと疲れが押し寄せてきた。

「萼さん」

『炭治郎くん!!』

……そんな期待した返事が返ってくることはないとわかっていても、たまらなくなっ

て思わず呼びかけてしまうのだ。

「――すきです」

言葉にするんじゃなかった。酷く胸が苦しい。不意に泣きたくなってしまう。寂しい。寂しいです、萼さん。

本当は、あなたと一緒に幸せになりたかった。あなたと結婚して可愛い子供を産んでもらって、仲睦まじく健やかな生活を送って死んでいく。そんな幸せを、俺は望んでいたんです。

疲れで瞼が酷く重い。

叶わない理想でも、夢で見ることくらいいいですよね。

そして俺は完全に目を閉じた。

――

――

俺は今真っ暗な空間にいる。

ここはどこだろう。

そういえば夢は記憶の整理なのだと聞いたことがある。ということはこの空間にしても俺が覚えていないというだけで来たことがあるのだろうか。

「――あれ？こんなところでどうしたんですか？」

「――！」

声のした方に勢いよく振り返ると、そこには整った中性的な容姿の男性がいた。

誰かに、似ている？

「こんな安定しない狭間みたいなところに来るなんて」

「？狭間？」

「あー、いえ。忘れてください……僕はニムラ。宗太とかいう人もいますけど、仲の良い人からはそう呼ばれてます」

「ニムラさんは何故ここに？」

「色々です」

「――」

ニコニコと愛想よく笑いながらも答える気がないらしい。

「――ところで、君には大切な人はいますか？」

「います。妹と――もう会えないですけど……想い人が」

禰豆子と、萼さん。禰豆子は嫁にいったし、萼さんはもういないので正確にはいた、だろうか。

「そっか……僕にもいました。運命から逃がしたい想い人と妹が。結局、何もしてやれなかったけど」

ニムラさんはどこか遠い目をして独り言のように言った。似たような境遇からか、思わず同情してしまう。
「ねえ、君は今何かすべきことはありますか？」
「――いえ、特には」
「よかった――ならお願いがあるんですけど」
「なんですか？」
「あの子が、妹が死んでしまう未来を阻止してほしいんです。あの子は結局運命に囚われたまま逝ってしまったから。あの子さえ救ってもらえたら後は好きにしてもらって構いません。現代に馴染んで暮らすのも、元の世界に帰るのも……後の僕と敵対するのも」
「え？」
最後の言葉だけよく聞き取れなかった。
「そろそろ本当にここも閉じちゃうみたいですから――お願いしますね。竈門炭治郎くん」
「なんで、俺の名前――」
彼はにっこりと微笑んだ。

「――――僕の妹を、ウテナをどうかよろしく」

――ああ、誰かに似ていると思ったら。

そのまま俺は黒に呑まれていった。

白代萼と侵入者

風呂の中で色々考えてみたけど、結局モヤモヤするだけで時間を浪費してしまった気がする。

「……上がるかあ」

というかまず、なんでこんなに考える必要が？解決途中の案件が入っているわけでもないのに、なんでこんな何か忘れているような気分になるのだろう。

風呂から上がって脱衣所に抜けて――そこには見知らぬ男の子がいた。

「え!?あ、あの?!」

しどろもどろになる男の子。私はそんな事はどうでもよかった。

即座に彼に飛び掛かり、マウントを取って動けなくさせる。本来ならクインケを取り出すところだけど、生憎今はないので彼の頸に片手を添えた。

「だ!?」

「動くな、質問に答えろ――何者だ。どうやってここに侵入した」

手にやや力を込める。ここは最新のセキュリティマンションだし、もし私が寝ていた時から潜んでいたとしてもそれなら気配で飛び起きる。

さあ、殺されたくなければ――

「ぶっ」

「……は？」

少年が鼻血を吹き出した。――あ、もしかしたら頭ぶつけた時に何かあった？

しまった。やらかした。

「～～っ、あーもう！」

少年は気絶しちゃってるし、拭いてもいない全裸のままで飛び掛かったから脱衣所はびしょびしょだし……なんなんだ今日は。

そのままにしておくわけにもいかないので、不満を肺に留めて片付けることにした。

＊＊＊＊

とりあえず彼をソファに寝かせて服を着ると床を拭き取って片付けた。――お茶を淹れるべきなのだろうか。侵入者にお茶淹れるってなんかおかしくないか？相手が子どもだからといって舐めてかかるつもりはないけど、なんか本当にあっちも混乱してたみたいだったし……鍛えてるみたいだけど何してるんだろうこの子。まあそれは後で聞くとして――

「う、……うあ？」

「目が覚めたみたいだね」

「っ！」
少年は私の方を見ると若干涙目で嬉しそうなたまらないような顔になった。
おいおいちょっと待て、私と君初対面だよね？
「気分は？」
「え、あ、はい。大丈夫です」
「そう、じゃあ起きたばかりのところで悪いけど、答えてもらおうかな――まず君の名前は？」
「竈門炭治郎です」
「どうして私の部屋にいたの？」
「わかりません、俺も屋敷で眠ってたはずなんですけど……」
「……そう。ありがとう、とりあえずお茶淹れたから飲んで落ち着きましょうか」
私がお茶の入ったカップを手渡せば、少年――竈門くんは躊躇することなくそれを受け取り疑うことなく飲んだ。
喰種の匂いはしないし敵意もないから一応大丈夫、か。念のために玉露を淹れたけど、普通に飲んでるし人間ということでいいんだろう。疑うことなく人からもらったものを口に入れるあたり警戒心もないみたいだけど……毒とか自白剤とか入ってるって思わないんだろうか、この子。

「このお茶美味しいですね！」
「……それはよかった」
本当に大丈夫かな、この子。ここ一応君の知らない土地なんだよね？なんでそんなに寛げるの？
「（宗家に連絡……いや、内々に処理してこその白代だからなあ。それとも有馬さんに……いや、今日は夜勤か。ニムラ……はいろんな所に潜入してるから電話して匂わせると不味いだろうし）」
あてになる人が全くいない！
「あの、萼さんはここにお住まいなんですか？」
「ああうん、といっても仕事の関係上帰ってきたり来なかったりするけど」
萼さん？私は名乗ってないはずだ。さっきの表情に、ひょっとしたら今こうして寛いでいるのも……
「竈門くんは私を知ってるんだね」
「え!?――っ、いえ！知りません！」
「凄いことになってるよ、顔」
分かりやすいというよりは嘘がつけないタイプなんだな、この子。――なら大丈夫か。それにいざとなったら私が始末すればいいだけだし。

「まあ、それは置いておくとして――ちなみに竈門くんの住所は？もし近くだったらこのまま送るよ」
「いえ流石にそれは……「いいから」は、はい！東京府」
「府？都じゃなくて？」
「え？」
「え？」
　とてつもない、壮大なすれ違いが起きようとしている気がする。
「竈門くん、今の年号は？」
「え、大正ですよね」
「……残念ながら、今は平成。大正の次の次の年号だよ」
「え?!」
　重大な事実が発覚した。少年はタイムトリッパーであり、家なき子である。
　流石にここで突き放すのは人でなしだよね。
「詳しくは聞かないけど訳ありだってことはわかったから、元の時代に帰るまでここにいるといいよ」
「いいんですか!?でも女性の一人暮らしの部屋に俺がお世話になるのは……」
「大丈夫、私それなりに強いから」

それはもうにっこりと笑顔で答える。少年も鍛えているように、私も決して弱くはない。

「えっと……お世話に、なります」

「うん――たぶん君は知ってると思うけど、私は白代萼。これからよろしくね、竈門炭治郎くん」

「――はい。よろしくお願いします、萼さん」

少年が悲しげに微笑んだ、気がした。

白代萼と似た者同士

　竈門くんがやってきて約一週間が経った。大正とは文化が違い過ぎて最初は戸惑っていた竈門くんだったけど、なんとか日常生活に支障を来さない程度には慣れてくれた。

「じゃあ、行ってきます」

「いってらっしゃい、萼さん」

　にこやかに竈門くんは私を送り出してくれる。うわー照れる。こんなのシャトーにいた時以来だ。

　ちょっとにやけそうになりながら、私はマンションを出た。

「あ、萼さん携帯……ってもういない――届けた方が良いだろうか？」

＊＊＊＊

　会議が終わってそれぞれに散らばっていく中、私は一人の人物に視線を向ける。

「――ハイセ」

「あ、ウテナさん」

「今日もお疲れ様。浮かない顔してるけどコーヒー飲む？」
「あはは、大丈夫です。ただちょっとへこんでるだけで」
「会議？それともシャトーでなんかあった？」
「なんていうか、その、僕の立ち位置ってなんなんだろうなって、考えちゃって……」
「……とりあえず、もう会議室閉まるから移動しようか。この後時間ある？」
「はい、休憩ですけど」
「ならよかった。これからお昼にしようと思ってたから、そこで話そう」
「はい」

――

――

「そっか、瓜江くんが……」
「叩いた僕も悪いんですけどね、はは……」
「――いや、でもそれは当たり前の事だよ。瓜江くんは私やハイセが選んだ班長だ。メンターもなしに行動はいざというときはありだろうけど、報連相の義務はあるし、班の纏め役として危険性を回避すべき所を危険に晒してるんだから」
「――そう、なのかな」
「そ、う、で、す!!……瓜江くんの言ったこと、あんまり気にしない方が良いと思うよ。

彼もたぶん焦ってるだけかもしれないし」
「え？」
「お父様が特等捜査官で同期があの黒磐特等の御子息。いくら前より喰種の出現率が上がって手柄を挙げやすいっていっても思うところがあるんじゃないの？」
　それに、その父親は彼が小さい時に黒磐特等との任務で隻眼の梟に殺害されて殉職してるから尚更だろう。親の誇りを持って働く姿に憧れる時期もあったのかもしれないし――私なら絶対にあり得ないけど。
「そっか……」
「うん。まあだからといって今回みたいになられても困るけどね――と、そうだ。身体の方は大丈夫？」
「あ、はい。とりあえず数値も身体も大丈夫だってお墨付きもらいました」
「ならよかった」
　久々の恐慌状態だったこともあってバイタルに影響が出てる可能性があるんじゃないのかと思ったけど、大丈夫そうだ。
「とりあえずトルソーもオロチも目星が付き始めたしよかった……とは言えないか、たぶんまた別の任務くると思うよ」
「ええ!?」

「なんかこの頃人間の行方不明者が多くてさ、私もトルソーと平行してそっちに駆り出されてるからそろそろそっちにも話がいくと思う」
「分かりました……」
「ごめんねハイセ」
「い、いえ！ウテナさんのせいじゃありませんから！」
乾いた笑い声をあげるハイセと私はきっとＳＡＮ値チェックに失敗するんじゃなかろうか、なんて思ってしまったのは仕方ないと思う。

＊＊＊

ハイセと早めの昼食から戻るとそこにはアキラさんがいた。
「アキラさん」
「ああ、ちょうどいいところに来たな二人とも。ほら少年、ウテナが来たぞ」
「萼さん！」
アキラさんに呼ばれてきたのは、竈門くんだった。
「竈門くん！」
「朝出ていく時に携帯忘れていってたので……遅くなってすみません」
「わざわざ持ってきてくれたの？」
「はい、これがないと萼さん困るかなって」

いい子だな。うん、いい子。……そんな君が私は苦手です。

「ＣＣＧの前をずっとうろついていたから気になって声を掛けたんだ。そしたら萼の忘れ物を持ってきたというからお前たちが戻ってくるまでこうして待っていた」
「竈門くんを保護してくださってありがとうございました、アキラさん」
「いや、礼を言われるほどのことはしていない。それではな」
「はい」
「ありがとうございました！」
　三人でアキラさんを見送るとふと思ったことを口にした。
「そういえば、二人とも声似てるよね」
「「そう／そうですか？」」
「うん。……と、お互いの紹介がまだだったね。ハイセ、この子は竈門炭治郎くん。ちょっと訳ありで私が今預かってるの。竈門くん、こっちは私の同僚の佐々木琲世。新設されたＱｓ班のエース」
「そ、そんな、ウテナさん、大袈裟ですよ！」
「大袈裟なんかじゃないよ、ハイセ」
「竈門炭治郎です。よろしくお願いします」

「あっと、ごめん。よろしくね、竈門くん」
お人好しコンビになるんじゃないんだろうか、この二人。まあ竈門くんを仕事に関わらせるつもりはないのでコンビを組むっていう機会は殆どないだろうけど。
「ハイセ、お願いがあるんだけど」
「はい？」
「明日シャトーに行くから、トルソーの調査資料大まかに纏めといてくれる？」
「分かりました」
「ありがとう。――じゃあ竈門くん、行こうか」
「はい！失礼します」
ハイセと別れて受付で竈門くんの許可を取って竈門くんと廊下を歩く。今日は外回りもなく、あとはデスクワークをちょっとすれば終わりだ。
その間竈門くんには休憩室にでもいてもらおう。
「もうちょっとしたら私も上がるから、待っててね」
「はい！」
竈門くんを休憩室に置いて、私は自分のデスクに向かう。
「白代上等、さっきの子は？」

「あの子なら休憩室にいますよ」
「へえ。にしてもそっか、白代上等も隅に置けませんねえ」
「何言ってるんですか、相手は私より四つ下ですよ？私相手なんて可哀想でしょう」
「でもさっきの子、白代上等が来たとき出待ちしてた子犬みたいでしたよー」
「他に知り合いがいないからですよ」
何を言っているんだこの人たちは。それでも止まない同僚たちの話を軽く受け流しつつ、私は仕事を捌くのだった。
定時で上がることが出来たので竈門くんを迎えにいくと、そこには珍しくニムラもいた。
「あれ、旧多さん。珍しいですね」
「白代上等、お久し振りです」
「萼さん、おかえりなさい」
「ただいま、それじゃあ行こうか」
「はい！旧多さん、失礼します」
「お気をつけて～」
ニムラに見送られて私と竈門くんはその場を去る。
今日のニムラの外面も完璧だったな……ニムラの事思ってるうちに有馬さんにも会

いたくなってきた。また卓上戦闘やりたい。いいなあハイセ……

「萼さん」

　竈門くんから呼び掛けられて我に返った。危ない危ない。

「何？」

「さっきの、旧多さんのことなんですけど……」

「ああ、何かあった？」

　ニムラが余計なこと言って混乱させてないといいんだけど。

「ルトに気を付けろって言われて……どういう意味ですか？」

　ルト？ルトに気を付けて……わざわざ言うことだろうか？基本的に和修の喰種は外に出られないから白日庭（にわ）か宗家にでも行かない限り会うことはないと思うんだけど……でもニムラはふざけたり曖昧にぼかすことはあっても意味のないことは言わないから――

「ルトは私の幼馴染み。基本的に家から出ないからまず会うことはないと思うけど……そうだね念のために竈門くんにもクインケの使い方教えておこうかな。私も職業柄喰種から恨まれやすいし、迎撃手段があるに越したことはないから」

　たぶんないとは思うけど。内心そう思いながら歩く。

　その時の私はまだ何も知らない。

何も思い出してすらいなかったのだ。

番外編
御呼びじゃありません。

「いい気になるな、この人でなし！」
突然声を張り上げて振りかぶって来たので――鬼の何倍も遅いそれを私はひらりとかわした。
事の始まりは私の蜜柱襲名から次の柱合会議でのこと。
会議も終盤に差し掛かったときに襖を開けて二人の隠が入ってきた。――それぞれ私としのぶさん付きの人たちだ。
「か、会議中のところ失礼致します！」
「もうほとんど終わっているから大丈夫だよ、それで何かあったのかな？」
お館様から優しく促されて乱れた息を整えると再び口を開いた。
「蝶屋敷で一人の隊員が暴れていまして」
「呼吸を使って暴れているため我々や弱っている患者、カナエ様たちでは太刀打ちができません！」
「興奮しているため言葉のほとんどが聞き取れないものでしたが、とにかく蟲柱様と蜜

柱様に会わせろと言って聞かないんです！」
しのぶさんとお互いに顔を見合わせて首を傾げる。
いくら蝶屋敷とはいえなぜ私としのぶさん両方？心当たりは全くないのだが、とにかくそのままにもしておけないため察したお館様によって会議は閉じられ私たちは蝶屋敷へと向かった。
蝶屋敷は元花屋敷を増築する（正確にいうと花屋敷と渡り廊下で繋がっている）形でそこにある。屋敷二軒分の広さと鬼殺隊唯一の医療機関ということで庭も広い。が
「〜〜〜〜！っ――――!!」
奥の、蝶屋敷からの物凄い怒声に思わず慄いた。
「……まったく、ここをどこだと思っているんでしょうねえ」
しのぶさんも同じだったらしく静かに能面のような笑顔で青筋を立てて音源の病室へ進んでいく。
するとそこには刀傷などでボロボロになった病室で喚き続ける少女と隅で塊になった患者となほちゃんたちを守るように少女に対面するカナエさんがいた。
「いい加減にしてちょうだい。ここは皆が療養するための場所であって貴女のような誰彼構わず刀を向けるような人のいるところじゃないわ」
いつもの温和な彼女からは想像できないほどの冷たい声だ。しかし一見気が違って

いるように見えた少女ははっきりと敵意と憎悪を孕んだ目で言い返してきた。
「呼吸も使えないような愚図に指図されるいわれなんてないわよ！」
そして少女はカナエさんに向かって日輪刀を――！
ガッ
「え？」
私はカナエさんを抱えて後ろに下がり、しのぶさんは日輪刀で少女の日輪刀を無効化した。日輪刀を折ったのだ。
しのぶさんは鬼の頸を切れない柱だが――それは単純に両断する圧力に耐えられるだけの筋肉がないだけであり、こと『突き』に関しては鬼殺隊随一の技術を持つ。そんな彼女の、その戦い方に最適化された彼女の日輪刀の一撃を受けた少女の日輪刀は呆気なく砕け折れて刀身が床に落ちる。
「カナエさん、怪我は?!」
「しのぶ！萼！」
「……丸腰の人間に日輪刀を向けるなんて何を考えてるんですか？それに私の姉が呼吸を使えなくなったことはご存じですよね？」
「そうよ！だから柱が空いたと思って期待していたのに！なんで妹が後釜に納まるのよ!!贔屓よ！だいたい蜜柱とか訳わかんないのまでいるし！柱の座が増えるならそれこ

そ私が抜擢されるべきなのに!!」

まだ言い足りないとばかりに喚き続ける少女を尻目に私は再び首を傾げた。

はて、たしかに今の甲の隊士たちの中であと一歩で柱に昇格可能な隊士はわずかながらにいることはいるが、その面子の中に女性はいなかったように思う。しのぶさんもそう思ったのか怪訝そうに問いかけた。

「柱は、鬼の討伐５０体もしくは十二鬼月の討伐を成してこそお館様によって下賜されるもの。現柱たちに継子はいませんし、今の甲の隊士の中であなたは記憶にないのですが。失礼ですけどあなたの階級は？」

「か、階級なんてどうでもいいでしょ!?大体――――！あんた」

言葉に詰まった少女はしのぶさんと目を合わせないように視線を泳がせると私と目が合う。すると彼女は顔色を変えた。

「なんであんたみたいな化物がこの世界にいるのよ!!」

「？」

たしかに私は混血に当たる「半人間」だが、この世界でそれを知っているのはお館様とその関係者、そして柱全員だけのはず。何より前の世界の関係者や庭の関係者を思い返してみても少女のような子は見つからなかった。混乱する私に少女は更に食って掛かる。

「おかしいと思ったのよ！ここは私の世界なのにっ！あんたみたいな異物がいていいところじゃないのよ！そこのウザイ女と一緒に童磨に殺されて死ねばよかったのに!!」

「！あなたっ「黙れ」

今、この少女はなんと言った。

カナエさんに死ねばいいと言った？

考える前に声が出た。

「ひ」

「なんで私程度に怯むの？柱にはしのぶさんも含めて私なんかより強い人たちばかりなのに。継子にならずに柱になるって言うならそれなりの自信と実力があるはずだよねえ。それに」

私は少女にゆっくりと近づきながら傷だらけになった病室を見回す。

「よくもまあここまで破壊したよね。これは私としのぶさんに対しての当てつけ？それとも碌に抵抗できないような自分より弱い人たちしかいないうちに自分の力を誇示しようとしてやってきたとか？」

「ち、ちが「そうだよねえ、そんなアホみたいな考えで自分のお世話になれる唯一の医療機関を敵に回すわけないよねえ」!!っ」

少女がはっとして顔を青くしていく。今更気づいたような感じだ。

「見たところあなたに目立った外傷はないし、言ってることは理解できないけど意識もはっきりしているみたいだから……カウンセリングとか要らなさそうだし。しのぶさんとカナエさんとここにいる看護師、患者、隠の人に謝罪したら今回の事には目をつむりましょう」
「だ、誰が「じゃあ貴方のお給金でここの修繕費、それから威力業務妨害とカナエさんへの名誉棄損で法に訴えた場合の慰謝料すべてを賄ってもらうことになるけれど……いいよね？」
固まる少女。分かってなかったの？というか理解できてる？
「ご、ごめ「ご迷惑をおかけして」ご、ご迷惑をお掛けして「大変申し訳ございませんでした」大変申し訳ございません、でした……」
そして私は怯える彼女にしか聞こえない声で釘を刺した。
「次ここやここの関係者に何かしたそのときは——貴方の死に方を選んであげる」
「ひいぃぃ!!」
よろけ転がるようにして少女は病室を出て行った。
その程度なら来るな。
「な、なんだったの？一体」
「さあ？でもまああそこまで言いくるめたらしばらくは落ち着くでしょう」

　あんまりなことに素の口調に戻っているしのぶさんと同じように呆れている私は頭が痛い。
「ありがとう、二人とも。いきなり怒鳴り込んで来て……今日はカナヲとアオイちゃんが買い物当番だったから対処できる人がいなかったの」
「とりあえずしばらくの間は私と蕚さんどちらかが蝶屋敷に常駐していた方がいいのかもしれません」
「ですねえ……また来られる前に何かしら対策は立てておかないと」
　一先ず患者は全員別の病室に移動してもらい、私としのぶさんで折半して病室の修繕費を出した。

「にしてもなんで知ってたんでしょう」
「知ってた……そういえばそうよねえ」
　私が言いたいことを察したのかカナエさんも頷く
「私たちが上弦の弍に遭遇した事はたしかに知れ渡っているだろうけどその「名前」を知ってるのは実際に遭遇した蕚だけのはずだし」
「私の体質のことにしてもそれを知ってるのは蝶屋敷の関係者と柱、お館様とその関係者のみですし、皆そういう事には口が堅い人ですしねえ」

「ああ、そういえばあの後例の隊士について調べてみたんですけど、彼女の階級は壬。これと言って目立った功績・違反はないようですが……合同任務で一緒になった他の隊士たちや隠の皆さん曰く、『任務に対して非協力的で、仲間や民間人の事を考えずに刀を振るう』というような苦情が出ているようです」

「隠れた問題児」

「まさにそれです」

三人でため息を吐いた。要は階級どころの話ではなかったのだ。

「それにやや妄想癖のようなものがあるらしくて、『原作』とか『私の作った世界』とか……」

「現実と妄想の区別がついてないんでしょうか……」

「それは……危ないわね」

下手するとメンヘラ化してもっとヤバいことになるのでは……？という私たちの共通認識によりお館様に報告して結局空き病室の一つをカウンセリング室（平たく言うとお悩み相談室）にすることになった。もちろん鬼殺隊全体に注意喚起し、精神的に病んで不安定になる前に来るように言って例の少女のような隊士が出ないように入院患者にも根気強く言い聞かせた。最初は半信半疑だった者たちも直しかけの彼女が暴れた病室に連れていき、その有様と当時の状況を事細かに話すと大きくうなずいた。

一方の少女はというと、しのぶさん曰く隊士全員から露骨に避けられているらしい。まだ精神疾患の認知が浅かった大正というこの時代で、彼女は相当肩身が狭くなっていることだろう。実際、腫物扱いなんだとか。でも私たちはそっち方面の専門家ではないし、また蝶屋敷を襲撃されたくないのであえて手を出さずにいる。君子危うきに近寄らず。

そうしてしばらく、少なくともカナヲが選抜を抜けて正式にしのぶさんの継子になるまでは何の音沙汰もなかったのだが、カナヲが継子になったのを聞きつけたのか今度はカナヲに絡んできたらしく蝶屋敷までついてきたのだ。

「この子はまだ鬼殺隊に入隊したばかりなのになんでいきなり継子になってんのよ！どうせまた身内贔屓でしょ!!」

なんて威張り散らしてまたあーだこーだ言い始めたので面倒になった私たちはそんな少女に提案した。

「ならカナヲと一緒に稽古してみる？」

そして稽古をつけたのだが

「なんなのよ、こんな硬い瓢箪割れるわけないでしょ!?頭イカれてるんじゃなバンッ

……」

隣のカナヲが自分の胴くらいある瓢箪を割ったことで信じられないとばかりに私の方を見る。

「うん？この瓢箪割りは全集中の常中を習得するためには外せないから。それと、常に全集中の呼吸しててって言ったよね？してたらあなたの通常より小さいのは割と簡単に割れるはずなんだけど」

「……」

――四日と持たずに逃げた。

何が何やら事情はよく知らないが去り際に『こんなの私の夢小説にない！』『化物と人間を同じ物差しで測らないでよ！』と言われそれでも相手にしていないように思われたらしい。

「一滴の愛ももらえなかったジャンクな和修の化け物のくせに!!」

は？

今この子なんて言った？

聞き間違いでなければ

「――今、なんて言った？」

「はぁ？――あ」

気付いたように彼女は見開いて口を戦慄かせる。言ってはならなかったことを口にしてしまったとでもいうように。
「ねえ」
「は、い」
「もしかしてさあ――私の本名、知ってる？」
「!!」
少女の顔から血の気が引いた。
そう、この世界に和修はいない。
私は再び問いかける。
「だんまりは、良くないなあ」
「あ――わ、私」
「うん。言ってごらん？私の本名」
ガタガタと震える少女ににっこりと笑顔で対応する。
「ご、ごめんなさ！ごめんなさい!!だから命だけはっ」
「みーんなそういうけどさあ、実際命以外むしり取られるって結構悲惨だよー？素直になった方が一番最速で楽になれると思うんだけど……ねえ、どう思う？」
「ひ、ひぃ」

この反応からして私の本名を知っていると見て間違いない。さて、どうしようか。
そう考えていると聞きなれた声がした。
「萼」
「カナヲ」
「そろそろ、任務の時間」
「ああそっか。ありがとう今行く――じゃあさよなら」
「っ」
そのまま少女は一目散に逃げて行った。
私もそのままカナヲと一緒に屋敷に帰ろうと並んで歩く。
「あの人ばっかり、ずるい」
「ん？」
「私も萼と、稽古したい」
「！うふふ。うん。じゃあ任務から帰ってきたらしようか」
そして私はカナヲとの時間を確保すべく、予定を確認するのだった。